機動戦士ガンダム UC.0094 ―巨人の末裔―

一一人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ティターンズ。地上至上主義を掲げた組織の崩壊から早数年。咎を受けた者が多くいる中、散り散りにその身を隠した者も相当数居たのは周知の事実だった。

懸念された再興の動きが始まる。その裏で暗躍する別の影。

事態に巻き込まれたイオリ・ノースフィールドは時代と思惑渦巻く混沌の戦場に飲み込まれていく。

目次

第零話「胎動」 1
第一話「邂逅」 6
第二話「捕獲」 22
第三話「策謀」 38
第四話「予兆」 60
第五話「過去」 80
第六話「真実」 112

第零話「胎動」

ほとんどの書類に目を通し終わったあと、グレッグ・ホーキンスは大きな伸びをした。細かい事務作業をしているとどうも肩がこる。宇宙ではさほど酷くなかった持病の肩こりも、１Ｇ下、コロニーではなく本当の地球の重力下では特に酷かった。

「おつかれさん。もうあがっていいわよ」

通りすがりに肩を叩くのは、ルーシー・ワトソン。ブロンドの髪が特徴の、連邦軍地上監査隊の敏腕監査員だ。

今二人がいるのは、旧アジアのとある連邦軍基地。かつてティターンズが拠点としていた施設の一つだ。多くの装備や資料が持ち出されているが、〝例の計画〟関連だけは何故かここに残されていた。

「この仕事も、もう終わりですね。あとはアナハイムが引き継ぐみたいですし」

「あら、そうでもないわよ？」

ルーシーは意味ありげにそう呟くと、手際よく壁際に設置されていた端末を操作する。

「先輩？」

幾重にも施されたセキュリティロックを解除すると、そのデバイスがあった壁自体が、大きな音をたてて扉のように開いた。すでに錆が回っているのか、耳につく金属音をあげる。

ルーシーはその扉の向こうに続く通路を進む。置き去りにされたくはないので、グレッグもその後に続いた。

はたして、二人が辿りついたのは格納庫の一角だった。他のブロックからは入れないようになっている、非常に巧妙に隠された場所だった。

「先輩、これは……」

そこにあったのは、宇宙世紀に生きる人間ならば誰もが一度は聞いたことがある、伝説的な名前をもつモビルスーツ。

「ええ、〈ガンダム〉よ」

二つの角に、二つの目。連邦機らしい角張ったシルエット。それは紛うことなき〈ガンダム〉だった。連邦軍が作り上げたモビルスーツだ。勿論、ここにあるのはＲＸ―７８そのものではない。限りなくそれに近い意匠を含んだ別の機体だった。

「ＲＸ―１７８ガンダムＴＲ―０〈アダムス〉。ＴＲ計画の始祖でありながらにして、計画から外れた番外機」

「こんなものが……」

感慨深げに見上げるルーシーの横顔に、グレッグは一つの疑問が浮かんだ。

「……ところで先輩、なぜこの事を……？」

ニヤリ、ルーシーはそう形容するのがふさわしい不気味な笑みを浮かべた。グレッグはルーシーとミドル・スクールからの付き合いだったが、ルーシーのこの様な表情を見たことは無かった。

……いや、それは間違いだ。

ＵＣ．００８４年頃に、ルーシーは一時期行方知れずになった事があった。もちろん、無事に帰ってきたのだが、ルーシーはその時のことを一切語ろうとしなかった。それ以降、ふとした瞬間に今までに見せなかったような表情をすることがあったのだ。

もしかすると……。グレッグは一抹の不安を覚えた。そして、直後にそれが正解であることを悟った。

「先輩……」

「動かないで。じっとしていれば危害は加えないわ」

後頭部に突きつけられた冷たい鉄の口が全てを物語っていた。

「あの時、なにがあったんですか」

「なにも」

「嘘だ」

「嘘よ」

耳が痛くなるほどの沈黙が襲う。

「目的だけは、教えていただけませんか？」

「そうね……」

「強いて言うなら、ティターンズの再興」

やはりか。グレッグは逸る気持ちの中で妙に納得していた自分の思考に驚いた。同時にルーシーというかけがえの無い先輩を止めないといけない、という使命感に駆られた。

「それは、あなた個人の目的ですか？それとも……」

すこしでも隙を見つけるために咄嗟の質問を口にする。無限にも感じる時間の中で、実際に行動に使える時間は非常に限られていた。そして、その糸口は一度見失ってしまえば二度と現れないことも心得ていた。

「愚問ね、後者よ。もしかすると同志は貴方の傍にもっといるかもしれないわ」

グレッグに、その返答がどこまで信憑性に足るものか判別はつかなかった。ティターンズは連邦の恥ずべき汚点として、とうの昔に関係者の殆どが何らかの処罰を受けていたからだ。しかし、先のジオンがそうだったように逃げ延びたものがいたことも承知している故に、特段その手の話に詳しいという訳では無いグレッグには、明確な判断をする事が出来なかったのだ。

だが、それを真実ととってもブラフととっても、今の状況下においてその事実が表面化する可能性は限りなく低いと考えられた。多かれ少なかれ血を流す事態になったとしても、今の自分のように個々の行動の巻き添えが犠牲になるだけで、本部が本腰を入れれば一瞬で摘み取ることが出来る芽でしかない。

一瞬のうちにそれだけの思考を巡らせたグレッグが次に見たのは、ルーシーが〈ガンダム〉に向けて駆け出した後ろ姿だった。

「待ってくれ！先輩！」

声の限り叫ぶが、当たり前だがルーシーは振り返らなかった。

ルーシーはコクピットから垂らされた昇降用のワイヤーに足をかけて上昇する間にもグレッグに銃口を向けていた。仮に逆らって動き、発砲されても当たる距離ではないのは明らかだったが、グレッグはそれをしなかった。

理由は本人にもわからなかった。そうしたところで止められないという一種の諦念か、あるいはルーシーへの恋愛感情か。

ルーシーがコクピットハッチの向こうへ消えるとすぐに〈ガンダム〉特有のツインアイに明かりがついた。だが、〈アダムス〉はそこから動くことは無かった。

代わりに、グレッグが見守る中で〈アダムス〉は大きな爆炎をあげた。自爆だった。

呆気に取られる暇すらなく、目の前にいたグレッグは爆風で吹き飛ばされていた。

辛うじて息を続けていたが、生きている方が逆におかしいほどの火傷を受けた上、吹き飛ばされた衝撃で内臓や骨にも深刻なダメージを負っている。グレッグ自身、生き延びるつもりはなかった。

程なくして、衝撃と熱で脆くなった施設はどこからとも無く自壊した。瓦礫が降り注ぐ中、グレッグは伸ばした手の力を失った。薄く開かれた瞳から光が消え、細くなった息を止めた。

数日後、地球圏の新聞にこの事故の記事が載ることになる。もっとも情報局の横槍が入り、大した情報は載せられてはいなかったのだが。

「あらかじめ細工をしておくとはね。よくバレずに済んだもんだ」

その記事に目を通した男はコーヒーを啜りながら呟いた。ゆったりとした椅子に身を投げた細身の男は、目にかかったボサボサの茶髪をかきあげ、机に置かれていた眼鏡をかけながら手元のモニターに視線を向ける。

「マユ・フックシューズ、ねぇ……」

映された白髪白眼の少年とも少女ともとれない子供の写真を一瞥すると、画面をスクロールさせ、今度はＭＳが表示されたページを開く。

ＴＲ―Ｖと記されたその機体の下にもマユの名前が見受けられる。

「ひとまずは彼らに任せるしかないか……」

男は部屋の入口に立っていた女、ルーシーに声をかける。

「……」

無言で頷いた彼女はそれだけを返事にし、部屋をあとにした。それ

を見送った男はため息混じりの笑みを浮かべ、反対に窓の外へ視線を投げた。そこには高い空と果てしなく広がる南の海だけがあるのみである。

「さて、神はどちらへ笑うかな」

その呟きに答える者はいない。

第一話「邂逅」

深淵の闇と表現する以外、言葉を見つけることが難しいほど広大な宇宙。無数の星の瞬きとは別に、青白い閃光が見える。数は一つ。それは同じく青白い色をした尾を引き、デブリ群の間を縫うようにして高速で動いていた。白いカラーリングで三角形に近い形状をしたＭＡ（モビルアーマー）、コードネームは〈シルフレイ〉。旧ティターンズの機体であるギャプランをベースにした試験機だった。本体の両脇にある大型のビーム砲と思しきユニットには大型の推進バーニアが、また機体の至るところに小型の姿勢制御バーニアが備わっている。

さらに、それを追うようにして三つの光点、ＵＣ．００９０年代では一般的と言える連邦の量産機〈ジェガン〉が宙を舞う。

〈ジェガン〉隊を率いる、隊長機と思しき先頭の一機が散発的にビームライフルを撃つが、ピンク色の光弾は〈シルフレイ〉を掠めることすらなく明後日の方向へ飛んでいくのみだった。

しびれを切らしたのか、隊長機はハンドシグナルで合図を送る。三手に分かれて追い込もうという魂胆だった。おあつらえ向きな事に、〈シルフレイ〉の進行方向は今以上にデブリの密度が濃く、その作戦は理にかなっている。

〈シルフレイ〉の退路を断つように展開した〈ジェガン〉は徐々にその輪を縮めていく。が、〈シルフレイ〉は予想外の動きに出た。

「っ……!?」

その場で全身のスラスターを器用に吹かして瞬間的に回頭。そしてその場で〝変形〟した。

☆　☆　☆

戦闘が行われているその宙域からやや離れた地点に、連邦軍の中では一般的な艦船、クラップ級巡洋艦が停泊していた。ブリッジには三人のオペレーターと二人の軍服の男、そして数人のＡＥ（アナハイム・エレクトロニクス）社の技術員が見受けられた。オペレーターは手元のデバイスとモニター、残りの者達はメインモニターに視線を向

けていた。そのモニターには、その動く光点が映し出されていた。画面は動きに追従しながら徐々に拡大されていく。普通なら従って映像が荒くなるが、リアルタイムでＣＧ処理されているために非常にクリアな映像だった。
「〈シルフレイ〉、変形を確認。ＭＳモードへ移行。白兵戦データ観測開始。観測時差０．０５」
　オペレーターのうちの一人、若い東洋人の女性だ、が刻々と変化するあらゆる数値やデータを報告していく。しかし、二人の軍服の男は不満げな表情を浮かべていた。
「報告値に届いていないじゃないか」
　二人のうち、若く長身の方の男が呟く。襟元のバッジは大佐を示すものだった。
「パイロットの調子、あるいはデバイス側の問題であるとしか……。”例のシステム”はパイロットが機体に同調するのが前提ですから……。それに、報告させていただいたのはあくまでシュミレーションの物で……」
「そんなことはどうでもいい。とにかく結果を出せと言っているんだ」
　評価試験は良くも悪くも結果主義のシンプルな世界だ。いかに綿密な準備をしてきたとしても実際の試験で結果が残せなければ全てが無駄に帰す。
「落ち着きたまえ。君の焦りはわかるが、ここで気を揉んでもどうにもならんだろう？」
　もう一方、准将を示す階級章をつけた軍服の男が大佐を窘める。が、決して本人も冷静な訳ではなく、あくまで言葉の上であることは一目瞭然であった。
「それで、どうなんだ？」
「〈シルフレイ〉、出力６５％前後で推移中。仮想敵機、追いつけません」
　状況だけ見れば、六割強の能力で現役の〈ジェガン〉を振り切れるだけの出力を持っているという事は驚異的である。しかし、今回の

試験、特に二人の軍服の男達にとっては満足のものでは無かったのだ。
「こちらＯＰより試験中のＳＲ０１へ。機体の調子を報告せよ。予測数値に達していない。機器の不具合でもあるのか？」
しびれを切らし、大佐の男は自らデスクの上のマイクを手にした。
（ＳＲ０１よりＯＰ。機器、及びパイロットに問題ありません）
応答したのは四十代ぐらいの男性だった。名前をグローレン・ベルバーグ。旧ティターンズのオーガスタ研究所に所属していた大尉だ。表向きはオーガスタ研究所を初めとしたニュータイプ研究所、所謂”ニタ研”の関係者は、ティターンズのなかでもその後の処遇は特に厳しく処理された事になっているが、その時培われた成果を失うことを恐れた一部の軍幹部の策略によって匿われた者も少なからずいたという。グローレンもその一人である。
「ならば、何が問題だ!?」
（申し訳ありません。こちらとしてもオールグリーンとしか……）
理不尽な怒りに、グローレンも言葉を濁すしかできない。そもそも艦の艦橋にどっしりと構えて指示しか出さない高官に考えられる可能性を報告したところで理解できるわけがない。仮にさせようとしても何時間かかるだろうか。
心の中で悪態を付くグローレンだったが、その思考は突然の警報音によってかき消された。
「一体どうしたんだ!?」
「Ｅセンサーに反応！後方に熱源確認、ネオジオンです……ッ！」
ブリッジに緊張が走る。准将の顔にも焦りが見えた。
メインモニター上のセンサーに映るのは、戦艦を示す大きな点と、そこからこちらに向かう小さな点。おそらくはモビルスーツだろう。数は四つ。
「仮想敵機隊、及び〈シルフレイ〉、ビームライフルのリミッター解除を許可する、ヤツらを蹴散らせ！」

「待ってください、大佐！こんな試験機でいきなり実戦なんて……！」
（さっきも言っただろう？性能がでなければ用無しだ。それに、実戦の方がより則したデータが採れる。ここまでの失態、しっかりと返上してもらおうか。機密保護のために無線は封鎖する。後は、わかってるな？）
　それだけ言って大佐は一方的に無線を切断した。
　残された静寂の中でグローレンは目の前のモニター上部に貼られた写真に目を向けた。白髪白眼の無表情な少女の顔をなぞると悔しげに強く手を握りしめた。
「まぁ、あんな事があったんだ。力を貸すわけもないか」
　含みのある呟きをこぼし、グローレンは自らの過去を嘲笑するしかなかった。
☆　☆　☆
（友軍から救難信号ぅ？）
　無線越しに聴こえる間の抜けた声。こんな神経を逆なでするような喋り方をする男は、この艦に一人しかいない。イオリの同僚、ラキア・シュバルツサザン少尉だ。
（いちいち声大きいわよ……。で、何があったんです？）
　ラキアを窘めつつ、先を促してきたのはクリスティーナ・ノヴェンバー少尉。ブリッジス隊の紅一点だった。女性だがその技量はなかなか侮れない。
（詳しいことは伏せられている……、まあよくある事だがな、とにかくこの先の宙域で行われていた友軍の試作機のテストにネオジオンが介入したらしい。なんでも相当な腕利きがいるらしくてな）
　的確な説明にイオリは舌を巻いた。流石は、ターツァ・ブリッジス大尉だ。隊員達の不満事にもちゃんと理解が及んでいる。前任者はとんでもない曲者だったものだ。イオリはふと懐かしく思い出していた。
（例の〝シャアの再来〟？）
（んなものは知らん。余計なことは考えるな。目に見えたものだけを信じろ）

「隊長殿は信じなくていいんです？」
ラキアとターツァ大尉の会話の揚げ足をとってみる。普通ならば上官への無礼を咎められるが、この場合ではそのようなことは無い。
（無論だ。自分を救えるのは自分だけ。何度も教えただろう？）
それがターツァ大尉の教えだったからだ。
「了解」
やはり、持つべき上官はこういった人だ。改めてイオリは認識する。
（イオリ少尉、カタパルトへ）
ブリッジの女性オペレーター、アリーシャ・カロジェッツがリフトへ促した。まだ着任してから日が浅いからか若干緊張しているように見えた。
「おうよ」
イオリは配慮して淡々とした返事を返した。ヘルメットのバイザーを降ろし、気密の確認。グローブをはめ直してレバーを握り直す。そうしている内に目の前の扉、もちろんモビルスーツサイズである、が大きく開く。
モニターにカタパルトの接続を示すウィンドウが示さたのを確認して、イオリは大きく息を吸いこんだ。
「イオリ・ノースフィールド、Ｂ００２。行きます！」
発刊申告と同時にカタパルトが弾かれたように滑り出し、６０ｔ近い総重量を持つ〈リゼル〉を押し出す。全身にかかるＧに歯を食いしばりながら、射出のタイミングでフットペダルを踏み込んだ。
宙に飛び出すや否や、バックパックのスラスターが火を吹く。母艦であるクラップ級〈レオントキール〉から離れ、〈リゼル〉は変形、つまりはウェイブライダー形態へと移行した。
イオリに続いて次々に出てくるブリッジス隊の〈リゼル〉も同じように変形し、さながら戦闘機の編隊のように展開する。
（お前ら、気合い入れるぞ！）
ターツァ大尉のお決まりのセリフに、隊員がそれぞれの応答を返

す。

☆　☆　☆

遠目にそれら—情報によると、クラップ級〈ボマレア〉と艦載機兼、今回の試験の仮想敵機が数機、そして目標、を認識できる距離まで来る頃には、すでに向こう方の方も、当たり前だがこちらの接近を認知していた。

モニターの中央でポップアップ表示されたカーソルの中に映る白い機体。連邦軍が一年戦争に勝利することの出来た一つの要因。

「ガンダム……」

画面越しに睨む白い悪魔の眼光に、ファムは細く呟きを漏らした。

白い悪魔と呼ばれる程の脅威はプロパガンダとしては格好の材料で、以後も連邦軍はことある度に〈ガンダム〉を造り、その力を誇示してきた。

無論、齢17の少女の記憶ではあまり確かなことは覚えてはいなかったが。

（姐さん、ビンゴみたいですぜ）

ビンゴ、というのは件の〈ガンダム〉の事だ。そう、ファムたちの目的はその〈ガンダム〉であった。

（どうするんです？捕獲、あるいは破壊ってな話ですけど）

部下であるモンテロールの無線越しの問いかけに、ファムは微笑を浮かべながら頷く。

「聞かずともわかっているんだろう？」

（へへ。あたりまえですよ。6年も右腕をやってたら嫌でもわかるってもんだ）

「ほう？ならばその右腕の実力とやらをたんとお目にかかりたいものだな」

（おっと、口が滑った）

恒例、とも言えるほど頻繁に行われる戦闘前の二人の掛け合いが小隊全体の緊張を解きほぐす。長く戦場に身を置くものとはいえど、命のやり取りを前にして緊張のない者はごく少数であった。

ファムの駆る〈ギラ・ドーガ〉とは別に、三機の〈ギラ・ドーガ〉が続く。後方の三機はくの字を描くようにデルタ陣形を形成していた。
「私が〝奴〟の相手をしている間に、お前達は護衛のハエ共を堕とせ。その間に〝奴〟を無力化する……というのが理想だな」
（善処しますぜ）
「なんだ、私の〝右腕〟の割には消極的ではないか」
（そりゃあ相手は天下の〈ガンダム〉さんですからね。何されるかわかったもんじゃない）
「それもそうか」
ふふと笑ったファムはフットペダルを踏みこむ。スラスターがひときわ大きな光を吐き出し、〈ギラ・ドーガ〉は大きく加速した。
「全機、健闘を祈る！」
（了解！）
各機、散開。ファム以外の〈ギラ・ドーガ〉は、それぞれが〈ガンダム〉の随伴機であるジェガン達に襲いかかった。そして、ファムは自らの〈ギラ・ドーガ〉を〈ガンダム〉へ向けて前進させた。
両肩のスラスター付きのビーム砲、背中に一つ飛び出たスラスターユニット、細い三つ指タイプのマニピュレーター、と特徴をあげればキリがないような特異なシルエットがモニターの中央に捕捉される。一向にその場を動こうとせず、猛禽類にも似た鋭い眼光を向けていた。〈ギラ・ドーガ〉が、自らのサブマシンガンの安定射程に入ろうというタイミングで、〈ガンダム〉ははじめて動きを見せた。両肩のビーム砲が一閃し、〈ギラ・ドーガ〉に迫る。その動きを予想したファムはそれを回避する。が、予想以上の出力の光線の余波で〈ギラ・ドーガ〉の装甲表面が薄く焦がされていた。その軌道のまま、〈ギラ・ドーガ〉はスラスターを全開させ、〈ガンダム〉に迫った。〈ガンダム〉のパイロットもその軌道を読んでいたらしく、バーニアとＡＭＢＡＣを利用した巧みな動きでそれを回避していた。
〈ガンダム〉は姿勢制御バーニアを使い、瞬時に方向転換すると、すれ違った〈ギラ・ドーガ〉に急速に接近する。同時にビームサーベ

ルを展開し、強烈な刺突が〈ギラ・ドーガ〉に迫る。ファムは自機のバーニアを全力で吹かせ、上方へと身を翻す。が、それを読んでいたかのように、〈ガンダム〉の肩部ビーム砲上面に備えられたハッチが開き、霰のようなマイクロミサイルが飛び出した。それを避けたファムは驚愕に目を見開いた。一瞬のうちに〈ガンダム〉が距離を詰めきっていたのだ。

そしてその刹那。

―やめて。

ファムの頭を声が掠めた。いや、正確に言えば降ってきたのだ。

こいつ、強化人間か……？

ファムは徐々に意識が鮮明になるのを感じた。だが、不思議とその声に懐かしさを感じた。そして、同時に不覚にも己の出自に重ねてしまっていた。

ファムも強化人間であったのだ。それもネオ・ジオンのではなく、今相手をしている連邦の、ティターンズの。

一瞬、脳裏にあの時の光景が浮かんだ。

撤退戦にかこつけた、自分を含んだ〝失敗作〟の処分。あの時も確か〈ガンダム〉に掴まれて……！

「あっ……！」

気がついた時には既に遅かった。

〈ガンダム〉の腰部後方に備わっていたサブアームがいつの間にか〈ギラ・ドーガ〉を拘束していた。簡易的なマニピュレーターだが、見事に凹凸を掴んだらしく、逃れようにも逃れることは出来ない。

ならば焼き切るしか……！

ファムは即座にサブアームへビームサーベルを宛てがうが、〈シルフレイ〉は無情にもそれを腕ごとビームサーベルで切り払った。

咄嗟に反対側の腕でもビームサーベルを抜くが、そちらは三つ指に抑え込まれてしまった。

その姿勢のまま、〈ガンダム〉は無駄に大きい肩部スラスターから光を迸らせる。その推力で〈ガンダム〉は近くの大きなスペースデブリに〈ギラ・ドーガ〉を叩きつけ、馬乗りのような格好となった。衝

撃がコクピットにも伝わり、ファムは呻き声を漏らす。
目の前のモニターいっぱいに映し出された〈ガンダム〉の顔。眼、即ちツインアイから放たれる視線はまさに殺気そのものを帯びていた。ふと、額の部分に目をやると、「ＴＲ―Ｖ　Ｓｉｌｆ　ｌａｙ」の文字列が目に入る。
「〝Ｓｉｌｆ　ｌａｙ〟……シルフレイ……」
この名前を知っている……？
先の声と同じ種類の懐かしさがファムの胸を満たしていた。忌むべきあの頃の記憶。
あの頃？
懐かしさに由来する場違いの安らぎと、繰り返される疑問による不安。それから絶体絶命の危機にある緊張。
不安定な心情を示すように動悸が早まり、胸を締め付けていく。
その中で〈シルフレイ〉は肩部ビーム砲を〈ギラ・ドーガ〉のコクピットに突きつけた。数秒後にはそこから放たれる光条によって〈ギラ・ドーガ〉は腹部に大きな風穴を開けることになるだろう。そこにファムの命はない。
ふいに奥歯を噛み締めながら、ファムがそう悟った時。
（姐さんになにしやがる！）
無線から響く声。モンテロールだった。こちらへ向けてスラスター全開の突貫姿勢で突っ込んでくるのが見えた。
「駄目だ、モンテロール！下がれッ！」
ファムが叫ぶが、返事はない。夢中のあまり気が付いていないのか。いや、そうではない、自らの命を犠牲にしてでも、ファムを助けようとしているのだ。
〈シルフレイ〉は腰部のサブアームを器用に使い、背部にマウントしていたビームライフルが一閃した。モンロールの〈ギラ・ドーガ〉はその餌食となり、あと数十ｍという所で爆炎を上げた。その間に〈シルフレイ〉が振り向くことは一度としてなかった。
―姐さん、あとは任せましたよ。
死にゆくモンテロールの声が頭に響く。

「モンテロールッ！」
強化人間の拡張された感覚機能がそれを拾った。それは〈シルフレイ〉のパイロットにも同じだったのだろう。一瞬、拘束の力が弱まった。ファムはその隙をついて〈シルフレイ〉の拘束を逃れると、瞬時に距離を取った。化け物じみた瞬発力と加速力の前に、その行為のもたらす効果は些か少ないように思われたが。
ファムは一瞬のうちに宙域を見渡す。強化人間としての感覚を全力に、状況の把握に務めた。
モンロールは今の攻撃で撃墜。ダンケとルイーズは敵母艦を発した増援と応戦。我々の母艦までの距離は……いや、的に位置を特定されないためにも逃げるわけには行かない。〈シルフレイ〉は……。
ファムの視線の先に〈シルフレイ〉はいなかった。
「……！」
直上。正確に言えば宇宙空間に上も下もないのだが、ファムの頭上に〈シルフレイ〉はいたのだ。
ファムはモニターパネルの隅のゲージに目を向ける。推進剤の残量は母艦への帰還を考えても、なんとかなる程度には残っていた。
やれるか？……いや、やるしかない。
ファムは自らを鼓舞して〈シルフレイ〉へ意識を向けた。
だが、〈シルフレイ〉はその場で動きを止めた。苦しげにマニピュレーターを蠢かせると、脱力したかの如く宙に漂い始めたのだ。
さっきの直感が蘇る。〈シルフレイ〉のパイロットが強化人間だったならば、もしかすると昔のように未だに薬物を使用しているのかもしれない。だとすれば、この現象には一つ心当たりがあった。
「薬物切れの発作か……？」
かつてティターンズの研究所で何度も目にした光景を思い出し、ファムははからずも同情の念を感じていた。
ファムは〈シルフレイ〉にマーカービーコンを据え付けると、ダンケとルイーズの方へ視線と感覚を向けた。未だ増援部隊との戦闘を続ける二人はだいぶ疲労しているように見えた。
離脱しようにも、これだけの兵力が残っているならば追撃されて

しまうのは目に見えていた。
「ダンケ、ルイーズ、援護する」
ファムはそう告げると、ビームサブマシンガンの弾倉を交換し、その群れへ近づいて行った。
―助けて。
「っ……」
グローレンは、けたたましく鳴るアラート音の中で目を覚ました。いつの間にか操縦系統は〝例のシステム〟に奪われていたらしい。〝例のシステム〟が全力で稼働したとすれば、それによって発生する加速Gは通常の人間の生命機能に異常をきたすほどのものになる。幸いにして新型の対Gスーツと、割合にしてグローレン自身が平均より対G能力が高かったことによって気絶だけで済んでいた。
だが、問題はなぜ〝例のシステム〟が起動したのか。あまりに非科学的ではあるが、〝父親〟である自分が呼びかけても反応しなかったというのだ。何がトリガーとなった？
ダメだ、答えは出ない。
今わかることと言えば、〈シルフレイ〉が一時的に何らかの理由で機能不全に陥っているという事と、先の〈ギラ・ドーガ〉の脅威が去ったということ。まだ半ばぼやけたままの頭を必死に使い、グローレンは機体の再起動と情報収集を始めた。

「〈シルフレイ〉、応答してください。〈シルフレイ〉！」
オペレーターの半ば怒鳴るような呼びかけに、帰ってきたのは沈黙だけだった。
「機体状況モニターできません！グローレンとの接続も不安定！」
その報告に大佐は顔をしかめたが、反対に准将は落ち着いた表情を浮かべていた。
使い物にならないのは分かっていた。今はデータの回収を優先させるべきだろう。
「交戦中のジェガン隊から何人か回収に向かわせろ！」
慌てた大佐の指示が飛ぶが、准将はそれを手で制した。

「落ち着きたまえ。〝例のシステム〟の発動は確認したんだな？」
　准将の問いに一番ベテランのオペレーターが答える。同時にメインモニターの一部に補足説明を表示させる気配りまでしている。
「はい、間違いありません。現在も発動が確認されてますが、機体制御系統がモニタリング出来ないので詳細は不明です。恐らくはアイドリング状態のままかと」
　准将はオペレーターの返答に満足げに頷く。
「ならば、問題あるまい。長き眠りから覚めたばかりならば動きが鈍るのも当然だ」
「ですが……」
「それに、向こうの頭もジェガン隊に食いついている。手数を割く必要はないだろう」
　次々に並べられる言葉に、大佐は渋々ではあったが椅子に腰を収めた。准将はそれを見ると、再びオペレーターの方に視線を向ける。未だ復旧しないモニタリング機能を相手に格闘するオペレーター達は徐々に焦りの色を強くして行った。
「……もういい。戦果にはこだわらない。それより、〝システム〟の実稼働を優先しろ」
「しかし、データが受信できず……」
　オペレーターの困惑した返答に、大佐は冷ややかな笑みを浮かべて答えた。
「最悪の場合は目視でも構わんだろう。それに、受信はできなくても送信はできるだろう？」
「……っ！ですが、それではパイロットに負荷が……」
「使い捨てのモルモット風情にかける情はない。脳波系に介入しろ」
「りょ、了解しました」

☆　　☆　　☆

「あっ……」
　ふと触れた不快感にファムが〈ギラ・ドーガ〉を振り向かせると、〈ギラ・ドーガ〉の脇を掠めながらバーニアを全開に噴かせ、漆黒の闇

を滑るように突進する〈シルフレイ〉が見えた。一度は身構えたファムだったが、〈シルフレイ〉は〈ギラ・ドーガ〉には一瞥もくれず、自身の母艦であるクラップ級へと吸い込まれるように突き進んでいた。
「何をする気だ……？」
　思わず口をついた疑問の答えは、次の瞬間にとった〈シルフレイ〉の行動で示された。肘から前腕部に沿ってマウントされたビームライフルの銃口をクラップ級のブリッジに向けたのだ。

☆　☆　☆

「システム復旧、モニターできます！」
　オペレーターの一人がが大佐を振り返りながら報告の声を上げた。だが、大佐や准将、他のクルー達の耳にその言葉は届いていなかった。
「何が起きているんだ……!?」
　ブリッジの目の前でビームライフルを構え、意志の気配を感じない緑色に光るその双眸を、なにかに取り憑かれたかのように呆然と眺めていた。
（ちょっと細工させてもらいました。お楽しみいただけてますか？）
　何者かの声、少なくともその場にいる者では無い、人を見下した声がブリッジに響いた。
　同時に〈シルフレイ〉を観測していたいくつかのモニターのうちの一つが、ノイズが混じりながら別の画面に変化していた。
（他人の描いた線をなぞるのは赤ん坊でも出来ることですよ）
　画面に映るのは眼鏡をかけた男性。ボサボサの茶髪をいじりながら、人の神経を逆なでするような猫なで声でニヤリと気味の悪い笑を口に浮かべていた。
「なんのつもりだ……！」
　クルーの殆どがその男の映像に唖然とする中、准将一人だけは明らかに畏怖の眼差しを画面に向けていた。その異常な様子に、画面の男の微笑みは完全な笑い声に変わっていた。

（まぁ、なにはともあれ、とりあえずこの先の計画進行にとって貴方がたは邪魔なんですよね）
「邪魔……？貴様、何を言っている！軍の艦へのハッキングは重罪だ、極刑も有りうるのをわかっているのか!?」
　大佐が苦し紛れの反論にも男の笑みと余裕は消えない。それどころか、今の発言もあらかじめ台本にあったとでも言わんばかりの様子である。
（勿論ですよ。僕を誰だと思ってるんです？）
「知らん！貴様の様な顔など見たことも無い！」
（へぇ……じゃあ、准将殿に説明して頂こうかな）
　突然指名された准将はビクリと体を震わせた。訝しげに振り返った大佐の目が驚愕に見開かれた。准将の異様なまでの様子に流石に何かを悟ったのであろう。
「デヴォン君……君は……」
「デヴォン……!?」
　准将から漏れた名前に、大佐の目はさらに大きく見開かれた。再びモニターを向いた大佐の額には汗が浮かぶ。デヴォン・クロウズ。大佐達率いるティターンズ残党派の反乱分子の出資者でありながら、連邦政府の重役のポストに腰を収める男だ。
（わかって頂けました？という訳でそれを冥土の土産にでもして下さいな）
　デヴォンはそう言うなり大仰な素振りで指を鳴らした。
（計画を私物化するなんて、本当に困った人達でしたよ）

　〈シルフレイ〉のビームライフルが一閃し、クラップ級の艦橋を貫いた。ビームの熱に焼かれ、射軸上の物質全てが蒸発した。それによって生み出された熱によって火種が生じ、艦内の酸素という酸素を燃やし尽くしながら燃焼は拡大した。内側から大きく膨れ上がった炎は次々に燃料などにも引火し、断続的な爆発を続け、クラップ級の残骸を漂わせ始めた。
　その凶行に呆気に取られていたジェガン隊は、誰からともなく、

更なる蛮行を止めようと〈シルフレイ〉に殺到した。だが、虚しくもその行動は無駄となった。
結果から言うと、ジェガン隊の全滅に終わった。ビームサーベルに持ち替えた〈シルフレイ〉は瞬間移動と紛う如く圧倒的な機動力を以て、一瞬のうちに全ての機体のコクピットを貫いていたのだ。
動力炉に誘爆したものもあれば、それを免れて宙を漂うものある。散発的に起きた爆発の光が〈シルフレイ〉を不気味に照らし出した。その双眸に紅い光を湛えた〈シルフレイ〉は再び、肩の大型スラスターを大きくひと吹きさせた。

☆　☆　☆

「各機、散開！」
その様子を見ていたファム達は、ただ唖然としていた。その最中、突然突っ込んできた〈シルフレイ〉に面食らいながらも、ファムは的確な指示を出して回避を促した。
だが、箍が外れた〈シルフレイ〉は〝獣〟さながらに、その動きに躊躇いはなかった。パイロット自身への負荷を考えれば、絶対に行わないし行えないような機敏な動きを見せていた。
（暴走……？）
錯乱状態にある強化人間が辺り構わずに暴れるのは幾度と目にしてきたが、このように意志を持って行動するというのは経験にない。置かれている状態の原因を推し量ることができない今、現象への対処を行うのが精一杯であった。
幾度かの突貫を捌きながら、ファムは徐々に焦りを覚えていた。少しずつではあるものの、〈シルフレイ〉はこちらの動きを読み始めているように見えたのである。実際、それは気のせいではなく、回避余裕もコンマ数秒ずつ縮み始めていた。
そして遂に〈シルフレイ〉の細い三指の腕がダンケ機を掴んだ。
「くっ……！」
ビームサブマシンガンを向けた頃には既に遅く、〈シルフレイ〉はそ

れこそ〝獣〟のような動きで臓物をまさぐる如く、コクピットを抉り取っていた。
（貴様アァッ！）
ルイーズが雄叫びをあげ、〈シルフレイ〉に飛びかかった。古くからの友人だったダンケを失い、冷静な判断ができる状態ではなかったのだ。
瞬時に振り向いた〈シルフレイ〉の腕が二人目のダンケを生む刹那、それはファムの蹴りによって遮られていた。無論繰り出した右脚は〈シルフレイ〉に毟られ、オイルが血液のように宙空へと吐き出された。
「ルイーズ、貴様は母艦との連絡を。可能ならば予備機を出すように要請してくれ」
ファムは一息に無線機へ吹き込むと、（姐さんは!?）と訊くルイーズの声を無視し、フットペダルを踏み込んだ。機体の急加速に、一瞬意識が持って行かれそうになるのを堪え、モニターへ視線を向ける。〈シルフレイ〉を示す光点が圧倒的な速度で迫るのが見えた。ルイーズ機は指示に従い、戦闘宙域を離れていく。
それでよし、と言わんばかりに胸を撫で下ろしたファムは、機体を反転させて再び〈シルフレイ〉と相対した。
「さて、ここからが本番ね……」
ニヤリと口を歪めたファムの視線の先で、〈シルフレイ〉は〝獣〟の如き大きな咆哮をあげたように感じられた。

つづく

第二話「捕獲」

とある連邦軍基地の広大な滑走路に降り立った、地球連邦政府役人専用護送機。重々しいエアの音が響き、頑強な扉が開くと、南国特有の湿った熱気が機体の中へ流れ込む。そんな中でも関わらず、黒服のボディガードはスーツをしっかりと着込み、額には汗の一滴すら流さず、横づけされたタラップを降り始めた。それに続くのはオレンジ色の癖っ毛が特徴の、眼鏡を掛けた長身の男、デヴォン・クロウズだった。

胸にアナハイム・エレクトロニクスの社章を刻んだ背広を二人従えたデヴォンは堂々とタラップを降りる。警備人員の敬礼に微笑みと会釈だけで応えると、ボディガードが示す玄関へと歩を進めた。

「主席、このあとのご予定ですが……」

「あー、知ってるから言わなくていいよ。僕は天才だからね、予定は完璧に記憶してる」

嫌味のこもった返事を返したデヴォンはそれきりボディガードへ目を向けることなく建物へと入って行った。

中で待ち受けていた制服姿の兵士に案内役が移り、デヴォンは地下の会議室へ通される。数度のセキュリティをくぐり、たどり着いた会議室の入り口は、はたから見ればただの壁でしかなかった。関係者でも、その存在を知らなければ気づかないようなそこに居たのは、デヴォンが従えるふたりと同じようにアナハイム・エレクトロニクスの社章が描かれたネクタイをした二人の男だった。片方は連邦軍内でも有名な、コロコロと太った男、アルベルト・ビスト。もう一方はアルベルトに比べると幾分も細身の初見の男だった。

「いやぁ、どうもデヴォンさん。ご無沙汰してます」

媚びへつらう様な笑みと猫なで声のアルベルトを無視し、デヴォンはもう一人の男に目を向けた。

「はじめまして。この度担当させていただきます、ドルト・クリューガーと申します」

名刺を取り出しながら慇懃に頭を垂れたドルトを一瞥すると、デ

ヴォンもそれに応じて名刺を取り出す。ビジネスの場で良くある、ただの名刺交換に過ぎないが、それは傍らに立つアルベルトへのあてつけであった。アナハイム・エレクトロニクスの大株主であるビスト家の人間であるアルベルトは、その叔母であるマーサ・カーバインによる身内人事によってその地位を盤石にしてきた。以前より何度か酒の席で顔を合わせていたが、自力で今の地位を獲得できるような器ではなかったと、デヴォンは感じていた。

今回デヴォンとアナハイムとの間で交わされるとある契約は、元々アルベルトの関知の外のはずだった。ティターンズ時代のとある試作機の秘密裏の提供と、その運用データのフィードバック。見返りとして、デヴォンからはアナハイムへティターンズ残党とも言えるシンパ達とのパイプを提供する、という非常にデリケートな案件であり、デヴォンにとっては慎重に進めたい事案の一つだった。しかし、それがマーサによってアルベルトという邪魔者がくっつけられてしまったことに、デヴォンはマーサに切り捨てられた事を感じていた。

端からマーサを頼りにしていたわけではなかったが、邪魔されるとなると話は別だった。

「まあ、立ち話もなんですから、座ってください」

自分に向けられている感情を察しているのか、その場を取り纏めようとしたアルベルトに促され、デヴォンは椅子へと腰を下ろした。

☆　☆　☆

（戦闘継続中。これより戦闘へ介入する）

事務的な声が耳元で弾け、イオリ・ノースフィールドは無意識に操縦桿を握る力を強めた。母艦を発して数十分。下手をすれば救難信号の主は既に沈められている可能性があったが、幸いにして交戦の光を確認することが出来ていた。

周りに隕石やデブリの類が少ないこの宙域で、これだけの時間戦闘が継続されているということは大規模な戦力同士の衝突である可能性を疑ったが、『袖付き』と呼ばれるネオ・ジオン残党一派がそれほどの戦力を動かせるほどの余裕が無いのは周知で、すぐにそれを否定した。

だが、イオリはなにか〝居心地のわるさ〟と表現する以外に形容し難い感覚に襲われていた。
その感覚に苛立ち、さらに形容できないもどかしさがそれを加速させていた。
予め展開した有線式の光学センサーを最大望遠にする事によってようやく戦闘光が観測できる、というほどの距離になってその感覚はますます強くなっていた。
「隊長。妙じゃありませんか？」
そんな気分から思わずイオリは口を開いていた。
自由な気風の小隊とはいえ、命のやり取りをする実戦の場において口にするには些か確証が足りない感情だった。少しの気の迷いが生死に繋がるという事は幾度かの戦場で教えられてきている。だが、後悔したところで口を出た言葉は元には戻らない。
実際、無線からは（何訳のわからない事言っているの）というクリスティーナの指摘が聞こえる。だが、予想に反してターツァから帰ってきたのは（確かにな）という押し殺していながらも幾分かの動揺が感じられる意外な声だった。
（どうも、〝気〟に気持ち悪さがある。それに、モニターしているデータによれば身内の機体の出処が妙だ）
「出処？」
オウム返しに聞いたのはイオリだけでは無かった。小隊メンバーの合唱に、いつもならツッコミを入れるターツァも思案に声を詰まらせている。いよいよもってイオリの疑念は小隊全体で共有されていた。
（ああ。と言うのも、データは７５％の蓋然性であの機体をティターンズ製の〈ギャプラン〉であると示していてな）
無線越しに一同が息を呑む様子が伝わる。
ティターンズ。連邦の忌むべき汚点であるその名前は、６年前の同組織の崩壊をもって姿を消したはずだ。ティターンズで使われていた機体の一部は技術的価値が認められて保存されているものもあると聞くが、実践に駆り出されているという事を聞いたことは無かっ

た。
　そして、戦闘中域に距離を詰めるほどに異様な気が益々の違和感を増長させ、遂にはイオリは自分が全身に脂汗をかき、浅い呼吸を繰り返している事に気がついた。
　その呼吸と動悸はより一層早まり、無意識に死を覚悟した刹那、半ば漂流物のように成り果てた〈ギラ・ドーガ〉を相手にビームサーベルを振るう〈ギャプランもとき〉が一瞬こちらに視線を向ける様子が〝視えた〟。
「っ!?」
　その瞬間に、イオリは身体中が粟立つのを感じた。混じり気のない純粋な殺意。何かの欲の為ではなく、本能のあるがままの鋭い殺気が自らを射すくめたのが感じられた。止まりかけた呼吸が吹き返すと同時にその光景は消え去ったが、あまりにも現実感のあるその光景は頭の中に焼き付いて離れなかった。
（どうした、Ｂ００２）
　ターツァの声で我に返ったイオリは、声の限り「総員回避ッ！」と叫んでいた。
　訝しげな声が帰ってきたのもつかの間、火器管制レーダーの被射を告げるアラートが鳴り、四機は散開した。
　そして、ターツァ機とイオリ機を直線で結ぶ軌道をピンク色の光条が貫いた。その火力は絶大で、回避したにも関わらず小隊各機の装甲表面に焼き跡を刻む程だった。
　攻撃の主は言うまでもない。
（これは一体……）
　ターツァの呟きが今の攻撃か、それを予知したイオリに向けてのものだったのかは判然としなかったが、とにかく現状が常軌を逸する異常事態である事は共通の認識だった。
（っ……!?来るぞ！）
　さらなる異常に真っ先に気付いたのはラキアだった。
　機体各所に設えられたバーニアを全開にしながら猛然と迫る〈ギャプランもどき〉を視認した瞬間に、先程に比べれば控えめな閃光と

（きゃあああっ!!）というクリスティーナの悲鳴がイオリ達を襲った。
「あの速度で当てただと……!?」
ビームライフルを構えた〈ギャプランもどき〉が小隊を掠め、飛び去る。
直線の機動ならば照準の補正はほとんど必要ないが、それは真正面に目標がいる場合である。
自身の直進方向のベクトルにX軸を合わせた時、YZ軸方向に少しでもズレが生じていれば、それは自身の位置によって刻々と変化してしまう。コンピューターの処理だけでは補いきれない〝技量の差〟というものが顕著に現れる一つの例だった。
クリスティーナ機はというと、ビームの直撃を受けたものの、右腕の全損だけで済んだようだった。ほかの各部はオールグリーン。奇跡的な幸運と言える。
一方の〈ギャプランもどき〉は、あまりの速度に方向転換が追いつかず、小隊各機をかすめた後に通常視認範囲を超えた程度のところで再びこちらに相対した。
（Ｂ００１より各機へ。救出目標の〈ボマレア〉は消息不明。よって、状況から轟沈したと判断し、現時点を持って作戦を破棄。代わってＢ００３、Ｂ００４は共に漂流中のジオン機を拿捕せよ。Ｂ００２と私は共にコイツを何とかする）
「「了解！」」
各機が指示の通りに散開しつつ、各々の目標へ向かう。
イオリは〈ギャプランもどき〉の再突進の前に、ビームライフルで牽制する。その間にターツァは〈ギャプランもどき〉へ距離を詰める。
（イオリ、俺のケツに付いてこいよ！）
「了解したくないけど了解！」
恐怖に震える身体を抑えて、イオリ大きな声で返事を返す。その視線が旋回を終えた〈ギャプランもどき〉と交錯した。
刹那、一際その双眸が輝いたかと思うと、二機の間の距離は半分以下に縮まっていた。

圧倒的な加速性能。その脅威を頭で理解するよりも早く、イオリは回避行動に移っていた。そして、無意識にビームライフルを向けると、〈ギャプランもどき〉へと容赦なく引き金を引き絞った。

3点バーストに設定されたビームライフルからは3発の光条が僅かな扇形の軌道を描いて〈ギャプランもどき〉へ殺到した。それでもなお、3発目が機体を掠めただけで致命傷を与えるには至らなかった。

（ナイスだ！）

ターツァがイオリのファインプレーへ賞賛を送りつつ、その攻撃によって軌道をずらした〈ギャプランもどき〉へ照準を向ける。その動きのさなかで、ターツァはモニターに映るイオリへ視線を向けた。

（なあ、イオリ。何故、さっきはあんなことを言ったんだ？）

突然の質問に言葉に詰まる。思考を巡らせると、先程の「妙だ」という発言に思い当たった。

「なぜって……そう思ったから……ですが」

説明としては不十分すぎる返答に、二人の間に沈黙が流れる。その間にも〈ギャプランもどき〉は再びの回頭を終え、加速を始めた。

（……そうか。ならばいい。だが、不用意な発言には気をつけろ）

三度の突貫をいなしつつ、ターツァは口を開いた。

（この機体は恐らく、意図的にデータリンクから外された機体だ……。なにか大きな事が動いているのかもしれない……）

口にこそ出さなかったが、それはつまり軍の中で、自分たちよりも権限を持った誰かによる〝何らかの企て〟がある、ということを示唆していた。

「大尉……？」

その口調に、いつものターツァにはない影を感じたイオリは思わず聞き返していた。刹那、凄まじい衝撃に息を詰まらせていた。

「ぐぁっ……!?」

飛び去ったと思われた〈ギャプランもどき〉が、ありえない速さで回頭し、異常とも言える軌道を描いてイオリの〈リゼル〉に肉薄していたのだ。

咄嗟にビームサーベルを抜いて応戦するが、速度で負ける相手に受けに回るのは愚策であった。必死なあまりに失念していたが、その失策は命取りであった。
（イオリから離れろ！）
ターツァが勇猛にも掴み掛るが、サブアームを駆使した〈ギャプランもどき〉の動きには追従できない。しまいにはサブアーム1本に体術のような動きで組み伏せられ、右腕の関節がひしゃげていた。
その間にも、〈ギャプランもどき〉はイオリの〈リゼル〉の胴に両マニピュレーターの爪を立てて、引きちぎろうとばかりに力を加えていた。
「こんなの……獣じゃねぇか……！」
動こうにも〈ギャプランもどき〉の拘束を解くことが出来ず、さらには徐々に金属の擦れる甲高い音が聞こえだし、異常を告げるアラームが鳴り響く。
ペイルアウトしようにも、目の前には〈ギャプランもどき〉がいる。生身の機動でバルカンを躱しきることなど不可能に近い。しかし、ぐずぐすしていれば機体が引き裂かれると同時に起こるであろう大爆発に身を灼かれるのは必至だ。
（イオリィッ！）
藻掻くターツァの〈リゼル〉。しかし、〈ギャプランもどき〉の器用なサブアーム捌きがコクピット部へ打撃を加え、沈黙させる。データリンクも途切れてしまったためにターツァのバイタルも確認出来ない。一時的なシステムダウンであることを祈ったが、自身も窮地であることには変わらない。
「……死なば諸共、ってか……」
必死に頭を回すが、万策は尽きている。撃墜されるならば、相手ごと爆発に巻き込み、なけなしでもダメージを与えることが最善であると考えた。
コンソールを引き出し、自爆コマンドを入力する。育成学校で習ったときに「使わねえよ、こんなの」と軽口をたたいていたころが懐かしい。後は演習と同じようにエンターキーを押すだけ……！

―もうやめてっ!!
キーに触れようとした刹那、頭に降ってきた声に、イオリはその指を止めていた。
聞き覚えのない少女の声。だが、それは間違いなく聴こえた。空耳なんかではない。それは音というにはあまりに儚く、感覚というには鮮明すぎる色を伴い、イオリの頭に響いた。
しかし、そんなことに気を取られている場合ではない。目の前の〝怪物〟に一矢報いるために……。
だが、イオリはそこで驚愕していた。目の前の〈ギャプランもどき〉は一切の動きを停止していたのだ。

☆　☆　☆

「……止まったか」
腕時計型の通信端末に表示されたメッセージに、デヴォンは満足げに頷いていた。それを聞いたドルトは、無言で頷き立ち上がると、会議室をあとにした。
あらかじめ＜シルフレイ＞の試験プロトコルを送付してきただけのことはある。デヴォンはドルトの働きぶりに感心していた。既定路線だったとはいえ、顔を合わせたことのない人間に機密中の機密ともいえるデータの複製を送ってよこすなど、普通は考えもしない。だが、現実としてアルベルトという邪魔が入ったことによって、会話では意思の疎通ができない状況が生まれた以上、この気遣いでデヴォンが救われていたのは間違いのないことだった。
一方で、ただ一人事情の飲み込めないアルベルトは目を白黒させるばかりで狼狽えるだけだった。
「なに、こちらの話ですよ。……それよりこちらの提案を一度検討頂けませんかね？」
強引に話題に引き戻すデヴォンが指し示すのはテーブルの上の白いファイルだった。
「ぐ……その件に関しては、今はまだなんとも……」

「クリューガーさんとは別な部署を管轄されてるんでしょう？それにアナハイムは一枚岩ではないと聞いています。あなたの立場からしてみれば美味しい話だと思いますが？」
甘い事を言って誘いにかける。デヴォンの交渉の常套だった。それがデタラメであっても彼だけは損をしないように立ち回る。天性の才能とも言える交渉のバランス感覚を駆使して、デヴォンはアルベルトを使ってマーサの首を締めようと考えていたのだ。
「……なるほど。ですがうちの現場の意見を仰がないことには、私としてはお答えし兼ねます」
だが、いつもは地に足のついていない小心者も、デヴォンのその交渉の手段にだけはめっぽう強かった。付け入る隙があっても、強引な引っ掛けには一切動じない。その点においてだけは地位相応の能力を持っていた。
「やれやれ……ですね」
困ったように顔を伏せ、肩をすくめるデヴォンだったが、その口調は少しも困った様子はなく、口元にも余裕の笑みを残していた。

☆　☆　☆

うっすらと開いた視界の片隅で、白いカーテンが揺れているのがわかった。思考のおぼつかない頭は心地よく気だるく、そのままでいることを望んでいた。
ここは何処だろうか。
その疑問を起点に芋づるのように記憶を辿る。宇宙を漂う自分。確か戦闘があったはずだ。そして、モンテロールとダンケが命を落としたはず……。ルイーズ……？
「っ……!?」
ファムはそこで一気に意識が覚醒していった。
そうだ。任務中に連邦の〈ガンダム〉に小隊は壊滅させられたのだ……。屈辱以外の何物でもない。
自分の失態を責めると同時に、再びファムは今自分がいる場所への

疑問が湧き始めていた。
「おうおう、お目覚めかい」
　声と共に開いたカーテンの向こうから覗いたのは三十歳前後ぐらいに見える男。連邦軍の士官服を来ているところを見ると、どうやらここは連邦の艦の中らしい。
「おっと！そんなに警戒するなよ。別に俺らはあんたを取って食おうなんて考えてないさ」
　険しい顔をしてしまっていたのだろう、それを見た連邦軍の士官はファムを宥めるように両手をあげて、敵意のないことを示していた。捕らえられたところで敵意がないと言われても、素直に信じられるものでも無かったが、事実として少なくとも目の前の男からはそんな〝色〟は感じられなかった。
「怪我は大丈夫か？頭とか内臓には別状はないと聞いたが」
「ん、ああ……問題ない」
　今更だが、ようやくファムは額と腹部に包帯を巻いていたことに気付いた。言われてみれば鈍い痛みが残っているが、気になる程のものでもない。
「それは良かった。詳しくはわからないが、アンタんとこの艦も無事脱出したらしい」
「っ……！本当か!?」
　胸をなでおろすと同時に、今後あの艦はどうなるのだろうという漠然とした心配が頭をよぎる。ダンケとモンロールを失い、隊長である自分は連邦の艦につかまっている現在、ルイーズなら単艦、あるいは単機で自分の奪還に向かう可能性は十分に考えられた。
「……彼らと連絡は取れないか」
「再三やってはいるんだが、向こうが反応しないんだ。それでアンタなら緊急の連絡回線かなんかでも持ってるんじゃないかって、起きるのを待ってたんだ」
　なるほど。実際この男の読みは正解だった。自分の〈ギラ・ドーガ〉には緊急無線用の回線が設定されている。しかし、反応距離に難があり、一度も使用したことがない。恐らく常時電波を拾えるようにはし

ているのだろうが、艦まで届くのだろうか。
「そんな事より、あのガンダムタイプはどうなったんだ？」
「ガンダムタイプ……？ああ、〈ギャプランもどき〉か。あれなら勝手に止まってくれたよ。今は整備班がコクピットハッチの解放に手を焼いてるらしい」
「そうか……。あれに乗ってるのも私と同じ境遇の者のはず……だ。出来ればあまり手荒くしないで欲しい」
　撃墜されなかったという事に何故か安堵している自分に戸惑いつつも、同胞へ抱く念のようなものだと理解する。しかし、同時に思い出されるのは戦闘時の違和感だった。
「ふむ……興味深いな。知り合いか？」
「……いや、そういう訳では無い。戦闘中に一瞬だけ声が降ってきたんだ。……懐かしい声だった」
「見に行くか？あの機体をさ」
　そんな誘いに、ファムは胸の中の違和感が吹き飛んでいた。
「良いのか？私は捕虜だぞ、独房とかなんとかに……」
「構わんさ、艦長の許可はとってある」

「……」
　そんなふたりのやり取りを医務室の外から伺う者がいた。クセの強い黒い髪を短く刈り込んだ男、ラキア・シュヴァルツサザン。手には紙メモと、インクペンを握り、ターツァとファムの話に聞き耳を立てていた。
　メモ帳にペンを走らせながら「これが決め手になるな……」と一人笑うラキアに、後ろから「なにやってんだ？」と声がかかる。
「うわあああああ」
　情けない変な声を上げながら腰を抜かしたラキアは、その拍子にリフトグリップから手を離し、明後日の方向へと流れ去っていった。
「なんだ、あいつ……」
　去っていくラキアを見送ったイオリは、ここへ来た目的であるターツァ隊長の呼び出しを果たすべく、ドアへと向き直ろうとした。しか

し不意に開いた扉から出てきたターツァと出会い頭に正面衝突していた。
「あいたぁっ……!?」
こちらもこちらとて間の抜けた声を上げ、今さっきのラキアのように流されれん、という所でイオリはその手首を掴まれていた。
「大丈夫か？」
その手を掴んでいたのはターツァの後ろにいたはずのファムだった。常人のものとは思えない身のこなしでターツァを掻き分け、イオリを救助したのだ。
「お、おう……」
ファムの瞳に見つめられたイオリはその眼に、不意にも釘付けになっていた。その動きで乱れた前髪を正すと、ファムは茫然とした表情のターツァの方へと振り返る。
「なかなかやるね、お嬢さん」

☆　☆　☆

「ターツァさん、待ってましたよ……。こいつ、なかなか頑固で扉が開かなくて」
ＭＳハンガーに着くなり、待機していた整備兵がターツァに声をかける。
「おうおう、そんなことだろうと思ってたよ。仕方ない、物理破壊を許可する」
「待ってました！」
ターツァの返答に嬉々として敬礼を返す。その様子を傍目に、イオリは呆れた、といった風に肩をすくめた。
「私もああゆうのは好きじゃない」
いつの間にか隣にいた女性、ファムがつぶやく。両手は簡易手錠で拘束されているが、ターツァさんの監視下でなら自由が与えられていた。
「ネオジオンの連中は戦時協定で捕虜じゃないんだろ？なら、危害を

加えない限りは好きにさせてやってもいいんじゃないか？」というターツァの、聞く人が聞けばターツァが独房入りも考えられるような発言と、それに押し切られた艦長の許可のもと、ファムは最低限の自由が与えられていた。
「貴女、ニュータイプか何かですか？まるで俺の心を読んだような…」
「さあな。もっと怖いものかもしれん」
　もともと機械音がなり続けるうえ、チェーンソーと金属が擦れ合う甲高い音が響く格納庫の中で、不思議とファムの声はイオリの耳に届いていた。それはまるで、＜ギャプランもどき＞が動きを止めたあの時に聞こえた声のような…。
「あの人はいつもあんな感じなのか？」
「ターツァさんのことか？」
　ファムの視線の先で、ターツァは整備班に交じってコクピットハッチと格闘していた。いつも通りの威厳がありながら、それでいて陽気なムードメーカー。どんな人にも自慢できる最高の上司だとイオリは思っていた。
「いつも自分から動いて、誰よりも部下のことに真剣になってくれて。自慢の隊長だよ」
　それは嘘偽りのない、イオリの本心だった。だが、ふと思い出すのは＜ギャプランもどき＞を前にしたあの時見せた影。『なにか大きな事が動いているのかもしれない……』ターツァさんにしては珍しく焦ったような、なにかを企んでいるかのような感覚。
「やはり思い当たるものがあるのか」
　再びの指摘。不覚にも動揺を見せたイオリの顔をファムがのぞき込む。
「私が言う義理はないが、彼は完璧ではない」
「アンタがターツァさんの何を知っている…！」
　とっさにファムを突飛ばそうとするが、その腕はしっかりと握られてびくともしない。あまりの力で握られた腕は徐々に鬱血するほどであった。
「なにも聞かされていないか？」

「何が言いたい…？」
「いざという時は自分に従え」
　力強く見据えられたイオリは、反論の言葉を見つけられなかった。それどころか何を意味しているのか、理解の追いつかないイオリはファムの紅い瞳を見返すしかなかった。
　二人の間を支配する長い沈黙を破ったのは、「ハッチ開くぞ！」という整備長の鋭い声だった。

☆　☆　☆

　同じころ、ブリッジには〈レオントキール〉艦長、ヴァッフ・レイゲン少佐のいぶかしげな声が響いていた。。クラップ級〈レオントキール〉が所属する第十四独立艦隊は、かの有名な第十三独立艦隊〈ロンドベル〉の外郭組織として構成されている。艦隊全体が〈ロンドベル〉の傘下にあり、人員や戦力の補充源としての機能を見込んで設立されていた。…という建前ではあるが、実情として、養成学校上がりの新兵の収まりどころとしての機能が主立っていた。その中において、ターツァ隊は珍しく実働経験が豊富の異色の存在だった。一方でその運用の足となる〈レオントキール〉のクルーは第十四独立艦隊の大半を占めるルーキーたちであった。ヴァッフも例外ではなく、若くしてその座に就く彼に艦長帽と椅子は似合わず、ブリッジの空気に飲み込まれてしまっていた
「サイド6〈ネビロス〉へ、ですか…？」
『ああ。先の戦闘で確保した友軍試作機とネオジオンの機体を持ってきてほしい』
　モニターに映る、ひげを蓄えた男、ニーゼス・アリューゼ中将が淡々と伝える。。立てられた襟には数々の勲章が彩り、その男がいかに高位の将官であるかを物語っていた。一方でその内容に、ヴァッフはますます不審な表情に変わっていった。
「…お言葉ですが、中将。現在地点からですと、〈ロンデニオン〉の本部のほうが近く、それに本艦の連続作戦行動期間は規定を大きく超え

ています。補給を行わせていただきたく…」
〈レオントキール〉がいる宙域から最も近いコロニー群はラグランジュ5にあるサイド1だった。そしてそこには親組織である〈ロンドベル〉の本部が置かれた〈ロンデニオン〉があるのだ。
『すまないが事態は急を有する。補給船を派遣する、補給に関しては彼らと合流して済ませてくれ』
しかし、ニーゼス中将の指示は冷たいものだった。彼の指示の前に規定などを言い訳にしようとしても、意味をなさないのはわかっていたが、実際にここまではねのけられれば、従うほかなかった。
それを最後に通信を切ると、ヴァッフは後ろに控えたアリーシャに視線を投げた。
「ネオジオンの連中の動きは？」
「おそらくこちらの信号を受信したかと。航路をこちらに寄せつつあります」
先ほどターツァの指示で発信した、ファムの返還に関する暗号通信を無事受信したらしい。やたらに更新を行えば、後にログの調査が行われた際に問題になりかねなく、正式の通信の合間に紛れ込ませる必要があった。
その矢先のあの指令である。もしかしたら感づかれているのか、という疑念も晴れないではなかった。クルーの多くがターツァのことを信頼しているゆえに不満や疑問は表立たないが、ヴァッフは徐々に疑念に支配されていた。
「っ！格納庫から通信です！コクピットハッチが開いたそうです！」
アリーシャの声に、ヴァッフは再び彼女に視線を向けた。
「格納庫へ向かう。少しここを任せた」

☆　☆　☆

イオリとファムの目の前で開き始めたコクピットハッチの向こうに人影がのぞく。開き切ると同時に空中に投げ出されたのは、長身の男だった。整備長がかろうじてその男を受け止める。その拍子に外

れたヘルメットから覗いたのは東洋系の整った顔。その顔に、その様子を見ていた多くのクルーが驚愕に包まれていた。
「あれって…」
達観の眼差しだったファムも、その眼に若干の動揺を見せていた。
「グローレン、グローレン・T・ベルバーグ。ティターンズのニタ研技術員にして、グリプス軍事裁判で極刑を言い渡された一人」
その男は今から六年前に死んだはずの男だった。
「そして…」
ターツァの視線がファムに注がれる。
「いまの私の生みの親よ」
（続く）

第三話「策謀」

「頃合か……」
〈レオントキール〉との通信を終えたニーゼスは椅子に身を投げた。擬似重力ではあるが、約1Gのかかるコロニーでの生活は老体には決して楽なものではなかった。特に宇宙での艦長職に慣れ親しんだ者としては重力ほど億劫なものはないと言っても過言ではないほどであった。
「ええ、こちらも準備は整えております。ご指示があればすぐに狩りにかかります」
ニーゼスのつぶやきを受けるように返事を返すのは、若い男、青みのかかった髪を流すようにしたキザな佇まいの青年だった。着込むのは〈ロンドベル〉の制服だが、その色は黒く、他には見ないデザインだった。
「そう焦るな。やるならばジオンの連中ごとやってもらわねば疑いがつく」
「分かっております。全ては貴方の意志のもとに」
「頼りにしている。あの烏は信用がならんからな」

☆　☆　☆

「ターツァ大尉、少しいいでしょうか」
喧騒冷めやらぬ格納庫で、〈ギャプランもどき〉から吐き出されたグローレン・T・ベルバーグが医務室へ運ばれるのを見送った後、ターツァはヴァッフに捕まっていた。
「どうされました、少佐殿？」
「先ほどアリューゼ指揮官からの通信がありました。本艦はサイド6への針路をとっています」
「やっぱりか……」
ヴァッフの報告にあからさまに怪訝な表情を浮かべるターツァ。無理もない。ヴァッフがニーゼスに進言したとおり、この位置からな

らば普通であればサイド1の拠点に向かう、あるいは経由するはずである。
「いい加減説明してもらえませんか、大尉！一体全体どうなってるって言うんです!?何もかも普通じゃない！」
「ううむ……」
　声を荒らげるヴァッフに、ターツァは珍しく声を詰まらせていた。その様子に、ヴァッフは益々の不信感を募らせる。
「ターツァさん、いくら実戦経験が豊富で歳上とは言え、階級では私の方が上です。いざとなれば……」
「柄にもない事、言うもんじゃないぜ？」
　脅しとも取れるヴァッフの言葉を遮りながらターツァは軽口を挟む。しかし、その表情は相変わらず険しいままだった。流石に様子がおかしい事を悟ったクルーたちが遠巻きにその様子を見守る中、ターツァは口を開く。
「艦長殿。これはまだ憶測の段階を出ないが……」

☆　☆　☆

　グローレンを医務室へ運んだクルー達の流れについて行ったファムとイオリは食堂の椅子に腰をかけていた。
「どういう事だよ……あいつがアンタの親だなんて……」
　先のファムの言葉への疑問。ネオジオンの兵士、しかも小隊指揮官クラスの人間が、連邦の軍法会議で死刑を言い渡されたような男との関係があったなんて、しかもそんな男を親と呼ぶなんて。ただならぬ裏があることはイオリにも感じられていたが、自分がその裏の一部に巻き込まれつつある事を実感している以上、事の真相を確かめずにはいられなかった。
「落ち着いてくれ。順に話そう……。とは言え、彼があれに乗っていたことは私としても思考の片隅にはあったが……」
　先ほどから鋭い話し方をするファムが珍しく言葉を濁らせている、その事からもこの話の闇の深さを感じられていたが、それで怖気付く

ほどイオリは小心者では無かった。それに、自らもその闇の一端に触れてしまっている以上いずれ知ることになるならば、自らの意思でそれを知りたかったのである。
「まず、端的に言おう。私は、ティターンズの強化人間だ」
「……」
　ようやく合点がいった。最初にあった時に自分の手を掴んだあの動き。あれは肉体強化の賜物だろう。それと、自分の思考を読むかのような言動、あれは人工的なニュータイプ能力の発現と言ったところか。そして恐らくは……
「その施術者が、彼だ」
　グローレン・T・ベルバーグ、ティターンズのニタ研で強化人間の製造を行っていた狂気の科学者の一人。なるほど、それは死刑にもなるはずだ。
　だが何故、彼は死んだはずなのに生きているのか。
「それはわからない」
「だあ……さぁ、人の思考を読むのはやめてくれないか？」
「……すまない。人工的な能力のせいか、私の意志ではコントロールできないんだ。言葉として処理されてしまう。それが思考なのか、声なのか、口を見ていてもわからないぐらい、自然に〝聞こえる〟んだ」
「そいつぁ……厄介だな……」
　聴きたくもない相手の本音が聞こえてしまうってことだろう……？建前と本音のギャップがわかってしまう、それは信頼している相手ほど大きいはずだ。いつ授けられた能力かはわからないが、生きてくるのに色々と苦労があったに違いない。
「だけど、彼の放つ感覚はなんとなく感じていたんだ。いや、あの時一緒にいた人たちの感覚だな」
「あの時？」
「研究所のみんなだ」
「ニュータイプの能力も個人差や、感知できる感覚にも種類があるらしい。特に私は思考のリードは得意だが、それはごく至近距離に限られる。仲間達はみんな先読み、位置間隔に優れていて、それが求めら

れていた。いくら操縦技術があっても、それがなければ失敗作だったんだ」
「……ひでえ話だな」
「全くだ。そして、私は棄てられた」
　おおよそ予想していた話だが、イオリはその言葉を聞いて黙り込んでしまった。それしか反応ができなかった。
「表向き、という言葉も正しくないが、私と同じように失敗作の烙印を押された者達は、エゥーゴの襲撃に、試験機の〈マラサイ〉に乗せられて迎撃に出されたんだ……」
「まさか、ネビロス事件……？」
　事の顛末にはイオリの耳にも聞いたことがあった。中立コロニー郡だったサイド６の一角に、目を盗むようにひっそりと存在したニュータイプ研究所。そして、そこが世に暴かれた一連の事件。報道されたことを額面通りに信じれば、エゥーゴが施設を鎮圧したが、研究員の自爆によってエゥーゴ側のパイロット数名が死亡、施設の詳細もわからずじまい。
「そうだ。サイド６〈ネビロス〉に秘密裏に建造されたニュータイプ研究所で私は実験を受け続けた。……まあ、元々は地上の研究所で改造を受けたんだがな……」
「そして、ジオンへ？」
「ああ、幸いにして撃墜を免れた私は漂流し、さらに運のいい事にアクシズの艦艇に拾われた」
　当時のジオン、アクシズは他の二勢力に比べれば兵力の不足が著しかったはずだ。その中に戦力になりうる強化人間が流れつけば、活用する他ないだろう。それもアースノイド達への憎悪を持つような境遇の強化人間ならば尚更扱いやすいはずだ。
「だが……なんで今更……。スイートウォーターの一件で再びジオンはばらけただろう？なぜまだ戦うんだ？」
　二人の間を沈黙が支配する。いつの間にか空になったコーヒーチューブを弄ぶイオリだったが、その手を止めた。同時にファムが口を開く。

「私が強化人間だから、というのが一つ。戦うこと以外を知らないからな……だけど」
「……だけど？」
「人を探しているんだ……。……研究所で私を姉のように慕ってくれた子だ」
マユ……。確かにあの時の声はマユだったはずなんだ。あの戦場にいたはずなのに……私の幻聴だったのか……？
「……なあ。勘違いかもしれないし、人違いかもしれないが、あの時、〈ギャプランもどき〉と戦っていた時、女の子の声を聞いたんだ」
「!?」
「無線じゃない、頭に直接響く声だった。幻聴かとも思ったが、俺はあの声を知らない。知らない声だった」
やっぱりだ。あの時マユはあの場所にいた……。ならば……やはり……。
「どうした？」
「馬鹿らしいと思うが……聞いてほしい」

「うさぎ？」
ファムは自分より年上の、それでも自分より成績が低かった男の子に聞き返していた。
「ああ、そうだよ！その〈うさぎ〉に認められれば、僕らだって大人に認められるんだって！」
〈うさぎ〉
その時施設の子供たちが信じてやまなかったおとぎ話。その〈うさぎ〉と友達になると、辛い訓練や試験を受けなくてよくなる、そんな噂は瞬く間に施設の子供たちの間での話題になった。もとより話す話題がない施設では自由時間でもみんなが無口で独りでいたが、その話が出回ってからはみんなが〈うさぎ〉探しに興じていた。
そして、それはマユもそうだった。
自分より小さいマユが信じるのは当然だとは思っていたが、当時から精神的に大人びていたファムは、それが嘘であることに気がついて

いた。そして、同じ時期にグローレンによって改造を受け、妹のように可愛がってきたマユを諭すことが自分の仕事と信じて疑わなかった。その〈うさぎ〉にマユが認められるまでは。

その後、マユの姿を見た者はいない。話によると、宇宙にある施設に移ったと聞くが、どこまで本当なのか。体質のせいか、精神薬が効きにくかったファムはその話の白々しさに嫌悪し、そしてマユを助けられなかった自分に無力感を抱き続けた。

その後、初めて自分に〈うさぎ〉の話をした男の子も〈うさぎ〉に認められた。模擬戦で墜落して死んだ。

その男の子の話を熱心に信じた女の子も〈うさぎ〉に認められた。身体改造中に臓器を刻まれて死んだ。

それ以来、誰も〈うさぎ〉の話をしなくなった。おおよそ精神薬でその事を忘れさせられたのだろう。ファムは朧気ながらずっとその〈うさぎ〉の亡霊に苛まれ続けた。

しばらくして、ネビロスの研究所に移動してから、久しぶりにマユの名前を聞くことになった。グローレンがその研究所の責任者だったからだ。

そして、そこでファムは〝マユが〈うさぎ〉になった〟事を聞いた。それが指す意味こそわからなかったが、自分が〈うさぎ〉に認められればマユに会える、ということだけを信じて、辛い訓練、試験を耐え続けた。

ネビロスが壊滅してからアクシズに移ってからも、ファムは〈うさぎ〉を探し続けた。それから数年、ティターンズ再興を掲げた活動家が秘密裏にジオン残党への接触を試みた際に洩らした言葉の中に、〈うさぎ〉を匂わすものがあった。そして、ファムはそんな不確定な要素に縋り、その試験が行われる所を襲撃した―

「……なるほどな」

自分の経験してきた事ではおおよそ図れないスケールの大きすぎる話に辟易していたのは事実だが、イオリとしては十分に理解できる話だった。

「で？その〈うさぎ〉があの〈ギャプランもどき〉なのか？俺には〈うさぎ〉と言うより〈おおかみ〉って感じがするがな」
「詳しくはわからない。だが、〝あれ〟と同じ〈ギャプラン〉ベースの改造機は施設の資料で何度か見たことがある」
「ならば正解なんだろうな」
　はあ、と大きくため息をつく。随分と面倒な厄介事に巻き込まれたらしい、という実感と目の前のファムの執念深さに感嘆の意を隠せない。自分の妹分のために必死の思いで生き残り、そして糸口を掴みかけている。自分には到底できない話だろう。
「ならさ、その辺の話、ターツァさんや整備長たちに話してみようぜ？解析の助けになるかも……」
　そう言い終わる直前、食堂の扉が開き、勢いよくクリスティーナが入ってくる。その表情に急ぎの旨を読み取ったイオリはファムとの話を中断した。
「どうした？」
「ターツァさんからの通達よ。緊急ブリーフィングを行うって」
「ブリーフィング？出撃か!?」
「よくわからないけど、早く来て！あと、貴女も」
　視線を向けられたファムは一瞬驚きの表情を浮かべるも、すぐに引き締め、「了解」と力強く頷いた。

☆　☆　☆

「おいおい……どうなってやがる……」
　ムサカ級〈アルストロメリア〉のブリッジで、偵察に出撃したアイザック小隊が形成する、広域レーダーチャートとにらめっこをしていたのはルイーズ・レイコフだった。左腕を三角巾に吊るし、頬にはガーゼをあてがっているが、その表情は傷による苦悶ではなく、その状況への疑問に歪んでいた。
「ルイーズ君、ファム中尉からの暗号通信によればあの艦は安全なのだろう？ならば彼らの後ろに隠れている二隻はなんだ？罠じゃない

のか？」
　艦長席に座るサンダーク・ラトロワ中佐が疑念丸出しの声音で尋ねる。ルイーズはそんな艦長が苦手だったが、今はそんなことを言っている場合ではない。
「ええ……この状況ならばそうとしか考えられません……ですが……」
　ファム中尉の機体でのみ使える秘匿回線は、ファム中尉のバイタルデータなどの厳しいセキュリティがなければ使えないはずだ。それを使ったならば自分の意思でしかない。詳しい話は知らないが、かつて連邦で強化人間にされたらしいファム中尉が連邦に寝返るなど……。薬を打たれてやむなく、とも考えられるが中尉がそう簡単に……？
「かと言って簡単に手を出すわけにも行きません。もう暫く、様子を伺うしかないかと」
　旧式とはいえアイザック小隊を積んでいてよかった、とルイーズが思ったのは初めてだった。
「重量増加分の仕事はしてくれよ……」

☆　☆　☆

　ブリーフィングルームに集まったのは、ターツァ小隊と予備で配属されているノマド中尉以下一個小隊、それからアラートパートを残したヴァッフ艦長を含む艦橋詰めのクルーだった。
「では、ターツァさん、説明して頂けますか？先ほどの話を」
　ヴァッフに促され、ターツァは一歩前に出る。その表情にはあの時、〈ギャプランもどき〉と対峙した時と同じような迷いが見られた。だが、イオリが驚くのはその表情ではなく、発言の中身だった。
「本艦、いや本隊はこれより第１３独立艦隊〈ロンドベル〉の作戦特権に基づき、サイド１〈ロンデニオン〉の強制捜査を行う」
　集まった人々、ヴァッフとターツァを除く全員に衝撃が走る。
「ちょっと待ってくださいよ、ターツァ大尉」

その中で最も早く口を開いたのはノマド中尉だった。
「今の発言、意味がわからないんですが？〈ロンドベル〉の作戦特権？確かに〈ロンドベル〉の傘下ですが、俺たち、第１４独立艦隊ですよね？」
「それには私が答える」
ノマドとターツァの間に入るように、ヴァッフが口を開いた。
「確かに我々は第１４独立艦隊としての任が与えられているが、連邦軍内部では仮設の艦隊として扱われている。そして、現在スィートウォーターの一件以来、第１３独立艦隊本隊は戦力の再編中だ。実働任務は我々に放任、とも取れる現状なら事後申請でもなんでもやりようはある。そして、責任はターツァ大尉がすべて取るという。それなら納得か？」
「いや、駄目ですね」
ノマドはなおも食い下がる。ターツァ小隊全員とファムを睨めつけると、大仰な仕草で前へ出た。
「確かに本艦の中において、彼ら程実戦経験が豊富な者はいない。特にターツァ大尉は尚更だ。だが、この訳の分からない発言内容に、納得がいかない、あるいは信用がならないという者、手を挙げてみてください？」
一気にまくし立てるノマドに促され、沈黙する一同。ややあって一人二人と挙げ出すと、ターツァ隊とファム、ヴァッフ艦長を除く全員がその手を挙げた。
「ご覧の通りですが？それでもその指示を撤回なさいませんか？」
「アンタ……！」
尚も詰るように挑発を続けるノマドに、クリスティーナが詰め寄ろうとするが、辛うじてその手をイオリが掴み、制止していた。
「やめとけ。向こうの方が〝階級〟は上だ」
沈黙と気まずさだけが漂うブリーフィングルーム。ややあってターツァはため息をついた。
「一応、艦長殿には報告したんだが……聞いてもらわんとやはり納得がいかないか」

「当然です。……なにをそんなに勿体ぶる？」
渋々、といった様子のターツァにノマドが再び食いつく。一瞬の迷いを再び見せたターツァが口を開こうとした刹那。
『第一種戦闘配備！後方より接近する熱源を確認！繰り返す！後方より接近する熱源！ミサイルと推定！衝撃に備えよ！』
艦内に響き渡るアラート音とアナウンスがターツァの話を遮った。
「やはり勘づいていやがったか……！」
「まさかそんな……本当に……!?」
ターツァとヴァッフの驚きように、やはり大事に巻き込まれていた事を再確認したイオリは、無意識に声を出していた。
「お前ら！ぼさっとすんなよ！出撃準備だ！」
いいんだろ？と振り返り、ターツァに視線で問う。
返事に力強い頷きが帰ってきたのを確認すると、イオリは真っ先にブリーフィングルームを飛び出した。
「艦長殿、これで確実でしょう？貴方の口から説明をお願いしたい。その方が多くの者が耳を傾ける」
ターツァはヴァッフに言い残し、イオリの背中を追った。

☆　☆　☆

ムサカ級〈アルストロメリア〉でも、その様子をモニターしていた。初め、ミサイルの発射を確認した際には、嵌められた事を一瞬覚悟したが、その矛先が〈レオントキール〉に向いている事を確認すると、サンダークはすぐにルイーズの発進と小型艇の準備を急がせた。
「畜生、連中め内ゲバおっぱじめやがった」
サンダーク以下のブリッジクルーが手際よく戦闘態勢を整え始めた。ルイーズは偵察に出ているアイザック小隊への指示を出しながら、自身も出撃の準備を始めた。
「ファム中尉になにかあれば……連邦の豚共め……死んででも殺してやる」

☆　☆　☆

アラートパートに就いていたジェガン小隊の出撃が終わり、続いてノマド小隊、ターツァ小隊の機体に灯が入れられ始め、主機の奏でる重低音がモビルスーツハンガー一帯を支配する。パイロット達が各々の機体に辿り着いた頃、無線からヴァッフ艦長の声が流れていた。

『突然の事で驚いているものも多くいると思うが、落ち着いて聞いてほしい。我々は悲しい事にとある策略に巻き込まれてしまった。かつての、悪名高きティターンズを再興しようとせん者共によって、我々は今窮地に陥っている。恐らくは、回収した機体もそれらの一環なのであろう。だが、ここで我々は戦うことを躊躇う訳にはいかない。かの暴虐な組織による悪政を人々が望むはずがないのである。事が公になれば、間違いなく正義が我々にあることが示されるだろう。ターツァ大尉の先見がなければ、既に我々はもう亡きものであったかもしれぬ。今は彼らと、ノマド小隊にこの艦の命運をかける。奮戦を祈るとともに、艦に残る我々は、我々にしか出来ないことを全うする事を期待する』

『へえ、若いのにいいこと言うじゃないの』

メインモニターに映るターツァが軽口を叩く。

「あのねえ、ターツァさん？アナタにももっと説明義務があると思うんですが？」

『そうっすよ、俺らにもダンマリだなんて、水臭い』

『まあ、考えがあっての事でしょうけど？』

イオリ、ラキア、クリスティーナの順にターツァのセリフの揚げ足取り。いつもの事だ。大丈夫、俺らはいつも通りだ。イオリはそう言い聞かせたが。

『……おう、そうだな』

やはり、ターツァの返しは煮えきらないものだった。

自分の不手際を恥じての事なのか、それともなにかまだ含むものがあるのか……。

『あー、ターツァ大尉……。先程は申し訳ありませんでした』
ターツァ隊の会話が終わるのを待っていたのだろうか？気まずそうにノマド中尉が詫びの言葉をターツァに述べた。
『ぶふーっ！』
『なっ、何が面白いっ!?』
その様子に思わず吹き出すラキアにノマド中尉の矛先が向く。
こっちもこっちでいつも通りだな。
イオリは深呼吸する。コクピットの匂い、主機の騒音、独特の雰囲気、全てを吸い込んで自分と一体にする。
相手がティターンズのエリートの生き残り？だからなんだ。
合法の交戦規定に囚われない無法者？むしろかかってこい。
『こちらブリッジです。発艦準備が完了次第、規定の順番で発艦してください』
「了解！」
イオリをはじめ、アリーシャの指示を受けた各機は発艦シークエンスを始めた。

☆　☆　☆

「なに？〈レオントキール〉と〈ダフニー〉、〈ナーシセス〉が戦闘を？」
デヴォンはその知らせを聞いたのは海の上だった。アルベルトとドルトとの会談、その他の諸々の雑務を処理したデヴォンは、休暇も含めて予定されていた滞在を早く切り上げてユーラシア大陸、プンツォリン基地へ向かう最中だった。
「困ったな。まだ早いんだけど……仕方ないか。例の機体の回収は徹底させてくれよ？〈繭〉を今失うわけには行かない」
報告の者を下げさせると、デヴォンは窓の外へ視線を投げた。果てしなく続く青い世界に吸い込まれそうになる錯覚を覚えながら、計画を振り返る。
ここまでは完璧だった。ジオン共和国に潜らせてた間者を通じて袖付きの一派に〈シルフレイ〉の噂を握らせ、襲撃の算段を建てさせ

る。運用試験をでっち上げ、その運用要員を通じて〈繭〉を暴走させた。その際に運用部隊を始末してくれたのは幸運だった。艦を自爆させる予定だったが、これで後々に怪しまれることが無くなった。
救援に向かわせたのは第十四艦隊所属のターツァ隊。これはニーゼスの采配だが、見事にジオンの女パイロットまで回収してくれた。これでジオンは〈レオントキール〉の動向に気を配る必要が出る。懸念事項として、ターツァ隊のターツァ大尉が挙げられたが、この大局の中で隊を任されていると言うだけで優秀な足枷がついているも同然。後はターツァ隊をサイド6に向かわせ、〈シルフレイ〉を輸送した所を見せつけ、大義名分をもって〈ダフニー〉、〈ナーシセス〉に始末させる筈だった。二ーゼスに不利な指令内容はデヴォンの権限で改竄すれば、その後の調査も問題ない。
「二ーゼス司令……。余計な事をしてくれたものだ」
向こうも勘づいたのだろう。今の計画が「欺瞞」であるのだろうと。
そう、最終的には指令内容を公開し、二ーゼスを処分する事がデヴォンの目的だった。それによって第十四艦隊を手の内に置く事。それこそが最終的なデヴォンの計画だった。その後に果たすべき大義のために……。
「やはり予定を切り上げて正解だった」
運はこちらに味方をしている。今は為すべきことを為すしかあるまい。デヴォンは通信端末を立ちあげると、素早く指を走らせる。
「頼みたい事があるんだけど、いいかな?」

☆　☆　☆

「こいつら……手慣れてやがる!」
先行したジェガン部隊は〈レオントキール〉を襲ったミサイル群を凌いだ後にMS戦闘へ入っていた。〈ダフニー〉、〈ナーシセス〉から吐き出されたMSは合計して16機。先攻小隊と中隊と別れた戦力のうち、先攻小隊を構成するMSは〈バーザム〉をベースにした、明らかに異質なものだった。

「回収した〈ギャプランもどき〉といい、こいつら〈バーザム改〉といい……！俺らは誰と戦ってるんだろうなぁ!?」
性能はほぼ互角に見えたが、明らかに相手の方が練度が高い。それもそのはずだ。先行していたジェガン部隊はアラートパートにつくのが始めての、新兵で構成されていた部隊だったからだ。
手心を加えられ、弄ばれているかのごとく少しずつ摩耗する機体と精神力、それを意識するにつれ、余計に焦りが生まれて行く。
その間にも主力と思われる中隊は拡散しながら〈レオントキール〉の防衛圏に浸透し始めていた。クラップ級を改造した〈レオントキール〉はモビルスーツ運用能力を向上させるために本体火力を犠牲にしている。この展開のされ方では轟沈も時間の問題のように思われた。
『隊長ォッ！助けてッ……！』
視界の隅で膨れ上がる爆炎が仲間の死を伝えた。
クソったれが！操縦桿を握る手が震える。
焦りと怒りと恐怖と。妙にクリアな思考と、それに追従しない体の動きにもどかしさを感じる。
「ッ!!」
ピンクの光条と衝撃が被弾を意識させる。目の前の〈バーザム改〉が笑った様に見える。わざとコクピットへの直撃を避けているのは明らかだった。だが、その銃口は真っ直ぐ自分を向く。次こそは殺す。そんな声が聞こえたかのようだった。
更に増して鮮明になる意識のなかで、銃口から光が漏れ出すのを認知した直後。
『しっかりしろよな、隊長さんよ！』
〈バーザム改〉を切り裂く〈リゼル〉の姿があった。
「イオリさん……！」
『ルドルフ中尉、あんたの隊の生き残りと艦の直援に付いてくれ！〈バーザム〉共と、分散した中隊は俺らがどうにかする！』
そう告げるなり、イオリの駆る〈リゼル〉は残る3機の〈バーザム改〉へと距離を詰めて行く。残されたスラスターの光の尾が消える程に、ルドルフは艦へと急いだ。

「こちら、Ｒ００１！ルドルフだ！ルドルフ小隊は〈レオントキール〉の直援任務に移行する！」
ルドルフのジェガンが飛び去るのを確認すると同時に、イオリの〈リゼル〉が放った光条が最後の〈バーザム改〉を穿った。
「ふう……」
一息つくイオリはヘルメットのバイザーをあげ、額の汗を拭った。規定では禁止されている行為だが、今はそれを咎める者はいない。
モニターに目を向けると、ターツァが率いる戦力が〈レオントキール〉の手前で敵の中隊を押しとどめているのが確認できた。しかし、戦力差は歴然としている。先の先行していた小隊もそうだったが、どうも全力で挑んでいる様子が見えない。なにか裏があるように感じられる挙動だった。しかも、ルドルフ小隊を直援任務に下がらせる采配。ターツァ大尉も裏にあるなにかを警戒しているように感じられた。
『Ｂ００４、被弾した……！予備弾倉消失、補給に戻る！』
耳に入ったのはラキアの声。当たりどころが悪かったのだろう。ビームライフルのＥパックを消失してしまえばビームサーベルだけで戦うしかなくなる。分けてもらおうにも、データのリンクを見る限りではラキアの現在座標からは補給に戻った方が早く、確実であった。
「こちらＢ００２、任務クリアー。ラキアの補充にあたる」
『Ｂ００１了解、任せたぞ』
ターツァの声を待たず、イオリは〈リゼル〉をウェイブライダー形態へ変形させ、フットペダルを力いっぱい踏み込んでいた。

☆　☆　☆

「ファムさん」
ノーマルスーツを着込み、医務室を出ようとしたファムは、自分を呼ぶ声に足を止めた。リフトグリップに運ばれてくるのはオペレーターの一人、アリーシャだった。

「……なんだ」
　先の一件で空いてるモビルスーツを探している事はバレている。もちろん今動こうとしているのはそれ以外の理由があるのだが、ニュータイプでもないオペレーターにそのことを察するのは不可能な筈。面倒な奴に見つかった、という事を盛大に言葉と表情に込めたファムの返答も意に介さず、アリーシャはファムの前で器用に静止した。
「身体の調子は？」
　唐突な質問に怪訝な顔に拍車がかかったファムは、突然押し付けられたメモ用紙に、更に混乱に陥る。
　それを読めと言わんばかりのアリーシャに促され、メモ用紙に目を落とす。
「……！」
「〝騎士〟が1人と〝馬〟が1頭。馬には〝新しい鎧〟が載せられているそうですよ」
「すまない、助かる」
　〝メモの指示〟に従い、格納庫へ向かおうとしたファムだったが、その肩はアリーシャに掴まれていた。
「何故、ターツァさんがあなたを助けたかはわかりません。でも、それに報いてくれるからだと私は信じてます」
　それもそうだ。ジオンの人間を理由も無しに助ける事なんて、普通はおかしいと思うに違いない。……自分は仕方なくジオンに与していただけだが、そんな事は自業自得、私のせいだ。
「ありがとう」
　ファムはそう言い残すと、リフトグリップを握り、格納庫へと急いだ。

☆　　☆　　☆

『緊急着艦準備ッ!!』
　無線に響く整備長の声。それはもちろん自分の〈リゼル〉の緊急着

艦に伴う号令だ。
堪えようにも、思わず笑いが口に浮かぶのを止めることは出来ない。
訓練通りの手順で緊急ネットに機体を投げた後、救護班がコクピットハッチに向かってくるのをモニターに確認し、ラキアは頭上のラックからカービンを取り出す。ノーマルスーツの上にコンバットジャケットを着込み、ポケットへ予備弾倉を詰め込んだ。
『お疲れ様です、お怪我は……』
エイドキットを手に、コクピットハッチを開けた救護要員は、決まり文句を最後まで言うことは出来なかった。
ラキアが構えたカービンから放たれた5．56ミリ弾がバイザーを貫き、ヘルメットの中を血で染める。
エアロックが間に合わず、未だ真空に近い格納庫内では銃声は響くことなく、救護要員の静かな死は誰にも気付かれることは無かった。
救護要員の男をコクピットの中に引き込むと、入れ違いにラキアは格納庫へと飛び出す。機材担当のローマン・ナスティを残して、手当り次第格納庫内の作業員をカービンで屠り尽くした。
残されたローマンはラキアのハンドサインに従い、近くの端末を操作する。艦内のメインシステムをハッキングしたローマンの手によって程なくして艦内の照明が落ち、予備電源が立ち上がった旨を知らせる自動音声が鳴り響いた。
予備電源が立ち上がった事により、艦内のセキュリティはアラートモードに移行する。尉官クラスのセキュリティコードであれば殆どの作業が行えるようになるのだ。
医務室の設備を移した独房も、これでラキアのセキュリティコードで開ける事ができ、〈シルフレイ〉のハンガーの解放も可能になったのである。
「ご苦労さん」
共犯として仕事をこなしたローマンへの労いの言葉を掛けたラキアは、同時にカービンの弾をローマンの額へと撃ち込んだ。格納庫の入り口の側にローマンの亡骸を放ると、ラキアは手動になった扉を

潜った。
予備電力下ではリフトグリップの機能はすべて停止している。幸いにして〈レオントキール〉の原典艦であるクラップ級は非常時の艦内での行動を考慮した構造になっていて、リフトグリップが無くても身動きが取りやすいようになっていた。
壁に設けられた突起を足場に、飛石の要領で通路を進むラキアは目的地、グローレンが収容された独房を目指す。
「……お迎えにあがりました」
酸素マスクを口に括り付けられ、簡易ベッドに拘束されたグローレンを前に、恭しく膝をつくラキア。勿論グローレンは意識が戻っておらず、反応を示すことは無かったが、ラキアはその事を意に介すことなく簡易ベッドの固定を外し始めた。
その最中、徐々に艦を襲う揺れは強く、間隔が短くがなって来ていた。
「潮時か……」
呟くなり、ラキアは作業の手を早めた。

☆　☆　☆

「……酷いな、これは」
ラキアと入れ違いに近い形で格納庫にたどり着いたファムは、そこに広がる光景に不覚にも立ち竦んでいた。
緊急着艦ネットに掛けられたまま、コクピットハッチが開け放たれた〈リゼル〉を見る限り、恐らくはこの惨状の犯人はあの〈リゼル〉のパイロットなのだろう。先ほどの停電も同じ犯人によるに違いない。
「問題は……」
この現状では格納庫の扉を開く事は難しいだろう。ブリッジから開く事は出来るのだろうが、戦闘中、しかも相手は中隊規模以上と聞く。先程から続く揺れが大きくなっているところを見るに、戦況は思わしくないのだろう。その最中に格納庫の扉を操作するのは負担であろう。そう考えると……

『姉さん、手すりに捕まっててくださいよ！』
ヘルメットの中に響く懐かしい声がその想像が正しかった事を告げた。
続く轟音と衝撃で格納庫の扉に大きな穴が穿たれた。そこから突っ込んでくるのは〈ムサカ級〉の標準艦載挺だった。その後ろにはシュトゥルム・ファウストを構える〈ギラ・ドーガ〉の姿があった。
ルイーズの指示に従って、ファムは手すりに捕まりながら扉に開けられた穴から漏れ出す空気の流れに耐え続けた。
『例の機体が後ろに載せてあります。パーッと暴れちゃってください！』
ファムは再びのルイーズの声に従い、小型艇のコンテナに向かう。その最中、格納庫の隅のスペースに固定された〈シルフレイ〉に目を向けた。メモに書かれていたターツァからの指。
「ルイーズ、頼みたいことがある」

☆　☆　☆

「キリがねぇッ……!!」
ラキアが離脱してから十数分、ノマド小隊との連携によって辛うじて中隊規模の〈ジェガン〉達を押しとどめていたが、ノマド小隊に撃墜機が出たのをきっかけに、徐々に状況は劣勢に傾きつつあった。
ノマド小隊が全滅するまでに12機いた〈ジェガン〉はその半分まで数を減らしていた。残るのはイオリ達3人。1人あたり2機の計算だが、敵は一撃毎に距離をとるために、感覚としては無限に敵が湧いているかのような錯覚に囚われていた。
『ラキアはまだ戻らないの!?』
『……』
クリスティーナの悲痛な叫びにターツァは唇を噛んでいた。クリスティーナ機、ターツァ機共に四肢の一部が切断され、機体の各所にビームが掠ったことによる溶解の跡が目立ち始め、更に徐々に押され始めた戦線に体力、精神ともに大きくすり減っているように見えた。

かく言うイオリ機も右脚の膝から下が失われ、右側頭部にも溶解痕が刻まれていた。
しかし、その中でもターツァはイオリとクリスティーナ以上に表情が暗かった。例のごとく、なにかを隠している、いや背負い込んでいるようにイオリの目に映っていたのだ。
「ターツァさん……っ!?」
しかし、ターツァの様子に気を取られすぎていれば所属のわからない、紺色の〈ジェガン〉中隊に足をすくわれかねなかった。
「マズった……!」
自分を狙ったピンク色の光条。ＡＭＢＡＣ機動で躱せる弾道だったが、咄嗟にとった操作はシールドでの防御だった。対ビームコーティングのシールドの表面でピンクの光が弾け、本体へのダメージは回避できたものの、その挙動が命取りになった事をイオリは瞬時に理解していた。気付かない間にワンステップの距離にまで詰めていた別の〈ジェガン〉がビームサーベルを抜き放ち、最上段に構え、一直線に突っ込んでくる様子が見えた。
次の動作までコンマ数秒。しかしその猶予は戦場には存在しなかった。
シールドを構え直す動きの最中、振り下ろされるビームサーベルが〈リゼル〉を袈裟斬りにしようとし、その持ち主である目の前の〈ジェガン〉が爆ぜ飛んだ。
『不注意が過ぎるな』
目の前のモニターにファムの顔が移されるや否や、容赦ない指摘がイオリを射抜いた。
『全く！ファムが来てなかったらあんた死んでたわよ！』
続くクリスティーナのツッコミに傷を抉られたイオリは「……助かった」と、一言だけ礼を返し、あらためて現れたそのＭＳへ目を向けた。
敵の〈ジェガン〉中隊も突如現れたジオンのＭＳに戸惑っているのか、攻勢の手を緩めていた。
『ファム・オーツェン、〈ジャ・ズール〉。連邦に与するのは不本意だが、

力になろう』
「〈ジャ・ズール〉……？」
グレーを基調にしたカラーリングだったが、その容姿にはどことなくアクシズ時代の〈R・ジャジャ〉の面影があった。その一方で四肢には袖付きを示すエングレービングが施され、その形状自体もイオリの記憶にあるものとは異なっていた。
『なんでもいいさ。それより、協力に感謝する』
『あなた達には色々と借りがある。これくらい容易い事だ』
ターツァを中心に、再び迎撃のフォーメーションを組み直す。ファムはこの編成は初見であったが、手薄のポジションを瞬時に見つけ、まるで高練度の教導部隊のような綺麗なフォーメーションを組み上げた。
それに呼応するように、残る敵の〈ジェガン〉部隊も同じようにフォーメーションを組み始めていた。尤も、その形はイオリ達のような防御に特化したものではなく、突撃に優れた〈アローヘッド〉型と呼ばれる楔状のフォーメーションであったが。
「失態を晒すのはあれで最後だ。きっちり汚名返上してやるからな……。かかって来いよ……！」
一触即発。互いに睨み合う妙な時間が流れる中、イオリは1人武者震いを堪えていた。今は目の前の事態にだけ対処するしかない。ターツァさんのことは生きて帰ってから問いただす。死んでしまえば真相すら知ること無いのだから。
ウィンドウに映るターツァとのアイコンタクト。均衡を破る一射は自分に任せる、という事らしい。頷きを返事にしてスイッチに指をかけた瞬間。
辺り一帯に閃光が走った。
「なっ……!?」
その光源は背後。背中を見せる訳には行かないが、咄嗟にメインカメラを振り向かせたイオリの目に映ったのは、おおよそ理解の追いつく光景ではなかった。
〝ラキアの駆る〈リゼル〉が銃口を向ける先で〈レオントキール〉が

船体の至る場所から炎を吹き上げていたのだ。〃
「……は?」
『どういうこと……?』
『……』
『やはり、な』
イオリ、クリスティーナ、ターツァ、ファムの呟きとため息が重なり、ノマド小隊の残る2人は一言も発する事はなく、呆然と自らの母艦が崩れていく様を見つめていた。
「って、それどころじゃねえ!?」
レーダーの警告音に現実に引き戻されたイオリは慌てて後ろを振り返る。しかしイオリが見たのは5機の〈ジェガン〉が撤退する背中だけだった。
「撤退していく……?」
『そうだ。目的の半分は達成したからな』
イオリのつぶやきに答えるように、オープンチャンネルからイオリのよく知った声が響いた。
『全く、ターツァさん。貴方の周到さには本当に感心だ』
半ば呆れたような、乾いた笑いと共に吐き出したラキアに、ターツァは『そうか、褒めてもらえて嬉しいよ』と全く嬉しさを感じさせない、険しい声と表情を返した。
『ラキア……アンタ!』
今にも噛みつきそうなクリスティーナを手で制するとラキアは〈リゼル〉のスラスターを煌めかせ、距離をとった。
『今日のところはこれで引き上げさせてもらうよ。せいぜい〈うさぎ〉と共に逃げればいい』
そう言い残したラキアは、かつて小隊訓練で見たことが無い程のスピードで、〈リゼル〉をウェイブライダー形態へ変形させ、母艦へと飛び去っていった。
取り残された4人の口をつく言葉はなく、帰る場所を失った彼らは、ただそこに留まることしかなかった。
つづく

第四話「予兆」

母艦である〈レオントキール〉とその艦載機部隊を失ったターツァ以下三人のターツァ隊は、ファムと後に合流したルイーズの計らいでムサカ級〈アルストロメリア〉に身を寄せる事となった。

宙域を去る前、1人でも生存者がいないかと各種センサーに目を走らせたものの、努力は虚しく〈レオントキール〉所属のクルーは全滅、直援に下がらせたMS達も消息不明という事実を改めて突きつけるだけだった。その一方で、幸か不幸かターツァが仕込んでおいたプログラムによって艦内の監視カメラの映像がターツァの〈リゼル〉にバックアップされていたために、〈レオントキール〉でなにがあったのかを知る事は出来た。勿論、ファムはあの時艦の中に居た為、あの惨状はその目に焼き付いていたのだが。

「……」

格納庫内で煌めくマズルフラッシュと飛び散る鮮血。力無く漂う作業員がカメラを横切る。

『……』

艦内通路は停電のためにリフトグリップが作動せず、ノーマルスーツに備え付けられているワイヤーガンを駆使してなんとか移動するクルー。その反対からはラキアと思われるノーマルスーツの男が壁や天井に設置されたステップを蹴りながら迫る。格納庫内と同じように、ラキアの構えたカービンが火を吹き、次々とクルー達が殺されて行った。

『……』

独房前についたラキアはアラートセキュリティによって認証レベルが下げられていることを利用して、易々とグローレンが収容された独房へと入っていく。独房内の監視カメラはセキュリティレベルが高く、ターツァのプログラムではハックできなかったものの、一連の映像はこの事件の犯人がラキアであり、その目的がグローレンの拉致、あるいは奪還であった事を物語っていた。

「なんで……なんでラキアが……！」

人を挑発するような言動で、度々衝突する事があったとはいえ、イオリはラキアを大切な戦友として認識していた。
『……』
答えのない沈黙に苛立ち、イオリはウィンドウに映る黙ったままのターツァを睨めつけた。
「答えてくれよ！ターツァさん！アンタ……アンタは知ってたんだろう!?ラキアが裏切る事、あの訳わかんねえ連中が襲ってくる事をさぁ!?」
しかし、答えは帰ってこない。黙り続けたターツァがきつく目を閉じ、空を仰いだ。一瞬、自分の声が無線に乗っていない事を疑ったが、ファムとクリスティーナが自分へと視線を向けているところを見るに、その可能性はゼロだった。
「なんで黙ってんだよ……少しでも良いから教えてくれれば良かったじゃねえか！そしたら……せめて……艦の皆が死ななくても……」
震える言葉を紡ぎながらも、溢れる涙に口が閉ざされる。
『すまない、話は後でだ。そろそろ着艦作業に入る』
申し訳なさそうにかけられたファムの声にイオリは口を噤む。ターツァも一言も声を発しないまま、ファムが促した通りに着艦作業の確認作業を始めていた。
イオリは釈然としないままだったが、初めての艦への着艦とあり、流石にその指示に逆らうわけにも行かなかった。濃紺の世界が広がるモニターに映る鮮やかな緑色をした船体に視線を向けると、仕方なく手元のコンソールからレーザー通信の同期作業をさせはじめた。
そう言えば、イオリは思い返す。少し前にファムが訪れて以来、イオリにとってその場の空気にファムは欠かせない存在になっているように思えた。どこか懐かしい感覚。そんな不確かな言葉でしか表現出来ない感覚に、自分は安らぎを感じているのであった。
『どうした、イオリ』
不意のファムの声に我に返る。どうやらモニター越しだが、ファムの顔を見つめていた格好だったらしい。「なんでもない」と告げると、ヘルメットを外して誤魔化すように汗を拭った。

☆　☆　☆

医務ユニットのベッドでグローレンが目を覚ましたのは先の戦端が閉じてから10時間後のことだった。

天井のライトを眺めながらグローレンは朧な記憶を少しずつ辿っていく。

「お目覚めですか？」

不意に耳に入った声に、グローレンは声の方へと振り向く。音もなく開いた扉の向こうに立っていたのは、黒色の連邦軍の士官服に身を包んだラキアだった。だが、グローレンはラキアではなく「ディエゴ」と呼んでいた。

「やめてください、それは研究所での名前です。今はラキア、ラキア・シュヴァルツサザン。貴方がそう名付けてくれたんですよ」

口元を緩めたラキアはそう言いながら部屋の中へと歩を進めた。

「……そういえばそうだったな」

今でも忘れることのない、ニュータイプ研究所での日々。子供の頃には想像もしなかった過酷な苦痛に塗れた生活は今でも細胞の一つ一つが記憶していて、それを忘れさせまいと常に自分の身を蝕むように、その痕を刻みつけてくるのだった。

いや、自分の苦痛などまだ可愛い方だ。自分が彼らにした事の方がよっぽど過酷な苦痛であったはずだ。

恨まれこそしても、自分はあの生活を恨むことは許されない。その決意を思い出させるのがこの男、ラキア・シュヴァルツサザンだった。

「……私が生きていて、君と話ができているということは……すべて計画通りに？」

「ええ、ターツァ・ブリッジスによって〈シルフレイ〉のセキュリティが破られたことを除いては」

「そうか……」

ティターンズ残党の中でも身分を偽り、連邦軍のテストパイロットになりすましていた自分に声がかかったのは、ティターンズが崩壊し

てからすぐの事だった。
戦時中からティターンズの敗色を感じ取っていた一部の官僚の手によって進められていた、ティターンズの意志を遺すための計画、「巨人の末裔」計画のキーパーソンとして抜擢されたのだ。
ニュータイプ研究所の中でも極秘で行われていた、ＴＲ計画に便乗したＴＲＸ計画に徴用されていたグローレンは、元々は最初期の人工ニュータイプ研究の数少ない成功例の中の、さらに一握りの生存者だった。他の成功例の数人はニュータイプ能力による膨大な情報に脳が耐えられずに発狂したと聞いている。
一年戦争末期にＭＩＡ判定を受けていたものの、何らかの形で生き延びていた者の中から選出されたパイロット達を対象に行われたその実験によって、グローレンはニュータイプ能力を獲得していた。しかし、その技術自体は成功率の低さや術後の生存率の低さなどが指摘され、後に対象が戦災孤児に移っていく事になった。グローレンはその経歴などから復隊を認められず、そのままニュータイプ研究所に抑留され、成り行きで研究に従事することになった。
その能力から研究所の被験者である子供たちから好かれていた事や、扱い易い経歴を利用されて、次々と汚れた役割を押し付けられるようになっていった。その結果、ＴＲＸ計画の主要メンバーとなり、グリプス戦役後にもその価値を見出されることになったのである。
件の計画の要として二ーゼス・アリューゼを筆頭として構成された第十四独立艦隊と、アナハイムエロクトロニクスの傘下にあるクロウズインダストリーが抱え込んだ旧ニタ研関係者による兵器開発部門がまとめ挙げられた。元組織の巨大さ故の大掛かりな下準備の段階ではグローレンは後者に配属されていた。
しかし、旧ニタ研派による不穏な動き、またグリプス戦役時の一大スキャンダルであったその存在は当初からの懸念事項であり、はじめから決起前に処理される手筈であった。そこでこの計画の鍵になる機体とグローレンを第十四独立艦隊へと横流しさせるために運用試験が偽装され、ネオ・ジオン残党までもを利用した茶番が繰り広げられたのである。

その際に、グローレンの素性は実働要員には公開されておらず、彼らはあくまで〈シルフレイ〉のテスト用のモルモットとして扱っていた。それ故に計画になかった、グローレンへの負担を無視した運用を強要した為に、粛清の時期が早められたのであった。

結果として想定される事態の範囲内で進められていた計画だったが、完遂される直前に、運悪くも頭の切れる人間によって妨害された形となった。その一方で、当然そのような妨害もある程度は見越して計画は準備されていたために、未だ二ーゼス陣営には余裕の空気が流れていたのであった。

「それはそうと、次の戦闘で〈例のユニット〉を使用したいんですけれど、最終調整を手伝って頂けませんか？どうやら本隊の技術屋達では手に余るようで」

思い出した様にラキアが口にした時点で、グローレンは一種の覚悟を決めていた。正確に言えば彼がこの部屋に入ってきた時点でその目的はおおよそ検討がついていたのだったが。

「〈フレア・インレ〉を使うつもりか？」

「流石ですね、プロフェッサー。その通りです」

「許可できん。〈シルフレイ〉が無き今、コアユニットに使えるのは〈バーザム〉だけだが、〈シルフレイ〉が無くては〈フレア・インレ〉を手懐ける事は出来ん。仮に出来てたとしても、それではお前の身体がもたんぞ」

〈フレア・インレ〉。ＴＲＸ計画が生んだ最終兵器。それを扱う為にこそ、〈シルフレイ〉の確保が必要であることはラキアも知っているはずだった。事実、その言葉を聞いたラキアは知っていると言わんばかりの笑みを浮かべた。

「しかし、何事も試運転が必要でしょう？〈シルフレイ〉が揃ってから〈フレア・インレ〉が動かないとなったら貴方だって困るはずだ」

グローレンの反論を予測していたのか、ラキアは準備していたかのようにまくし立てる。

「だが、お前にいなくなられるよりは……」と言いかけたグローレンを制するようにラキアは「私がどうなろうと知りませんよ。代わりはい

くらでもいるんですから」と吐き捨て、要件は済んだとばかりに踵を返す。
　そんなことは無い。お前はお前しかいない。代わりなどいるものか。そんな言葉が胸中に浮かんだが、グローレンはそれを声として発する前に、ラキアは部屋の扉を開けていた。
「ドクターの許可が降りたらすぐにハンガーに来てください。メカニック達が喜びますよ」
　そう言い残して扉を潜ったラキアの背中にグローレンは何も言うことは出来なかった。

☆　☆　☆

「……そんな、そしたら、ラキアもティターンズに作られた強化人間だったって言うんですか!?」
　同じ頃、〈アルストロメリア〉のブリーフィングルームに集められたイオリ、クリスティーナ、ファムとルイーズ達はターツァの口から彼が知る限りのことの経緯を聞かされていた。それらの話は殆ど正確で、ターツァの情報能力の高さを知ることが出来たが、お互いに素性を語ることのなかった事からイオリはターツァへの信頼が根底から揺らぐのを感じていた。しかし、同時に艦や隊の空気を考えて行動していたリーダーらしさに妙な感心も綯い交ぜになり、イオリはそこで考えるのをやめた。
　乗りかかった船である上に、イオリにはラキアの行動に追従する気は当然のように無かった。
「なるほどな。〈シルフレイ〉を動かしていたのがあの男だったことも納得が行く。しかし、それはつまり……」
「ああ、恐らく君の探している人間はもう既に……」
　二人の会話に、イオリは〈レオントキール〉の中でファムと交わした話を思い出した。
『探している人がいる』
　ファムの出自と今回の一件に根幹から関与している男グローレン。

そして、ファムが探している少女『マユ』。
　ターツァはファムがマユを探していることを知っていて、グローレンやファムの経歴にまで関知が及んでいる。いったい、ターツァは何者なのか。一度封じ込めた不信感が再び首をもたげるのを感じながら、その思考を消す様にファムに対して感じる妙な感覚について考えるようにした。
「ファム中尉、機付長がお呼びです。そちらの方々を連れて格納庫に来て欲しいそうで」
　不意に姿を見せた下士官がファムへ伝える声に遮られ、再びイオリは意識を戻した。
「ふむ。との事だが、構わないかな？」
　ファムに視線を向けられたターツァは無言で頷き、手すりに引っ掛けておいたヘルメットに手を伸ばした。

☆　☆　☆

「泳がせておけ、こちらの準備も万端ではないのだ」
　画面越しに〈アルストロメリア〉への対応を訊ねたラキアを、ニーゼス・アリューゼはそう切り捨てた。
『しかし、向こうには〈シルフレイ〉の手綱を握りうる人物がいます。静観すべき事案ではないと考えます』
　尚も食い下がるラキアに「早計だな」とニーゼスは冷たい言葉を吐いた。
「窮鼠猫を噛む、と言う。脅威になりうるのであれば、その隙すら与えずに一気に潰せ。いくらモルモットとは言えども、私が教えた兵法ぐらい覚えているだろう？」
　無線を隔てて尚も鋭さを失わない声と視線がラキアを貫く。手元のコンソールモニターに映るデータをモニターに見えるように動かしながらニーゼスは続ける。
「そして、君は猫ではなく、兎になる」
『……はっ』

しばしの間を置いて帰ってきた返事を最後にニーゼスは通信を切断した。ドゴス・ギア級改〈ジャミトフ〉の指揮座に腰を据えたニーゼスは深く息をつく。

ドゴス・ギア級大型戦艦を元に、次世代に向けた新機軸のモビルスーツ運用艦を開発するという構想によって建造された〈ジャミトフ〉は原型の艦に比べ、サイズダウンこそされているものの、モビルスーツの運用能力と火力はドゴス・ギア級と同じ水準とされ、将来的には〈ゼネラル・レビル〉と艦隊を編成する予定である大型艦である。その試験艦である〈ジャミトフ〉はニーゼスの思惑によって第１４独立艦隊に運用試験という名目で配備されていた。

そして、その〈ジャミトフ〉に乗るニーゼスはラキア達が乗る〈ダフニー〉、〈ナーシセス〉の後方に陣取り、戦場を眺めていた。

「デヴォンへの定時連絡は？」

指揮座の後ろに控えていた部下に声を投げる。

「抜かりなく。〝当初の計画〟通りの報告をしてあります」

「それでいい。〈繭〉が向こうの手に渡ったのは計算違いだったが、今からでも巻き返せる範囲の誤差だ。この計画は全て我が手中にあると言っても過言ではない」

☆　☆　☆

轟沈した〈レオントキール〉の予定していた航路通りにサイド1方面への航路を取るムサカ級〈アルストロメリア〉の格納庫は、他の同型艦とは異なった改造を受けていて、本来のＭＳ搭載数が６機のところ、７機を収容してなお多少のスペースができるようになっていた。さらに艦体後方に増設のコンテナがもうけられていて、そこに哨戒用のアイザック小隊が収容されていた。

その反面、格納庫の拡張によって搭載できる貨物量は少なくなっていて、二個小隊のパイロット、整備班、ブリッジ詰めのクルーの食糧を積み込むのが精一杯という有様だった。さらに言えば、パイロット達の居住スペースも狭く、先の戦闘で二人を失い余裕が生まれていた

とはいえ、イオリは自分達の来訪は拒絶されるものだと想定していた。ところが、格納庫へ向かう最中にすれ違う数少ないクルー達にそんな色は見えず、前を行くターツァはさて置くとして、イオリとクリスティーナは顔を見合わせていた。

というのも、〈アルストロメリア〉に着艦する直前、にイオリとクリスティーナは一連の騒動についてお互いの考えと立場を共有していた。ファムから言われた「いざと言う時は自分に従え」という言葉が頭から離れなかったイオリは、こっそりと無線機をクリスティーナに託していたのだ。機体についている無線機でも秘匿通信はできるが、ターツァが隊長権限を持っている事や時折謎めいた行動を見せる事から念のために準備したものだった。

さらに言えば、二人は各ＭＳに備えられていた自動拳銃を隠し持っているのだが、ボディーチェックされる様子も一切なかった。

泳がせているだけとも取れるが、ファムたちも、ターツァさんもその行動の真意がまだ見極められておらず、イオリには真相を推し量ることは出来なかった。

「おーい、姐さん！こっちっす！」

格納庫へ通じる重いエアロックの扉をくぐると、ノーマルスーツの上半身を着崩し、左腕にギプスを嵌めたラフな格好の男が手を振っていた。その前には白髪が混ざった、幾分か歳を重ねていそうな、それでいて背筋の伸びた、作業服の屈強な男が手に持ったバインダーを睨んでいる。

「ルイーズ、怪我の調子は？」

床を蹴って、その二人に近づくファム。白髪の男からバインダーを受け取りながらルイーズと呼んだ男の腕を小突く。

「へへ、大したことは無いですよ。ってて……」

その相貌に似合わず、にかーと無邪気な笑みを浮かべたルイーズは白髪の男をファムに任せて、器用に身を捻ってイオリ達の目の前へ流れてきた。

「ありがとうございます。うちの姐さん、真面目すぎてたまにあるんですよ、ああいう事」

そういうなり、ルイーズはターツァ達3人に深々と頭を下げた。
「いや、こちらこそありがとう。我々のような君達の敵を快く受け入れてくれて」
ターツァはルイーズが差し出した右手を握る。
「まあ、うちはネオ・ジオンの中でも異端中の異端、〝やむなく〟ネオ・ジオンに与している人間の拠り所でね。その中でもカリスマなんですよ、あの人は。あなた方が銃口を向けるまでは信頼する、それが姐さんの意向なんで」
しかし、そう返したルイーズの言葉は「なんですって?」と格納庫に響いたファムの声に遮られた。
「それは認められない。ジオンの機体を彼らに使わせられないし、錦の御旗としての役割が私にある事も承知ではあるが……。アレに乗るのは、乗れるのは私だけしかいないッ!」
咄嗟にターツァが声を荒らげたファムと圧倒される白髪の男の間に入ったが、それをかき分けてでもファムは白髪の男に詰め寄った。
「あの機体は私とマユを繋ぐ唯一の……!」
乾いた鋭い音がファムの声を遮った。正確にはターツァが平手でファムの頬を張ったのだ。その衝撃でファムは口を噤む。
「ターツァさん!?やりすぎですよ……!」
ここはジオンの艦の中、そしてファムはそこのカリスマだという話を先程聞いたばかり。そんな状況でファムに対して手を上げるなんて行為は自殺するに等しいものであった。しかし、ファムの反応は思いの外に冷静なものだった。
「いや……いいんだ。私が冷静さを欠いたのが悪い。すまない、ネルソン整備長」
頬を擦りながらファムは息を吐く。
一呼吸おいてから、「しかし、戦力は少しでも多いほうがいい。私の〈ジャ・ズール〉ならアームレイカータイプだが、誰でも、それこそ連邦の人間でも使えるはずだ」と改めてターツァと白髪の男、ネルソン整備長へ顔を向けた。
「君の言っていることも、君の気持ちもわかる。だが、それ以前に『君』

という人物が〈ジャ・ズール〉という機体に乗る事に大きな意味がある、という事を君は弁えるべきだ。君の〈ジャ・ズール〉は、アクシズ時代の〝騎士〟専用機の流れを汲むＭＳだ。それに乗るのは、乗れる資格があるのは、この中で君しかいないのだよ」
「しかし……！」
　兵力の乏しいジオン残党軍は、連邦軍以上に象徴的な存在が必要とされている。例えばかつてのシャアのようなエース。あるいはデラーズのような信頼の厚い指揮官。そしてその両方の素質を持ったハマーン。
　彼らのように歴史に名前を残す程ではなくとも、各戦術単位を率いるのにもそれなりのカリスマ性が必要になる、というのは容易に想像がついた。この所帯の中ではファムがその役割を担っていた。
「それに、だ」
　ネルソンの説得に付け加えるようにターツァが口を開いた。
「戦力の心配はいらない。〈シルフレイ〉の認証はイオリでも解除できるからな」
「なに……？」
「……??」
　唐突に会話の中で名前が出されたイオリは目を白黒させる。ファムや彼女の探していた妹分たちのために開発されたようなあの機体の認証を、開発に携わったグローレンならまだしも、普通の人間であるイオリが外すことなど不可能なはずであった。
「まあ、とにかくやってみればわかるさ」

☆　☆　☆

　プンツォリン基地へと到着してすぐに、デヴォンにはニーゼスからの通達が書面で告げられた。
「まったく……」
　その文書には、デヴォンの腹心による報告にあった細かい情報が一切なく、「全て順調」という事だけが記されていた。既にこちらが内情

を知っていると勘づいた上での報告なのか、それともただ単にデヴォンを見くびった行動なのか。本心は不明だが、いずれにせよニーゼスのデヴォンへの心中に良心はなく、前者であれば「裏切るならば好きにしろ」、後者であれば「後方の貴様に伝えることなどない」という事だろう。

「なら、好きにさせてもらいますよ」

呟くと、デヴォンは愛用の液晶タブレットを取り出す。ロックを外して開かれた画面から呼び出したのはよく使う連絡先が網羅されたアドレス帳。その中の一つ、ヘルメス商会と表示された項目を開く。

続いて浮かぶウインドウにパスワードを入力すると、出てくるのは〝互助会〟と記された連絡先の羅列だった。

一年戦争以来、正しくはそれよりはるか昔旧世紀から続く〝互助会〟と呼ばれる組織。起源をユダヤ系の秘密結社に持つこの組織は、世界中に一定数の構成員を抱え、人類史をデザインする権力の一つとして大成してきた。旧世紀における大戦では連合国と枢軸国の両者に伸びるパイプを用いて、戦後社会を形作ったとも言われている。宇宙世紀と呼ばれる、国家や人種の枠組みが取り払われたこの時代において、〝互助会〟は既に過去の遺物であったが、悲しくも繰り返された戦争、一年戦争において枠組みを無視した影響力は再び注目されることになった。世界の流れを変えることは出来ずとも、未来に「スペースノイド」あるいは「ニュータイプ」という人類の希望、可能性を残すために活動を行ってきたのである。

デヴォン自身も連邦軍所属の役人ながらその活動の一端を担っていた。また、その一方でニーゼス達のようなスペースノイドの敵となるティターンズ残党への便宜も図っている。〝互助会〟ともニーゼス達とも違うとある目的の為に行ってきた活動も正念場に至ったという頃合か。

〝互助会〟を代表して〈ティターンズ残党〉に忍ばせた間者は先の通達以降音信不通。恐らくはニーゼスの差し金で口を封じられたのだろう。〈レオントキール〉に出向いていた者達もラキアによって艦ごと消し去られている。

ふと、視線を外に投げれば、基地内を流れる川の流れが目に入る。地球の中だけでは飽き足らずに宇宙空間にすらも人工的な構造物を持つ人間だったが、自然の持つ独特の魅力に魅せられるのはやはり生き物としての性なのか。

若くして〝互助会〟の一員として名を連ね、宇宙世紀一〇〇年の節目を見据えた歴史のデザインの一部に関わってきたデヴォンだったが、或いはその歴史もこの川のように流れるべくして流れているものなのではないかという漠然とした喪失感を覚えていた。ニーゼス、デヴォンが謀を巡らす事すらも、歴史や時代がそのようになるべくしてなる様に導いているのではないかという気にすらなってくる。

しかし、いずれにせよ今は〝互助会〟の立場である以上は私情での介入は出来ない。それどころか、下手に騒ぎを大きくして他の人間に勘づかれでもすれば、その後に為さねばならない〝大義〟にも影響を及ぼしかねない。

「今は〝互助会〟の手足に徹するしかない、か」

液晶パネルに表示されたうちの一つの項目に触れると、画面は通話の待機画面に変化する。程なくして『私だ』という高圧的な女性の応答。

「デヴォンだ。シャトルを手配してほしい」

それから少しの問答の末に要求の手配が整うと、デヴォンは先の出張で使用した鞄とは別のカバンに荷物を詰め始める。

机の上に放置された端末の画面には地球を中心とした地球圏の概略図が写し出されていた。その中でＬ４の表示がある点が赤く点滅している。ラグランジュ４、サイド６。

☆　　☆　　☆

（Ｓｅｃｕｒｉｔｙ　Ｃｏｄｅ　ａｃｃｅｐｔ……）

〈シルフレイ〉のコクピットに座ったイオリは、解析されたセキュリティコードを打ち込む。コンソールを叩く音がやけに大きく聞こえ、ターツァをはじめとしたハンガーに集まる人々に緊張が走るのがわ

かる。
（Ｒｅｔｉｎａ　ａｕｔｈｅｎｔｉｃａｔｉｏｎ　ｗｉｌｌ　ｂｅ　ｐｅｒｆｏｒｍｅｄ……）
網膜認証を指示する電子音に促され、イオリは辺りを見回す。
「メインモニターの上だ」
下から響くターツァの声で上を向くと、赤いライトを灯す小型のカメラともセンサーともつかない装置が目に入る。
恐る恐る、そのライトの元に眼を見開いた顔を差し出すと、小さな機械の動作音と続く小気味良い電子音が認証をクリアしたことを告げた。
「すごい、本当に動いた……」
甲高い起動音と、自動的に操縦ポジションに変形し出した操縦席に感嘆の声を漏らすイオリ。
コクピットハッチが閉まると、セミ全天周囲モニターが起動、周囲の様子が写し出される。
（イオリ、聴こえるか？コマンドモジュールから操作系が連邦軍のプリセットになっているか確認してくれ）
機体外の集音マイクも高性能で、ターツァの呼びかけも機械類の轟音にかき消されることなくコクピット内に届いていた。
「えーっと、コマンドモジュール……」
〈シルフレイ〉は自分が普段使っていた〈リゼル〉と同じく連邦軍の機体だが、ベースになっている機体が旧式の〈ギャプラン〉である為かＯＳは異なるものを使用していた。ユニバーサル規格に則ったオープンソースを使用している為、戸惑いながらも辛うじて思い通りに操作することが出来ていた。しかし、イオリは妙な既視感を覚えていた。
どんなに思い出してもこのタイプのＯＳの機体に乗ったことは無い。訓練所時代、新兵訓練の実地研修、そして今の配属先。イオリはモビルスーツに詳しいわけではなかったが、少なくとも自分が乗ったことのある機体ぐらいは把握していた。
（どうした？そのＯＳ、慣れないのか？）

外からのターツァの声で我に返る。そうだ、今はこの機体の動作設定を済ませることが先だ。
「ごめんなさい、確認できました」
慌てて返事をすると（そうか、ならいい）とターツァの訝しげな声が帰ってくる。
（あとは、俺の機体にリンクされている以前の戦闘データを登録するだけだ。降りてきていいぞ）
どうやら、普通は専属の整備士が必要なパイロット毎の癖に合わせた調整も、搭載された人工知能が行ってくれるらしい。今後正式採用されるものの試験が行われていたようだ。
ターツァに促されてイオリは手元のコンソールに指を走らせる。
未だにイオリが〈シルフレイ〉の認証をパスできたのかの理由は判別としないが、これから強まるであろう追っ手からの攻勢を考えると、戦力が増える事は純粋に喜ばしい事だった。

〈シルフレイ〉の認証が終わってしばらくすると、野次馬が集まっていたモビルスーツハンガー内に確認できる人影は恒常の機付の整備士たちだけになっていた。
そんなハンガーの片隅に集まっていたのはターツァ以下3名と、ファム、艦長のサンダーク。
「ターツァ殿、この度はファム中尉を助けていただきありがとうございます」
集まるなり、いきなり頭を垂れたのはサンダークだった。先程のルイーズといい、如何にファムがこの所帯の求心力であるかが伺えた。
「しかし、このままサイド1〈ロンデニオン〉に向かうと言うのは、ネオ・ジオンの艦である〈アルストロメリア〉には荷が重い」
地球圏ではテロリストの烙印を押されているネオ・ジオン、あるいはジオン残党。〈ロンデニオン〉はロンド・ベルの拠点である故に、警備も生半可なものではない。無論、スイートウォーターの一件以来、ロンド・ベルの戦力も大きなダメージを受けているが、尚のこと本拠点のガードは固くなっている。

そこにテロリストと揶揄される組織の艦が単艦で突っ込めば、彼我戦力差を考慮することすら無意味なのは明確だった。
「ええ、それは私も承知です。ですから我々がサイド1に航路をとっているのはあくまでもポーズにすぎません。連中はロンド・ベルに類ずる外郭組織だとはいえ、今回の騒動は全て二ーゼスの独断であるのは明白です。あれは全体の意思ではない、そうであるはずがない。我々をサイド6に誘導したことがそれの証明だ」
「だが、その実情をサイド1の人間……ロンド・ベルの人間は把握出来ているんです？見せかけのつもりで、勘違いした外野に撃ち落とされるなんて冗談はやめて欲しいのだが」
「問題ないはずだ。このままサイド1に向けて航路をとっていれば、かならず二ーゼスは我々を潰そうとする。なぜなら、彼自身が本部にこの状況を知られることを良しとしないからだ。それを迎撃している間に、進路を変更、サイド6に向かって欲しい。もし、その前に本隊からの接触があれば、私のパスでこちらの話が通るようになっている」
本当なら、〈レオントキール〉の正統な連邦軍の識別コードを使ってサイド1にレーザー通信なり連絡を取るのがベストだったが、現在位置とサイド1との間に存在する暗礁宙域がそれを邪魔していた。
その事は〈レオントキール〉艦長のヴァッフにだけは伝えていたものの、二ーゼス一派の間者が相当数いる状況でこちらの手の内をすべて明かすわけには行かなかった。その点で言えば、自分たち以外に連邦軍の息がかかっているものが居ないこの環境は、これからの行動に置いては完璧と言えた。
「しかし、解せませんな。その二ーゼスとやらは何を企んでいるのか。連邦に反旗を翻して転覆させるでもなく、ただいたずらに引っ掻き回してるだけのようにみえる。回収した〈シルフレイ〉を手元に置く事が目的だとしても、いずれ騒動が公になればいくら情報操作してもただでも済まないだろうし、そもそもその犠牲を払う理由が〈シルフレイ〉にあるのか？」
単に個人的に気になる、という風を装う言葉だったが、ひたとター

ツァに注がれる視線は明らかに鋭く、隠していることがあるのでは、という詰問の意味を暗に含んでいた。「それは……」と口を開きかけたターツァは「私が説明する」という予想外の声に制されていた。
「……ファム中尉」
「端的に言えば、連中の目的は〈シルフレイ〉ではなく搭載しているプログラム、［Ｂｕｎｎｙ，ｓ―ＩＩ］だ」
「ますます分からないな。たかだかモビルスーツのプログラムの為にここまで……」
「違う！このプログラムは……」
不意に言葉を荒らげたファムはそこで言葉を切った。
それを一瞥したターツァは「人の死を以て完成するプログラムなんだ」と続けた。
予想外の言葉に絶句する一同だったが、悔しそうに俯くファムの様子から、それが出鱈目や妄言の類ではなく、事実である事を察した。
「強化人間の魂を吸い取り、それを持って完成するプログラム。その発端は当時開発されていた三号ＯＳ。そのＯＳも強化人間の死を持って完成するものだったが、偶然起きたその事象を意図的に再現して構築されたのがＢｕｎｎｙ，ｓ―Ⅱ……」
しばしの沈黙。艦の機関音とＭＳの整備に使う重機の立てる鈍い音だけが場を支配していた。
ややあってずっと口をつぐんでいたクリスティーナが「そんなのって……強化人間をわざと殺して、それで完成するって……狂ってる……」と漏らした声に一同は顔を上げた。
〝狂っている〟。戦乱の世界の中で、人間の内なる醜さが露呈し、そしてそれが誰しもが持ち得るものだということは、ジオンのコロニー落としに始まり、連邦の条約違反の核開発、ティターンズの悪行、シャアのアクシズ落としとこの数年の間において立て続けに起きた凶行の中で誰しもが悟っていた事だった。
だが、その中で人類は人類に失望しきれてはいない。なぜなら、自らがその狂っている一部だと気付いているからだ。その自らが犯したさらなる凶行を知りながらも、自分は違うと信じ、他人の狂気を〝

狂っている〃と断じる。だが、その行為自体すらも正常ではなく〃狂っている〃世界を構成している事から目を背けている。否定してもそれが変わることは無い。自らの狂行で自らの首を絞め、それから逃れるためにさらなる狂行に走る。旧世紀から続く人類の負の連鎖は、そのステージを持て余す広さを持つ宇宙に広げてもなおも留まることは無かったのである。

「ああ、狂っている」

ひどく低く、そして小さい声でターツァは頷いた。そして、思いつめた重々しい視線をゆっくりと上げると「いや、正確には狂っていたんだ、俺自身も。だから俺は、私はケジメをつけなくてはいけない」と、嘆息とともに吐き出した。

それは自分自身を殺し、決められた役割に縛り付けるような呪詛の言葉だった。

「待て、ターツァ。まだそれは……」

その様子に何かを察したファムは、実際には何を言おうとしているのかをその能力で感じ取り、ターツァを制しようと顔を上げたが、そこから先はターツァの手によって遮られ、続く言葉が出ることは無かった。

「クリスティーナ、イオリ。そして、成り行きとはいえこの件に関わることになってしまったこの艦の人にも知る権利がある。

全ては今から14年前、人類史上最悪の戦禍が過ぎ去った時から始まった―」

☆　☆　☆

地球と月の重力が均衡するラグランジュ・ポイント。その中の一つ、L4にはコロニー群サイド2とサイド6が設置されている。サイド2は一年戦争で壊滅、その後復興、サイド6は再編によって新サイド5と改められているなど、ここも例外ではなく宇宙世紀における戦禍の影響を受けた場所の一つである。

遠い過去に読んだ資料の情報を思い出しながら、デヴォンは分厚い

強化プラスチックの窓の外を眺めた。
地球を発って半日。幸いにもＬ４宙域までほぼ最短でアプローチできるタイミングだったということもあり、このまま行けば明後日には目的地に到着するという算段だった。
前回の定時報告以来、３度の規定時刻を迎えているがニーゼスとの連絡は一向に途絶えており、いよいよニーゼスは事を起こす時期に至ったと見える。最後の定時報告の観測位置からして目的地への到着は先回りできそうではあったが、自分自身もニーゼスと同じように腹に一物を抱えているという後ろめたさが、柄にもなくデヴォンに焦燥感を覚えさせていた。
目的地はＬ４ジャンクション。
月と地球の重力均衡地点の目印として宇宙航海の灯台になるように各ラグランジュ・ポイントに建設されてしばらくが経つ。いまでこそ自身の座標が正確にわかるように技術が発展しているものの、宇宙航海時代初期から存在するその建造物は一種のモニュメントとして多くの人々に親しまれてきた。
しかして、その建造物の中に足を踏み入れたことのある人間は多くいない。更に、現在Ｌ４ジャンクションには当初は存在しなかった物体が係留されている。
サイド６〈ネビロス〉の残骸。サイド６の１５バンチコロニー〈ネビロス〉に極秘で建造されたニュータイプ研究所の遺構がそのポイントに繋ぎとめられていた。
地球の反対側に係留されたそれは、地球上からは当然見えず、主航路の裏側である為に人の目に触れることは無かった。仮に見つかったとしてもデブリが流れ着いただけにしか見えないそれを訝しがる道理もなかったが。
ティターンズ残党が最後の希望を残した〈ネビロス〉。必ずそこにある〝それ〟をニーゼス達は回収しに来るだろう。最悪の場合〈シルフレイ〉はくれてやっても構わなかった。後に破壊すればいいだけの話であるからだ。だが、〈ネビロス〉に眠る〝それ〟だけは何があっても ニーゼスの手に落ちることは許されない。これはデヴォンの〝大

義〃の為でもあり、そもそも〃互助会〃としてもそれを許すはずがなかった。
一度ニーゼスの手に渡ればその後の処遇の点で〃互助会〃とデヴォンの間で食い違いが生じる恐れがあった。〃互助会〃にとってはＬ４に眠る〃それ〃は後の歴史に残す必要がなく、危険と判断すれば連邦の大部隊を動かして〃それ〃を破壊する算段を立てるはずだった。デヴォンが〃互助会〃に無断で宙に上がったのはそれ故の行動である。デヴォンの〃大義〃の為にも〃それ〃は存在していなければならなかった。
戻れないところまで来た。それは実験部隊のクラップ級を沈めた時に既に覚悟していたはずのことだった。だが、これによっていよいよ自分は〃互助会〃との縁も切れようかという段階に差し掛かって、自分の足元が瓦解していく錯覚を覚えたのである。今まではその盤石の地盤が自分の首を絞めているようにさえ感じていたのに、それが失われる時になって初めて自分自身に不安を抱きはじめていたのだ。
「全ては〃大義〃のためだ」
デヴォンは自身にそう言い聞かせるしか無かった。もう振り返ることは出来ない。人類の行く末のために、〃大義〃という名の狂気を自分の手で実現しなければならない。
その決意を載せてシャトルは常闇を走る。一人の男の逡巡なぞ知らぬげに、地球は無二の輝きをもってそれを見送っていた。
つづく

第五話「過去」

中立コロニー群、サイド６。一年戦争当初に中立を宣言して以来、表立った歴史に名前を残す事はなかった。

連邦とジオンどちらにも肩入れぜず、中立の立場を取り続けてきたサイド６だったが、実際の歴史を問われれば本当に中立であったかは怪しい所である。

中立というのはどちらにも属さないという意味に過ぎず、どちらとも敵対しないという言葉ではない。寧ろどちらの陣営も敵に回しかねない立場ですらある。事実、一年戦争終盤には連邦軍の極秘研究施設が設けられているなど、中立の立場であったという表現がどこまで正しいかは疑問が残る。無論、コロニー建設に従事するコロニー公社自体が連邦政府の元で運営されている以上連邦側に傾くのは些か仕方の無い事であるのは否めないのだが。

かようにして一年戦争という人類史上、最悪と言われる戦禍を切り抜けたサイド６には平和が訪れるはずだった。

しかし、そんな期待を裏切るように、地球連邦軍の一部将校たちによって発足したティターンズによる、少しでも連邦に対して不和があれば弾圧されるという世の中が生まれた事で再びの緊張を強いられることになるのだった。

一年戦争終盤に連邦軍の極秘施設が設けられたコロニー〈ネビロス〉を抱えるサイド６は後のグリプス戦役の戦果に巻き込まれる運命にある事を当時は知らなかったのである。

ＵＣ．００８０。〈ネビロス〉にはジオン公国から接収した人員や資材で構成されたニュータイプ研究所が設立されていた。オークランドの本部や地上の多くの施設とは別に、ジオニズムの礎になった「宇宙に適応した新人類の出現」という予言の検証を行うことを目的としていた。

連邦軍上層部は眉唾物として唾棄したその思想だったが、一年戦争で実際にニュータイプと呼ばれるエースパイロットが出現した事から研究の必要性に駆られたのである。

仮にその預言が正しければニュータイプを軍事利用し、間違っていたのならば研究の結果を公表してジオニズムを否定する材料にすればいい。その程度の浅慮の元行われた研究は後に狂気を孕んで、恐ろしい結果をもたらす事になるのであった。

ＵＣ．００８３、戦後の復興も程々という頃、戦後最大規模のジオン残党の武力蜂起から、残党狩りの為の組織の発足を求める声が高まり、連邦幹部の積極的な働きかけもあり治安維持を目的とした先鋭部隊「ティターンズ」が結成された。

同時期、地上のモビルスーツ工廠はティターンズに掌握され、ティターンズでの運用を目的としたＭＳの開発が進められていた。当時ＭＳ技術者だったターツァはカレッジの卒業後すぐにその開発に携わることになる。

ターツァが着任したのはアジアの旧タイ王国領〈パヤオ基地〉。一年戦争中に疎開させてきた工業設備が現役で稼働することから敷地内にＭＳ工廠を抱えており、ＭＳの地上調整を行ったり、試運転ができるようになっているなど、地味ではあるものの地上の拠点の中ではそれなりの規模を誇っていた。

着任して数ヶ月。新しい生活にも慣れようかという頃、パヤオ基地にロールアウトされたばかりの新型ＭＳ〈ハイザック〉が試験機体として納入される事になる。納入にあたって、式典に駆り出されたターツァは格納庫に収められたその姿を見上げて言い得ぬ恐怖を覚えていた。

「悪趣味だよな」

背後からかかった声に肩を震わせ、慌てて振り返る。自分と同じように〈ハイザック〉を見上げたデヴォン・クロウズが片手をあげるのを挨拶にしていた。

一年戦争以前より宇宙艦艇用の装備の生産を生業としていたクロウズ・インダストリー社の次期社長と名高いエリートで、カレッジ時代にひょんなことから知り合ったターツァの友人だった。最近ではＭＳの台頭に合わせて、２０ｍ級モビルスーツに対応した手持ち武装

のライセンス生産を積極的に行っているという。
「ジオン残党狩りの為の組織、ティターンズ。そして納入される新型機は、ジオンの主力機〈ザクⅡ〉を彷彿とさせるモノアイ・タイプと来た。連邦の、しかもエリートが乗る機体として不釣り合いだって声は聞こえるが、どうしたってかつて自分達の運命を託した機体に瓜二つの巨人に追われるジオンの連中の方が可哀想だ」
「バカ、お前口には気を付けろよ。どんな事で吊るされるかわかったもんじゃねえぞ？」
　地球連邦政府の盤石な土台を揺るがしかねない、スペースノイドの自治独立運動。その嚆矢とも言えるジオン公国軍の残党勢力を駆逐するティターンズの活動は発足から日の浅い今でさえ過激と評されている。事と次第によってはその場のティターンズ隊員の独自判断で連行、粛清されるという噂もあながち誇張されたものでは無いという気にさせられるほどであった。
　そんなターツァの心配なぞつゆ知らず、デヴォンは堂々と屹立する一つ目の巨人を見上げていた。
「ジムⅡの試験データ見たよ？反応速度、最大推力共にキャパシティギリギリって感じだね」
「ああ。オーガスタのクゥエルの改造機もどっこいって感じだし、この〈ハイザック〉がブレイクスルーになってくれりゃいいんだが」
　当時、各工廠での開発は競走のように行われていた。制式に軍に登録されるためのコンペティションのようなもので、現状の機体をベースに費用対効果の優れたエースパイロット用の高性能機の開発を行わせていたのである。
　新人とはいえ、めでたく連邦軍のＭＳ開発、しかもエリート部隊用の機体開発に携われるとなっては、なるべく良いものを残したいという思いもあり、今回の〈ハイザック〉の納入に藁にもすがる思いを抱いていた。そんな熱を帯びたターツァの隣で「ああ、オーガスタねぇ」と呟いたデヴォンの声は対照的にやけに冷たく、酷くターツァの耳に残った。

それからしばらくは研究に次ぐ研究で、カレッジの卒業研究よりも過酷なスケジュールに忙殺される日々が続き、ターツァはデヴォンとの連絡の暇はなかった。1週間連続でほぼ徹夜状態だったり、機体付きで実地に赴いたり。熾烈を極める機体開発の生活が一年続いた頃、ターツァは後の運命を変える人事を言い渡される。

「宇宙に上がる……？」

怪訝な声のターツァの問いかけに、基地工廠の人事担当は大きく頷く。

「ああ、参謀からの直々の人事だ。しかも、二階級特進。任官数年で技術大尉だなんてなかなかある事じゃないぞ」

喜色に満ちた人事担当の声と裏腹にその目は笑っていなかった。明らかに裏がある人事なのは目に見えている。人事担当の喜びも、自分の部下が出世する事への誇りではなく、組織の裏事情に自分が巻き込まれなかったことへの安堵の方が大きいのは想像に難くなかった。そしてその様子を見て胸騒ぎを覚えずにいられるほどターツァは組織の空気に鈍感ではなかった。

参謀の目的を推察しようにも情報は乏しく、余計な詮索をすれば自らの進退、ひいては生命すら脅かす可能性がある。

通告から早々に従来の仕事から外されたのは不幸中の幸いと言うべきか、ターツァに身辺整理をさせる余裕が与えられていた。面倒事に巻き込まれたターツァに最後の休暇を与えるための粋な計らいか、巻き添えを嫌った主任の保身を計った足切りかは判別としなかったが、いずれにせよターツァの心境は穏やかではなかった。

そんな、かつてとは別な意味で多忙な中、ターツァを訪ねてきた男がいた。

「やあ、元気してる？」

それは着任当初に顔を合わせたきりのデヴォンだった。

「なにも、こんな忙しい時期を狙わなくたって……。お前ぐらいの人間なら宇宙と地上の行き来ぐらい自由なもんだろ？」

かの大戦以来、とりわけ地球とコロニー間の渡航制限は厳しくなっていると聞く。ただでさえ地上に住めるのはひと握りだと言うのに、

その中でも自分の自由意志で渡航日程を決められるのは相当の立場を持つ人間に限られる。
「それはもちろんさ。でも、今君と会わなくちゃいけない理由がある」
ターツァの指摘を否定しないデヴォンは、唐突にいつもの余裕に満ちた笑みを引っ込める。
それを見たターツァは背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。良くも悪くも、この男は余裕じみた、人を小馬鹿にするような笑みを顔に貼り付けているのが常であった。それは自分がどんな窮地に立たされたとしても変わらず、クロウズ・インダストリーの出世競争に蹴落とされそうになった時ですらその笑みを忘れたことはなく、むしろその笑みが結果を覆したとすら思える。
そしてそんな男が、その笑みを引っ込めたということに、ターツァはただならないものを予感せざるを得なかった。
「君に見せたいものがあるんだ」

次の日、デヴォンに連れられてターツァが訪れたのはパヤオ基地郊外にある軍病院だった。
終戦から三年の時が経っているが、一年戦争時の怪我の治療で入院しているパイロットがいるらしい話を思い出したターツァは、てっきりそういった人物に会わされる物だと思っていた。
ところが敷地に足を踏み入れたデヴォンが一番大きいＡ棟を素通りして裏手に回り出した所でターツァはその首をかしげた。
「どこに行くんだよ」
前を行くデヴォンは返事を返さない。
ひたすら無言のまま、２人がたどり着いたのは正門からＡ棟を挟んでちょうど反対側、人気のない建物だった。二階建て程度にみえるその建物は、軍病院のすぐ裏手にある山の斜面がちょうど始まるという具合の場所に建ち、比較的新しい建物が目立つ軍病院の中で一際異彩を放つ程に年季が入っているように見える。
そんな外観に不釣り合いな最新式のセキュリティをパスすると、すぐに目に入ったのは街にあるような普通のクリニックのような待合

室だった。違う点をあげるならば、天井の蛍光灯の多くが切れたまま交換されておらず、リラクゼーション映像が流れていたであろう液晶モニターはその役目を終えて久しく、表面に遠目から見て取れるほどの埃をかぶっていた点だろうか。

デヴォンはその異様な空間に目もくれず、入口を入ってすぐ右手にあったエレベーターを操作する。扉越しに鈍い機械音を聞いたターツァはそこで思い出したようにエレベーターの存在に首を捻った。

そのエレベーターが明らかに後付けらしいことは周りの壁材との相違で察しがついたが、見上げたところにある階表示にBが付いているところを見てますます疑念

が深まる。

「こんな建物に地下があるのか……」

ターツァの呟きにデヴォンは沈黙を通す。

目的の階は地下三階。エレベーターの音だけが響く、妙に長い時間が流れた末、ターツァはゆっくり開いた扉から漂った臭いに鼻をおおった。

「相変わらず、だね」

同じく顔を顰めたデヴォンだったが、こちらは慣れているらしい、文句を一言残してエレベーターを降りていった。

半円状のエレベーターホールに出ると、目の前には病院の受付と言うには物々しい詰所とその脇のセキュリティゲートが見える。

詰所から出てきた白衣の男性の敬礼をデヴォンは手で制すと、ポケットから二枚のカードを取り出した。

「説明は僕だけでもいいんだけど、専門家がいた方がいい」

かしこまりました、と応じた白衣の男は詰所の窓から顔を突っ込むと誰かを呼ぶ声を上げる。程なくしてドタバタと音を立てて同じく白衣の男、違いは眼鏡をかけていることぐらいだろうか、が出てきた。

「お初にお目にかかります、マイク・ジョンソンです」

忙しなくペコペコと頭を下げたマイクはボソボソと自己紹介をすると、セキュリティゲートのコンソールに首から下げたカードキーをかざした。

開いた扉を手で示したマイクに促されるまま、デヴォンとターツァは奥へと進む。
長い廊下だった。蛍光灯の光に照らされ廊下は白い壁と天井、鈍色の床の色彩をターツァに押し付けるようだった。
歩を進めるにつれて徐々にキツくなる刺激臭は、マイクはもう慣れきっているらしく涼しい顔で二人を先導していく。一方でデヴォンもそろそろ限界が近いらしくハンカチで鼻を覆い始めた。
そんな折、「セロトニン＝イフェクサー」と前を行くマイクが呟く。
「なんだって？」
「この研究所で使用している精神薬のひとつですよ……この臭い、辛いですよね」
尋ね返したターツァに振り向くとマイクは、表情こそ変えなかったが嬉々とした声でそう返した。
そこに言い知れぬ狂気を見たターツァは不意にデヴォンの顔を仰いだ。
「なんなんだ、ここは一体……」
「ニタ研、って聞いた事あるかい？」
ターツァの問いに問いかけで返したデヴォンはターツァを振り返らない。
「あ、ああ……名前だけは」
少し前、工廠の技術者達で話題に上がった話にそんなのがあったと思い出したターツァは少し考えて憂鬱になった。その話題についてまともに考える事が出来ないぐらいに忙しい日々を送っていた自分の身に哀愁を感じたのだった。
と、上の空だったターツァは突然立ち止まったデヴォンの背中にぶつかる。
「見てくれ」
そう言ったデヴォンに促されたターツァはその視線を追う。延々続くかと思われた白い壁が途切れ、透明なアクリル窓になっている場所から見下ろすのは「手術室……？」そう呟いたターツァはすぐにその答えを否定した。

「似ているけど違うね」
　眼下に広がるのは、実際病院の手術室のように白く清潔そうな広い空間だった。だが、それと違うのは手術台のようなリクライニング式の椅子に座る患者の手足が拘束されている点だった。
　また、通常の手術室と違ってその手術台は一定の間隔を開けていくつも並べられている。
「さっきの話だけど、ニタ研。ニュータイプ研究所について、君はどこまで知っている？」
「え？それは……一年戦争の時に現れたっていうニュータイプについて、そして彼らが使う兵器についての研究をしているって事ぐらいしか……」
　ターツァの返答に頷いたデヴォンは「うん、間違ってはいないね」と答えた。
「でも、それだけではないのさ。ニュータイプ研究所、ここを含めて数カ所に開設されたそれは更なる研究を始めたんだよ」
　デヴォンの声が、さっきのマイクの声とは違って憂いを帯びているのがわかった。
　それが意図するもの、眼下の光景に注目していたターツァはそれに気がついてしまった。
「……子供ばかりじゃないか……！」
　先程のデヴォンの説明でここがニュータイプ研究所なるものの一つであることはわかった。そして、未知なる存在であるニュータイプについての研究をしていることも理解した。だが、ここで行われているのはなんだ？子供を集めて行っている事とは？
「ひひ……２９１５番を見てください」
　しばらく黙っていたマイクが口を開く。よく見ると確かに手術台毎に番号が振られているのがわかる。指示された２９１５番に目を向けたターツァは、それを認めるとすぐに目をそらした。
「なにを……なにをしているんだ……!?」
　一瞬、その目に映った物。それは額から上を切り取られた少年とも少女ともとれぬ子どもの姿だった。本来髪が生えている部分は一回

り分小さく、ぽっかり空いた空洞に収まった脳みそがよく見て取れたのだ。
　ターツァは気付かなかったが、そこには複数の電極が突き刺さっており、その端子はケーブルで隣の機材に繋がれていた。
「作っているんだ」
　デヴォンの呟きがターツァの問いに答える。
「ここではニュータイプを作っているんだ」
「ふざけるな！こんな……こんな非人道的な事……」
　声を荒らげたターツァはもう一度下を覗き込む。その瞬間。
「……ッ！」
　目が合ったのだ。
　物言わぬ、額から上を無くした、紫色の脳みそを剥き出しにした、朦朧とした表情の少年とその視線を交わしてしまったのだ。
　生きている。彼は生きているんだ。
　当然の事だったが、得体の知れない恐怖心がターツァの身体を駆け抜けた。
　何を伝えたかったのか。あの視線に何が含まれていたのか。
　わからない。いや、もしかしたら何も無かったのかもしれない。ただ生きているだけ、心臓を動かし、肺は空気を出し入れして、血液が身体を巡るだけの存在だったのかもしれない。
　無数に湧いた思いは恐怖と絡まり、見えない傷をターツァに刻んだ。
　そして次に「……あれは失敗だな」と呟いたマイクの胸ぐらを掴んだターツァは力一杯にその顔に拳を叩き込んでいた。
「やめろ、ブリッジス」
　冷ややかなデヴォンの声にターツァはその腕を下ろした。
「ブリッジス技術大尉、君を召集したのは他の誰でもない。この私だ」
　そう続けたデヴォンにターツァは力なく首だけを振り向ける。乱れて垂れた前髪が視線を覆い、頬には一筋の跡が見て取れた。
「君には私と共に宇宙へ上がり、サイド6〈ネビロス〉に所在するニュータイプ研究所にて研究にあたってもらう」

☆　☆　☆

「しばらくその時の光景は頭から離れなかった。いや、今でも夢に出るよ。あの眼がずっと俺を見つめてくるんだ。……一方で〈ネビロス〉の研究所は比較的穏やかだったのさ」

話が始まりしばらくして、ターツァの〝この件〟へのファーストコンタクトについてが話し終わった頃。

イオリは妙な悪寒に襲われていた。体調が悪いとかターツァの話を聞いて気分が悪くなったとか、そんな表面的な感覚ではなく、もっと魂の深くから湧き上がる感覚。しかし、そんな曖昧な感覚故に言葉にする事は出来ずにいた。

そんなイオリを置いてターツァの話は進む。

「俺がファムと初めて会ったのは〈ネビロス〉でのとある事件が最初だった」

☆　☆　☆

着任するまでこそ、ターツァはパヤオ基地の研究所で見た光景が日常になると思い込んでいたのだったが、実際に蓋を開けてみると、そこは平穏そのものだった。

〈ネビロス〉の一角、周りこそは工場などに囲まれた無骨な土地だったが、研究所の周囲だけは木々や色とりどりの花が植えられた楽園のような場所だった。

そんな敷地のなかに建つのは、クラシカルな雰囲気のお屋敷。とてもニュータイプ研究所とは思えない見た目の場所だった。

ただのカムフラージュという訳ではなく、そのお屋敷はニュータイプ研究所に所属する被検体である子供たちの家となっていて、規定のプログラム以外の時間では初等学校程度の授業が行われたり、綺麗に整えられた庭で子供たちが遊んだり、到底最初に見た施設と同系列のものという印象を抱かせない。もっとも、施設に出入りする大人の殆

どは白衣着用であるという点は共通していたのだが。
デヴォンによると、ニュータイプ研究所はいくつかの系統にわけられるらしく、〈ネビロス〉は地上のニタ研とは違い、〝施術〟レベルの低い子供たちが所属しているとのことだった。
その話の通り、〈ネビロス〉で見かける子供たちの殆どは手術による改造を受けておらず、投薬やトレーニングなどによる調整が主だった。
もちろん、脳には一度電極が埋められているのだが、地上で見たものとは違い、簡単な施術で済むということだった。もっともこの時点で認識がだいぶ歪められているのだが。
そんな〈ネビロス〉において、ターツァの主な仕事は被検体達のケアだった。
てっきり地上で行っていた機体開発に関係した仕事が与えられると思っていたターツァはやや肩透かしだったのだが、全くその仕事がない訳ではなく、お屋敷の地下、つまりはコロニーである〈ネビロス〉の外側に設けられた工廠にて、かなり機密に近いレベルで進められていたプロジェクトで開発される機体にアドバイザー的な立場で関わる事もあった。
とは言え、ほとんどの仕事は地上のお屋敷にいる事が多く、過去の働き詰めの時代が幻のようにすら感じる程だった。
しかし、平和な時間は長くは続かなかった。
ある時、工廠で進められていたプロジェクトについて子供たちに情報が漏れる事態が発生した。自然と子供たちが嗅ぎつけたのか、誰かが意図的に漏らしたのかは定かでは無かったが、この事件が穏やかだった〈ネビロス〉を一変させることになる。
進められていたプロジェクトというのは、当時ティターンズで進行中だったＴＲ計画と付随する機種統合計画に連なるもので、ニュータイプ（或いはその能力を人工的に付与する強化が施された人間、通称強化人間）に対応したものだった。
ギャプラン、或いはＴＲ―５〈フライルー〉と呼ばれる可変型の機体をベースにしたその機体はコードネームとして〈ラビット〉という

名前が付けられていた。ＴＲ計画で開発された機体は当時の試験運用部隊でウサギの意匠が施されていた、という事もあってのネーミングだったのだが、厄介なのはここからだった。

ＴＲ計画の完成系として計画されていたＴＲ―６には〝強化人間の人格を取り込んだＯＳ〟が採用される予定だったのだが、このＯＳというのが〝被験者の死をもって完成するＯＳ〟だったのだ。

そして、この事実は子供たちの間で噂になるにつれ、「〝うさぎ〟に認められた子供は施設から出ることが出来る」という脚色された話へと変化して行った。

そして、その被験者に選ばれた１人がファムが妹のように可愛がっていたマユだった。

他に選出された６名ほどの被験者達と共に〈ネビロス〉に移送されたマユ達は、様々な訓練や実験を受けることになる。被験者の殆どが事故によって死亡したり、人格データの抽出に失敗したフィードバックで廃人になったりと悲惨な結末を迎えたのだったが、その中でマユだけは全ての実験を手筈通りにこなした。

そして、その結果として帰らぬ人となったのだった。

その後しばらくしてから〈ネビロス〉に移ってきたファムはマユが〝うさぎ〟に選ばれた事を知ったという。そんなファムを支えたのがターツァだったのだ。

だが、さらなる事態の変化が訪れる。

〈ネビロス事件〉の発生がターツァとファムの運命を変えることになった。

この時既にグリプス戦役が開戦しており、徐々にエゥーゴが戦果を上げ始めたという頃。どこから情報が漏れたのか、〈ネビロス〉の研究所の存在がエゥーゴに察知され、施設が襲撃、制圧されるという結果になった。この時焦った幹部の一人が自爆プログラムを決行。

一部の被験者を実験用の〈マラサイ〉に搭乗させて脱出させたものの、施設は壊滅。更にコロニー内の大気が流出し、〈ネビロス〉は急激な圧力変化で圧壊。これが死者行方不明者数不明、生存者７名という最悪の結果を招いた〈ネビロス事件〉の顛末である。

ターツァはその生存者の1人だった。その日はたまたま工廠での作業でノーマルスーツを着ていたという事が幸いしたのだ。そして〈マラサイ〉に被験者達を乗せる判断をしたのも彼だった。結果として〈マラサイ隊〉で生存したのはファムだけだったが、その事をターツァは知る由もなかった。

その後、ターツァは爆発に巻き込まれ、他の人間と同じく宇宙空間へ投げだされる。身体中に火傷や打撲傷を受けたものの、ノーマルスーツの損傷が少なかったことと、比較的大きなデブリに取り付くことが出来たことのおかげで、救援挺に無事に発見されるに至ったのであった。

☆　☆　☆

「待ってくれ、ラキアはどうしたんだよ。あいつだって強化人間だって言うんだろ？〈ネビロス〉にいたんじゃ……」

話の区切り、ターツァが〈ネビロス〉のニュータイプ研究所を成り行きとはいえ離れる所まで聞いたイオリは、先程からの身体を襲う悪寒を抑えながら口を開いた。

さっきターツァは「ラキアも強化人間」だと言った。ターツァの話ぶりだと彼が関わったニュータイプ研究所は〈ネビロス〉が最後のようだった。

「落ち着け。問題はここからなんだ。救助艇に回収された俺は〝互助会〟と呼ばれる組織に匿われることになった。連邦やジオンの垣根を越えて、人類という種の存続、繁栄を続ける為に情報収集、干渉の斡旋を行うという活動をしている組織だ。簡単に言えばどこにも属さない諜報機関だと思ってくれればいい。

そこで俺は、ティターンズに与していた過去の情報を抹消されて、組織の目的のために行動するようになった。その最初の仕事としてお前達と出会った士官学校へと赴任するわけなんだが……実はこの表現は少しだけ正しくないんだ」

「ややこしい言い方しないでよ、ターツァさんの悪い癖よ？」

ターツァは言いたくない事がある時回りくどい言い方をする癖があった。決して誤魔化そうとしているのではなく、自分の表現が正しいのかを客観的に整理して自分の主観の含まれない情報になるように頭の中で整理しているのであった。それはターツァの正直すぎる性格ゆえの悪癖だった。
「すまない」そうターツァが口にしたが、それは突如鳴り響いたアラートによってかき消されて、音として響くことは無かった。

☆　☆　☆

「いいか、ここで連中を潰す。そして必ず〈シルフレイ〉を手に入れるんだ」
〈バーザム改〉コクピット内。ヘルメットの気密を確認したラキアが通信機に吹き込む。
ニーゼスの乗る旗艦〈ジャミトフ〉に移動したラキアの〈バーザム改〉には大型のユニットが接続されていた。
〈フレア・インレ〉ユニット。〈ＴＲシリーズ〉の集大成〈インレ〉を小型化させたそれは〈ジャミトフ〉の格納庫内で一際スペースをとっていた。横幅高さ共に２０ｍ、全長が３０ｍ程の鳥型をしたユニットの腹部に収まるように接続された〈バーザム改〉はさながら主従が逆転したかのような錯覚に陥る。
（コクピットが残ってれば、どれだけ痛めつけても構わないんでしたっけ？）
「ああ、所詮必要なのはメインシステムに過ぎない。思う存分暴れてやれ」
帰ってきた部下の問いに返事を返したラキアは視界の隅、モニターに映りこんだ人影に気がついた。
「プロフェッサー……」
それは無重力用点滴ユニットを片手に半分ノーマルスーツを着崩したグローレンだった。　手招きしているところを見ると個人的な話があるのだろう。

ため息をついたラキアは出撃までの猶予があることを確認して、コクピットハッチを開いた。
「どうしたんです。息子が戦地に赴くのを見送りにでも来たんですか」
冗談めかしたラキアに帰ってきたのは予想外にも「そんなところだ」という生真面目なグローレンには珍しい返答だった。
「武力誇示の為、という名目で〈フレア・インレ〉を使わせているが、先程も言った通り〈バーザム〉をユニットにしている以上、１００％の性能は出せないと思え」
当初〈フレア・インレ〉の使用に待ったをかけたグローレンだったが、ニーゼスからの「武力誇示によって戦意を喪失させる」という提案を受けて渋々実戦用の調整を行っていた。
「それに……」
「サイコミュユニットの感度が推奨レベルに達してないって話でしょう？」
ニーゼスからの提案を受けた際にもすぐに認めた訳ではなく、〈フレア・インレ〉を動かす事のデメリット、操作難度が非常に高い事などを何度も説いていたのだったが、その時そばにいたラキアはその主張の殆どを記憶に留めていたのだった。
「……ああ。君の〈バーザム改〉は試作段階の〈サイコ・ＡＭＢＡＣ〉を搭載しているおかげで、なんとか〈フレア・インレ〉の器として使えるに過ぎん。細かい姿勢制御こそサイコミュとメインシステムが請け負うものの、火器管制から基本の戦闘動作は手動になっている。君を侮っている訳では無いが、このクラスの機体を動かすには……」
そこで言葉を切ったグローレンは器用に身をひねりラキアに背中を向けた。
「どうしたんです？らしくないですよ」
「すまない。我々の為に君にこのようなことを強いてしまって」
グローレンの前でこそラキアは進んで戦闘を好むかのような振る舞いをしていたが、本心ではやはりかつての仲間であるイオリやクリスティーナを裏切った負い目を感じていた。強化人間としての記憶

を取り戻した事でターツァが過去に何をしたのかを思い出した事だけが唯一の原動力になっていたが、同時にこれまで本心はどうあれ自分たちを育ててくれたターツァへの恩を感じていたのも事実である。
故に自分のような存在を生み出した世界への復讐のため、一部で利害が一致したニーゼス一派に取り込まれていたものの、〈レオントキール〉を沈めた事は消えない傷として刻まれ、逆に引き返せぬ道であることを自分自身に突きつけていたのであった。
「……無事を祈っててくれればそれで十分です」
入り乱れる想いに返す言葉を見失ったラキアはそレだけ言い残し、〈バーザム改〉のコクピットへと戻っていくのであった。

☆　☆　☆

（前より数増えてない!?）
先に迎撃に上がっていたクリスティーナの悲鳴が無線越しにコクピットに届く。イオリは逸る気持ちを抑えながら〈シルフレイ〉の発艦準備を進めていた。
〈シルフレイ〉の機能の中には未知なるものが含まれている為に、初期設定を済ませてあったのだが改めて出撃前にシステムチェックを行うべきという声があったのである。なにしろ一度自らの母艦を沈めた狂犬である。〈アルストロメリア〉のクルーが慎重になるのも頷けた。
システムチェックに必要な人員としてターツァが残る事となり、先鋒としてクリスティーナ、ファム、アイザック部隊が一足先に火線を展開していた。ルイーズは怪我が完治していない事から船体上部に据え付けられたスキウレ砲の砲手に回っている。
「ターツァさん！早くしねぇとやばいんじゃないっすか!?」
（待て、もう少しで終わる……よし、行けるぞ！）
モニターに映ったターツァが親指を上げたのを合図にイオリは口笛を返事として返すと、コンソールに指を走らせ〈シルフレイ〉の主機を立ち上げた。

重々しい機械音がコクピットに響き渡るのを聞いたイオリはコントロールグリップを握り込む。今まで使っていた〈リゼル〉の洗練されたデザインと違い、明らかに試験機、機能性に特化した無骨な、それでいて拡張されて複雑なフィンガースイッチの類を弄ぶと、格納庫内の誘導灯が進行を示した。

それに従い、カタパルトデッキへ機体を移動させ、管制官の指示を待つ。

目の前に展開された発艦指示が全てグリーンに変わるのを見たイオリはその瞬間になってジオン式の発艦申告の有無について思考を巡らせた。

一瞬の逡巡の後、とにかく一刻も早く戦線に加わる事を優先するべきという答えを導いたイオリは「イオリ、〈シルフレイ〉行きます！」と叫び、フットペダルを踏み込んだのだった。

結論から言うと、戦況は好調とは言えなかった。辛うじて友軍に撃墜機は出ていないものの、大小の被弾、小破、中破が散見される一方、それを包囲するように展開した敵部隊は何機かの撃墜機こそあれど、圧倒的な物量差でじわじわと包囲網を狭めていた。

「……随分と舐めた真似しやがったな」

先の戦闘時からの補充分を考えても、どうやら以前は投入する戦力を限っていたように見えた。

あの時ですら辛酸をなめさせられたというのに、それを上回る物量を以前より限られた戦力で相手取るというのは無謀のように思えたのだ。しかし、

（三番機、援護する！）

無線から聴こえる、ファムをはじめとした〈アルストロメリア〉隊はそれに怯むことなく、偵察用である〈アイザック〉を器用に使いこなす〈アイザック〉部隊と、それをカバーするように立ち回るファムの〈ジャ・ズール〉が前線を維持し続けていた。

（モノアイは、俺らだけで十分なんだよォッ!!）

雄叫びをあげるのはスキウレ砲を操る〈ギラ・ドーガ〉を駆るルイー

ズ。まばらではあったが、的確な砲撃で徐々に戦力を削る事が出来ていた。
（負けていられないな）
ゴンという音ともに無線よりクリアな音声が耳元で弾けた。見ればイオリに続いて上がってきたターツァが〈リゼル〉の腕を〈シルフレイ〉に触れさせている。
「……当然っすよ」
闘争心を刺激されたイオリは、ニヤと言う笑みを返事にして、フットペダルを踏み込む。
慣れない機体のせいか、思いの外加速の勢いが付きすぎた〈シルフレイ〉だったが、咄嗟の思いつきでその勢いを利用してそのままフットペダルを踏み込んでみる。
こころなしか、加速の感覚が〈リゼル〉のウェイブライダー形態に近く感じられたイオリは、頭にその感覚を叩き込む。だとすると旋回は……。
身体に染み付いた感覚と直感を頼りにコントロールグリップを倒す。
「なるほど」
思った通りの操作を確認したイオリは改めて驚嘆の息を漏らした。直線の加速やスピードに優れた〈リゼル〉のウェイブライダー形態に匹敵する操作性を持つ〈シルフレイ〉の圧倒的な推力の底知れなさに好奇心半ばではあったが恐怖を覚えたのであった。
（なーに遊んでるのよ）
モニターに映った〈リゼル〉、クリスティーナの声に「悪い」と素直に応じたイオリは、フィンガースイッチを操作、急遽〈アルストロメリア〉で予備として余っていたビームサブマシンガンを構えさせる。
〈シルフレイ〉が持つ専用の携行火器、ブレードライフルがファーストコンタクトの時に破損して使用出来なかった為であったが、三指タイプのマニピュレーターを採用している〈シルフレイ〉ではユニバーサル規格の装備でも、本体からのエネルギー供給を要する装備は使用出来ないという制約があった。その点、〈アルストロメリア〉にあった

ビームサブマシンガンは弾倉式のEパックを採用している為、願ったり叶ったりというわけである。
先鋒として交戦していた〈リゼル〉の接近によっていよいよ敵本隊に出現を認識された〈シルフレイ〉は、流石本来の目的と言うだけあって、集中砲火を浴びる羽目になった。
包囲陣を敷いている敵最前線の後方、火力支援の陣形からも攻撃が始まる。
シールドを装備していない（そもそも構造上装備できない）〈シルフレイ〉はそれらを全て回避機動だけで躱さなければならなかった。
しかし、流石の推力と言うべきか。〈リゼル〉では考えられない軌道を描き、なんとか被弾すること無く凌ぐことが出来ていた。一方で操縦するイオリにかかる負担はなかなかのもので、一つ一つの動作に息を荒らげざるを得なかった。
「ははっ……！やっぱり……とんでもねえGだな……！」
辛うじて茶化すのが精一杯だったが、その視線は確実に迫り来る敵の攻撃を捉えていたのだった。

「ふむ……あの軌道、やはりイオリでなければ……」
一時的に攻撃の手から逃れたターツァは視界の隅、モニターのなかでズームアップされた〈シルフレイ〉の曲芸的な回避機動を見て呟く。改めて〈シルフレイ〉をイオリに預ける事が出来たことに胸を撫で下ろすとともに、あまりに過酷な道を強いてしまった事に胸を締め付けられていた。あの機体に乗ったのが〝あの〟イオリである以上必ず……。
しかし、その思考は鳴り響いたアラートにかき消され、形を結ぶ前に霧散していた。
モニターに目を向けたターツァは、最大望遠で映し出された映像に映った機体に息を呑んだ。
「まさか……こいつは……」
「くぅおおおお……！」

幾度にも渡る強引な回避機動を繰り返し、いよいよもってイオリも唸り声をあげ始めた頃、突然止んだ敵の攻撃に、イオリは一瞬何が起きたのか思考が停止しかける。が、次の瞬間にアラートと共にモニターの隅で弾けた強烈な閃光に、とっさの判断でイオリはフットペダルを踏み込んでいた。刹那、背後を掠めるメガ粒子の奔流。続くアラートに、光の源に向けたカメラが最大望遠で捉えたのは〝鳥〟だった。

正確に言えばそれは鳥のように先端が尖り、翼のように後部を三角形状に広げた大型のＭＡであった。

腹部に収まるのは、ワインレッドに染められた〈バーザム改〉。その色にイオリは見覚えがあった。

「ラキア……！」

パーソナルカラーでの塗装が認められなかった〈リゼル〉こそ通常カラーだったものの、訓練所から様々な物をその色で染めていた。

懐かしさと同時に怒り、そして何故？という疑問、様々な感情が入り乱れた激情が身体を走る。次の瞬間には無謀にも全速力で〈シルフレイ〉を突貫させていた。

右手でビームサーベルを抜き放ち、上段に振り上げる。その動作とともに一直線の軌道を上方にくの字型になるように折り曲げると、〈シルフレイ〉は〈バーザム改〉を目掛けて今度は下方へバーニアを噴射する。圧倒的な速度の斬りかかりは吸い込まれるように命中したかに見えたが、寸手の所で展開したサブアームが握るビームサーベルと斬り結び、攻撃は届かなかった。

（よお、イオリ。どうだい、〝うさぎ〟の乗り心地はよ？）

「お前の〝鳥もどき〟に比べたら幾分もマシだろうな」

接触回線が開き、飛び込んできた懐かしい声に、イオリは感情を飲み込んだ極力平静を装った返事を返す。

（相変わらず馬鹿にしてくれちゃって）

「お前も大概だ、この野郎」

神経を逆なでするような喋り方。ラキアは何も変わっていなかった。なのに。

「なんでお前はそっち側にいるんだよ……なんでそんなに変わっちまったんだよ！」
今までと変わらない無駄口の叩きあい。だが、その間の距離は気が遠くなるほど離れてしまったように感じた。
（変わっちゃいないよ）
隠し切れなかった激昂に対して、帰ってきたのは酷く冷めた声だった。
同時に斬り結んでいたビームサーベルが押され始める。推力だけでは覆しきれない圧倒的なパワーの差。
咄嗟にその場を離れたイオリは次に向けられた銃口を認めると、コントロールグリップを倒した。
仰向けに姿勢を崩した〈シルフレイ〉を掠めたピンクの光条は後方へと飛びさり、数機の〈バーザム改〉を蒸発させた。
「クソ、孤立させられてたのかよ」
〈アルストロメリア〉を中心とした戦闘中域を大きく外れた自分の今の位置に気が付いたイオリは、自分の浅慮を悔やんだが、同時にそれを誘発させたラキアの的確な判断にも感心させられていた。
（イオリ、お前もこっちに来ないか？）
ノイズ混じりの声がイオリの耳朶を打った。
（こちらの目的は〈シルフレイ〉だ。投降してくれれば命は保証する。俺の口添えがあれば役職だって……）
「嫌だね」
ラキアが言い終わる前に拒絶の言葉を吐いた。
「目的すらわからない、そしてなにか理由があるにしても仲間を平気で裏切るような連中に誰がついていくかよ」
それは全てイオリの本音だった。今のラキアに小細工は通用しない。ありのままの言葉をぶつける以外の方策が見つからなかった。
（へえ……俺が平気に見えてたのか）
「あ？なんだって？」
ラキアの呟きはノイズに紛れてイオリには届かなかった。
次の瞬間、突然にバーニアの光を煌めかせた〈バーザム改〉は展開

したサブアームで〈シルフレイ〉を拘束する。
（なら俺は、お前の言う通りを演じるしかねえな）
接触回線によって今度はスムーズに聞き取れたラキアの声だったが、コクピットを襲う衝撃にイオリは返答どころではなかった。
程なくして拘束を解放されると、続けざまにビームサーベルの斬撃を受ける。明らかにコクピットを狙った攻撃ではなかったが、ビームサーベルを構える余裕がなく、回避機動を取らざるを得なかった。
しかしそれを見越したかのように放たれたマイクロミサイルの群れが〈シルフレイ〉を飲み込んだ。
機体各所に穿たれるマイクロミサイルは、一つ一つの威力は小さいものの、連鎖的に爆発する事で広い面にダメージを与える。
咄嗟に前方へバーニアを吹かし、相対速度を減らして物理ダメージを軽減させたものの、〈シルフレイ〉の装甲は至る所に傷を受けることになった。
一番の打撃はビームサブマシンガンが破壊された事である。残るのは固定武装の肩部メガ粒子砲二門。取り回しが悪い上に、連射性に乏しい（イオリは知らなかったがモード変更で連射も可能である）ため、使いにくい印象を持っていて、事実この戦闘では一度も使用していなかった。
すれ違うように後方に飛び去った〈バーザム改〉に向けて数発撃ってみるものの命中せず、諦めたイオリはビームサーベルを構える他なかった。
数度の交錯の果て、〈バーザム改〉がいよいよビームサーベルを構えたという時、斬り抜けた〈シルフレイ〉に斬撃の感触はなく、フェイントだと気づいた時には再びサブアームの拘束を受けていた。
（殺しはしないさ）
その声を最後に、スペースデブリに叩きつけられた〈シルフレイ〉のコクピットでイオリは意識を失った。

「ラキア……あんた」
〈シルフレイ〉をスペースデブリに括りつけ、ビーコンを設置したラ

キアが駆る〈バーザム改〉はクリスティーナ機と相対していた。〈シルフレイ〉の回収を近くにいた適当な人員に指示し、それを見送った後でラキアは敵の予想外の戦果に「ほう……」と感嘆の声を上げていた。

〈アイザック〉部隊から2機の撃墜機が出ている以外は健在な〈アルストロメリア〉隊は包囲陣の半数近くを削る大健闘を見せた。

しかし、〈シルフレイ〉と戦闘を行っているはずのラキアの〈バーザム改〉の登場とあって、その士気が下がったのは言うまでもなかった。

「……まさかイオリを……？」

（さあな。まあ、目的は達成したとは言っておくか）

目的の達成、つまりはイオリの乗る〈シルフレイ〉を回収したという事だろう。

唇を噛んだクリスティーナだったが、（だが、それですんなり帰る訳にも行かなくてね）と付け加えたラキアの声にその動きを止めた。

（俺たちと同じように〈シルフレイ〉目当てで襲いに来られたら困るからな。ここで潰しておけ、という命令だ）

「あんた……！私はともかく、ターツァさんに申し訳ないとか、そういうのはないの!?」

（お前もか……。本当に覚えていないんだな）

ノイズの乗ったラキアの声だったが、辛うじてクリスティーナはその言葉を拾っていた。

覚えていない？なにが？覚えていないのはあんたの方じゃない。

「あんたこそ覚えていないの!?私達、ターツァさんに何度も……！」

（わかっちゃいねえな）

クリスティーナの声を遮ったのは、クリスティーナですら聞いたことの無い、酷く影を帯びたラキアの声だった。

（それ以上に忘れられない恨みってもんがあるんだよ。成り行き、本人に悪気がなくても、だからこそ行き場のない怒りが込み上げる。死んで行った奴らの為にも、生きている俺達がケジメを付けなきゃいけねぇんだよ！）

叫んだラキアの声に反応するかのように、〈バーザム改〉を覆う〈フレア・インレ〉ユニットから光が漏れ出す。それはバーニアやスラス

ターの光とは異なる、頭に突き刺さるような、それでいて優しい光。怒りや恨み、負の感情によって引き起こされた異変とは思えない現象だった。
（クリスティーナ！危険だ、下がって！）
無線から聞こえたファムの声に従い、咄嗟にコントロールグリップを後ろに引く。機体前方に付いているバーニアと前方に向けた脚からの噴射で、距離をとった〈リゼル〉は目の前で変貌する〈フレア・インレ〉ユニットの異形をそのカメラに収めていた。
「なに、これ……」
鳥の頭部のような機首ユニットをそのままに、両サイドに接続されていた三角形状のスタビライザーが後方に周り、９０度の回転の後に屹立。さながら天使の翼を彷彿とさせるように聳える。続いて機体中程の〈バーザム改〉を固定するメインユニットも回転、〈バーザム改〉を正面に向けるようにして止まると、その両腕の拘束を解除、連動した大型のアームユニットが展開された。最後にテールユニットが伸び、姿勢制御用のスタビライザーを構成すると、その変化は止まる。しかし、３０ｍ級のＭＡが展開、５０ｍ級の半人型を取るその様は禍々しく、そして神々しさすら感じるものであった。
（〈フレア・インレ〉ＭＳモード。殲滅の時間だ）

☆　☆　☆

「〈フレア・インレ〉ユニット、ＭＳモード展開。各種機能、セーフモードで推移中」
〈ジャミトフ〉の戦闘ブリッジ、ラキアの〈バーザム改〉、〈フレア・インレ〉を観測していたオペレーターが〈フレア・インレ〉の変形を告げた。
「無茶しやがって……！」
その報告を聞いたグローレンは拳を握る。戦闘中、ブリッジにいる身とはいえ、あくまでも自分はこの場ではただのお呼ばれの技術士官に過ぎない。それを示すようにあてがわれたのは折りたたみ式の臨

時シートだった。中央の艦長席に腰を沈めるニーゼスに目を向けたグローレンはその口元が笑ったように見え、その目を疑った。
ニーゼスは初めからこうなる事を知っていた？
目的を共有した自分達、反乱一派であったが、ニーゼス達本隊と自分のような各勢力への伏兵との間では、その間に起きていた様々な細事は共有出来ていない。ラキアの振る舞いに関しても、なにかあったのではと思わせる所が多く、グローレンは内心穏やかではなかった。
もしかすると……。
そこまで考えた時、不意に振り向いたニーゼスと目が合い、その思考は凍りついた。
ニーゼスの顔は笑み、その言葉では表現出来ないような壮絶なものに歪んでいたのだった。

☆　☆　☆

「こいつ……！図体がでかいくせに！」
迫る光条をバレルロールで回避したファムは視界に映る〈フレア・インレ〉を睨めつける。
明らかにこの挙動はニュータイプ、あるいは強化人間用に調整されたサイコミュを搭載している物故とわかる。しかし、「この距離で、思考が読み取れない……」呟くファムの表情は曇っていたが、ふと我に返ったファムは「ふふっ」と口の隅に笑みを浮かべる。
攻撃の接近はいつも通り、回避に間に合う程度で把握していたが、逆にいつも自分を苦しめてきた「戦う相手の意志」を読み取ることが出来ずにいた。敵意は身を刺すように殺到するし、撃墜すれば憎悪が身体を突き抜け、その不快感に吐き気を催すのだったが、その感覚を常とした今となってはそれが無い現状に焦りを感じているのだから笑ってしまう。
「……もしかして、私に向けての敵意では無い？」
あくまでも接近する自分を退けているだけであって、本気で狙っているのはこの〈ジャ・ズール〉ではない……？

だとすれば、自分の不完全な感応では読み取ることが出来ないのもうなずける。
「……彼らに何があったんだ？」
その答えはターツァとラキアのふたりが知っているのだろう。それを示すかのように、〈フレア・インレ〉はターツァの駆る〈リゼル〉へ殺到し、その巨体を活かしてじわじわと迫っていた。

「ラキア……お前」
背後から迫る巨体と、そこから放たれる光条を躱しながらターツァは口の中にそう呟いた。
ウェイブライダーに変形させ、距離を取ろうとするものの、マイクロミサイルとメガ粒子の群れに思い通りの軌道が取れずにいた。
自分に向けられた憎悪の理由をターツァはただ独り理解していたが、それに屈することは出来なかった。それを利用したニーゼスの凶行を許すわけには行かない。それだけを理由に、自分の過去の過ちを一人で抱え続けるしかなかった。
せめて、直接俺を詰問してでもくれれば。
そんな思いを何度したことか。しかし、自分自身その現実から目を背けようとしていたのも事実で、ラキアの謀反に気付かぬふりをしたのもそれによるところが大きかった。結果として〈レオントキール〉という自分達の家、そしてそこで待つ〝家族たち〟を見殺しにしてしまったのである。
ニーゼスやラキアが覚悟しているのであろう「もう戻れぬ道」というのはターツァも胸に抱いていた。
数発の被弾を切っ掛けに徐々に機体を襲う衝撃が大きくなる中、ターツァは過去を悔いる他に、せめて償いとしてこの戦いを終わらせる事しか選択肢を持た合わせていなかった。
――……て……お……て。……おきて！
頭の中に流れ込む声がわかった。
自分が自分の輪郭を失っている為に声を認識する以外に感覚はな

く、無意識の内に自分は死んだんだと感じていた。
―あなたはまだ死んじゃダメ……
再び流れ込む声。どこかで聞いたことのある声。
君は……。
確か前に聞こえた声に似ている。
前？
いつの事だ？
ああ、〈シルフレイ〉と戦っていた時……。
―そう、私は〈シルフレイ〉の中にいるの……
なるほど、だから聴こえたのか。
おぼつかない思考でなんとか結びつけた後、言いえぬ寒気のような感覚に襲われたイオリは周りを見渡す。
―あなたは狙われている……わたしは狙われている……
狙われている？
―そう……だからあなたは起きなければならない……

接近アラートの音でイオリは目を覚ました。覚醒しきらない頭だったが、響く鋭い痛みが徐々に身体の感覚を明確にし始めた。
目を開けるとヘルメットのバイザーが割れ、赤い雫が宙を漂っている。どうやら顔、あるいは頭に破片が傷を作ったらしい。
それを認めるとやっと動き出した頭が周りの状況を確認する。モニターに目を向けるとメインシステムの一部がダウンしていることが見て取れた。機体自体の損傷は少ないようで、叩きつけられた時に一部の装甲板と構造材が歪んだ程度で済んだらしい。
その表示の向こうでは二機の〈バーザム改〉が接近してくる様子が望遠映像に表示されている。さっきのアラートはこれによるものだろう。どうやらこちらが機能停止しているのを知っているのか警戒した様子はない。しかし、こちらが動けばすぐにでも攻撃を加えてくるであろう。
どうしたものか。考えを巡らせたイオリはふと夢の中で聞こえた声を思い出した。

間違いない、あれは最初の時に聞こえた声。
ファムが探していた少女の声。
〈シルフレイ〉に取り込まれた魂の声。
―そう、私はマユ……
マユ。それが彼女の名前。〈シルフレイ〉に眠る魂の名前。俺を導いてくれた名前。
「マユ、君は……」
―大丈夫。あなたならできる……
頭の中に直接流れ込む優しい少女の声は、イオリを包み込むように広がっていく。
「できるって、なにを……」
こんな機体の状態で何が出来るって……。
―わるいやつを倒すの
「どうやって……？」
―私を受け入れて
「受け入れる……」
どうやればいいのか。しかし、逡巡している時間はなかった。今にも2機の〈バーザム改〉が〈シルフレイ〉を確保しようと腕を伸ばしていたのである。
切羽詰まったイオリは、なかばヤケクソのように叫ぶ。
「……マユ、君の力を貸してほしい！」
―うん……！
頭の中に響いた声を合図に〈シルフレイ〉のメインモニターには「ＣｏＣｏｏｎ」の文字が現れる。続いてＢｕｎｎｙ、ｓ―ⅡＯＳの起動を示すアイコンがステータスバーに表示され、エラーを示していた各種ステータスは再起動されて正常値を示す。連動するようにコクピットシートがスライド、姿勢を固定するように拘束器具が展開された。
予想だにしなかった変化にイオリは一瞬躊躇したが、なるようになるという半ば盲信に近い確信めいた感情に任せ、イオリはさながら棺のような形状となったコクピットシートに身体を預けた。

キィィィンという甲高い駆動音を聞いたイオリは、次の瞬間、目の前に広がった宙域の光景に目を見開いた。
最初に〈シルフレイ〉と相対した時に見たビジョンに似たそれが、マユが見せたものだと理解するのに時間はかからなかった。しかし、それが間違いであることが頭に流れ込む情報から知れた。
「……俺達も強化人間だったのか」
―そう、だから私を感じれる。だから私とシンクロできる。
なるほど。そうだったのか。
イオリは衝撃的なそんな現実すら頭に流れ込む知識のひとつとして受け入れてしまっていた。それは強化人間としての記憶を思い出したからではなく、宙域に広がる自身の感覚が取り込む知識によって客観的に感じ取っていたからだった。
体勢を立て直した〈シルフレイ〉を見た、拘束しようと近付いていた〈バーザム改〉はその動きを止めようと〈シルフレイ〉に殺到する。
〈シルフレイ〉は立ち上がる動作のまま、一瞬で抜いたビームサーベルを振り抜いた。勢いのついていた二機の〈バーザム改〉はそれを利用した〈シルフレイ〉の不動の斬撃によって、それぞれが真っ二つに切り裂かれる事になった。
ふたつの爆発を背に、〈シルフレイ〉は赤く輝く双眸を煌めかせた。
そこからは昔から知っている、日常の習慣のようなスムーズな動きだった。後にインテンションオートマチックシステムと呼ばれる脳波を利用したシステムコントロールによって〈シルフレイ〉は簡易的な変形を遂げた。
―もともと〈シルフレイ〉は〈インレ〉を支援する為に開発されたユニットなの。
頭の中に流れ込んだマユの声が告げる。
「衛星軌道を周回する三機の〈シルフレイ〉が地上での〈インレ〉の作戦行動を支援するって言うことか」
初めて聞いたはずの〈インレ〉という単語。それは自分を飲み込む情報の渦の中から自然と既知の事柄として思考に染み渡っていく。
〈ＴＲシリーズ〉の集大成として計画された大型ＭＡ〈インレ〉は

ティターンズの崩壊とともに計画が放棄されたが、完成の暁にはかつての〈グリプス戦役〉の戦果すら覆したと言われている。
そんなＭＡの作戦運用を支援する為に開発された〈シルフレイ〉は〈ＴＲシリーズ〉のひとつとして開発されていた〈ＴＲ―５［フライルー］〉を原型としていた。衛星軌道上に常駐し、超高高度からの狙撃や〈インレ〉の弾道軌道による侵攻時の護衛機として活動する事が目的であった。
いま〈シルフレイ〉が変形したのは衛星軌道上からの狙撃用に準備されたフォームだった。両肩のビームキャノンを正面に向け、対ショック用に両腕脚は後方へ向けている。肩部大型スラスターの上に設けられたスタビライザーは屹立し、先端についたサブスラスターを後方に向けて姿勢制御に特化した体勢をとっていた。
「メガ粒子砲、チャージ」
両肩ユニット内部に搭載した専用のジェネレーター直結のメガコンデンサーへのチャージが始まる。
戦闘宙域の隅で半ば漂流を始めた〈シルフレイ〉の行動に気づく者はいない。
専用回路を使用しているため、限界までチャージするのにさほど時間はかからなかった。
あとは照準。ミノフスキー粒子の濃度は濃く通常の火器管制システムでは直撃を狙える距離ではなかった。しかし、今のイオリには手に取るように宙域の光景がわかっていた。視線の先には大型のユニット〈フレア・インレ〉を備えたラキアの〈バーザム改〉と、その更に後方の二隻のクラップ級。
「……〈ジャミトフ〉がいない？」
知るはずもない艦の名前を口にしていよいよイオリは可笑しさをこらえきれずに笑みを浮かべた。今まで自分はどれだけ無知であったのか、そんな自嘲と流れ込んだ情報の万能さへの呆れを含めた笑みだったが、それはすぐにかき消された。
―つまり、〈ジャミトフ〉は〈このＯＳ〉以外にもなにか狙いがある……。

「そういう事だろうな」
無線はミノフスキー粒子の影響でターツァ達に届く距離ではない。知らせるには……そうか、ファムへ直接……。
そんな意識を向けた直後、視界の中でラキアの〈バーザム改〉がこちらに気づいたようにモノアイを向けた。
その光景を見たイオリは自分の愚行を悟った。
感応波の制御を思い出したばかりのイオリが放ったファムに向けた念は宙域に広がった。既に強化人間である事を思い出していた、感応波のコントロールができるラキアはその念からこちらの位置を感じ取ったに違いない。
その時間は一瞬にも満たなかったが、その間に無意識の中で引き金を引いていたイオリは、メガ粒子砲の一撃が不発になる未来を見た。
後悔の間もなく、凄まじい衝撃をもって放たれた一筋に伸びる光条は、〈バーザム改〉を貫く直前で躱されてしまった。
かのように見えた。
「……っ!?」
バーニアを吹かそうとした〈バーザム改〉へと直行する一筋のスラスター光。
（……すまない）
そう呟いたターツァの声が頭へと流れ込む。
〈バーザム改〉の動きを押し返したターツァのリゼルはその勢いのままメガ粒子砲の光条へと突っ込み、蒸発する事となった。そんな特攻まがいの体当たりによって姿勢を崩した〈バーザム改〉はその場を貫き続けるメガ粒子砲の直撃を受ける羽目にあった。
大型の〈フレア・インレ〉ユニットはその表面を爛れさせ、融解した表面から内部へとメガ粒子砲の余波が流れ込む。
内部の推進剤や燃料といった可燃物を尽く燃やしたそれは、遂に〈フレア・インレ〉ユニットを貫いた。同時に爆発の衝撃で辛うじて残った表面の装甲材は全て吹き飛び、ひしゃげた内骨格の接合が弾け飛んだ。
一度吹き上がった炎は、燃えるもののない宇宙ではすぐに萎み、独

特な一瞬の閃光を残して消えた。
数秒間の出来事は異様に長く感じられ、流れ込んだ様々な既知を処理した疲労からイオリはすぐに意識を失った。あとに残った静寂が戦闘の終了を静かに告げていた。
つづく

第六話「真実」

「〈フレア・インレ〉ユニット大破、消滅。コアは離脱した模様」
カメラを横切るように伸びた一筋の光条が発した電磁波がもたらした影響は甚大だった。
〈ジャミトフ〉の艦橋に置かれた観測機器の殆どが機能停止か機能不全に陥り、観測員が右往左往する。その中で艦橋の後方、奥まった部分に設置されていた新型ＣＩＣシステムの観測員だけが冷静に状況を伝えていた。
「敵艦、艦載機は健在。友軍主力部隊の撤退を確認。……しかし、宙域のミノフスキー粒子が電磁波干渉を受けて正常の波形を保っていません。こちらでも観測できるのはここまでです」
新型ＣＩＣシステムを動かしていた1人が声を上げた。艦橋にいる他のクルーにはない技術屋の空気を漂わせた彼は、実際その新型ＣＩＣシステムの開発に携わっている人間だった。
「まあよい。旧来のシステムが見ての通りの以上、そこまでの観測が出来ただけでも充分だ。次世代の艦にはぜひ搭載したいものだな」
ニーゼスはあくまでも平静を装った声で答えたのであった。

☆　☆　☆

「なんですって？」
戦闘後のメンテナンス作業が始まろうかという〈アルストロメリア〉の格納庫に響いたのはファムの鋭い叫びだった。
〈アルストロメリア〉への帰還後、コクピットから飛び出したファムはその場にいた整備員から人伝に〈シルフレイ〉が〈ジャミトフ〉の艦載機に回収されたことを聞いた。
「それで、イオリは無事なのか!?」
とそこまで口にしてファムは目を見開く。今自分は〈シルフレイ〉の安否ではなく、それに乗るあの少年の安否について気を巡らせていた？

馬鹿な、確かに彼とは何度か戦場で背中を預けあった仲ではある。だが、長年追い続けていた〈シルフレイ〉、特にその中に取り込まれたかもしれないマユの事より先に彼のことを……。

そこまで巡らせた思考は「ええ、そのようです」と返ってきた報告に一度閉ざされる事になった。

「出張ったままの観測班（アイザック部隊）からの情報では〝〈シルフレイ〉の損傷は大きくない〟との事で、恐らくはパイロットも無事であるかと」

「そうか。それならいい」と残したファムは、先の動揺を悟られまいとその場を後にした。

その頃、〈アルストロメリア〉のブリッジではサンダースをはじめとした艦の責任者達によって会議が設けられていた。その内容はと言うと至極簡単で、この後の身の振り方についてであった。

当然だ、ここに至るまでにファムの執念による追跡があったといえども、この事態の責任の殆どは居候の身であったターツァにあり、そのターツァは先の戦闘で戦死している。もうこれ以上この事態に首を突っ込まない、突っ込みたくないというのはごく当然の考えであった。そして、それはこの艦のクルーの大半の考えでもあった。

しかし、艦長であるサンダースはというと「うーむ……」と思案したきりであった。

「艦長……！」

副長のアビーが決断を迫る声を上げるが、サンダースはその視線をあげることは無かった。

「遅くなりました」とファムがブリッジに入ってきたのはその時だった。

彼女に向けられる視線は敬意の中に少なからず訝しむ色が含まれていて、ファムはそれを知りながら務めて平静を装っていた。

沈黙が支配する部屋の中にドアの閉まるエアの音が響くのを合図に、「サンダース艦長、〝目標〟が敵艦に捕縛された事は」と敬礼とともにファムは切り出した。

「ああ、聞き及んでいる」

「では早急に……」
サンダースの返事を知っていたかのように畳み掛けるようにファムは口を開く。しかし、それは「あなた、いい加減にしなさいよ……！」と続いた声にかき消されていた。
「ウィル女史……」
ウィル・テンディース、〈アルストロメリア〉に乗り組む参謀部の人間だった。
ジオン残党勢力の多くが寄合所帯である現状では各戦力単位の連携が強くとも、ジオン共和国、或いは袖付きの中枢戦力からの指示に背くような事態が不安の種である事は言うまでもない。今でこそフル・フロンタルというカリスマによる求心力が働いているものの、それ以前より組織されている残党勢力には上位組織からの監視役兼参謀秘書としてウィルのような人間が艦に配置されることがあった。
そのような背景があり、ウィルの発言は艦の中でも艦長に近い、時によってはそれ以上の権力を持つ。旧世紀の社会主義国家にあったような政治将校に似た職務である。
ファムが〈アルストロメリア〉における求心力と言えども、この混乱の中で、そんなウィルに鉾を向けられたという事はつまり、今のファムの発言はなんの力も持ちえないのである。
だが、そうなるであろう事はファムにとっても織り込み済みの事だった。
「ん、ファム大尉。それは？」とサンダースが目を向けたのは、ファムが手に持っていた数枚の記録フィルムと小型のメモリディスク。ファムはその指摘に待ってましたとばかりにサンダースに手渡した。
「これはターツァ大尉が遺したものです。ご覧下さい」
説明と共に1枚目をサンダースに示したファムは、同時にメモリディスクを部屋のモニターへと繋いだ。
「……これはＭＳ？」
フィルムに映し出されていたのは、サンダースが口にした通りＭＳに違いなかった。だが、その口調の通りそれをＭＳと呼ぶには些か抵抗がある。

「随分と小さいな。……それでこれが？」
　驚きの混ざった声で呟いたサンダースはファムに先を促す。報告がこれだけではないことを知っていると言わんばかりの口調だった。
「ＲＸ―１２４、通称〈ウーンドウォート〉と呼ばれるこの機体はティターンズ時代に設計、開発がされたものです。ご覧の通り小型の機体ですが、性能面では並の量産機の比ではないと聞きます。しかし、問題はそこではなく、この機体の最大の特徴にあります」
　続いて２枚目のフィルムをサンダースに差し出す。
　受け取ったサンダースは映された物を見るなり目を見開いたきり、口を開かなかった。その様子に集まっていた他のクルー達もそれをのぞき込んだ。
「いいですか、ターツァ大尉が残した資料によれば……」

☆　☆　☆

　うっすらと開いたイオリの視界に、最初に飛び込んできたのは嫌なくらい真っ白な天井だった。同時にベッドの傍らに置かれた医療機器の存在も目に入る。先の戦闘が終了してどれくらい経っただろうか。肉体の意識が失われたあとも、感覚的に自分の身に何が起きているのかを近くし続けることが出来たのは先の戦闘での一種の〝覚醒〟のおかげか。その影響なのか揺蕩う意識はイオリ自身の過去を回想していた。〝忘れさせられていた〟過去を含めて。
「……なるほどな」
　意識を取り戻したばかりの体は感覚がぼんやりとしている。その一方で手足につけられた枷が生む重さを感じ取ることは出来た。
　忘れていた、正確には書き換えられていた過去を思い出したイオリはその思考、精神に同様の重さを感じていた。
　〝覚醒〟によって得られた情報が正しければ、自分はラキアと同じく強化人間である。一年戦争の戦災孤児として赤ん坊のうちに孤児院に引き取られたイオリは、６歳の誕生日にティターンズの工作員によって養子縁組を偽装されてニュータイプ研究所へと連れていかれ

た。
イオリが強化人間にされたのは地上の施設である事は覚えていたが、具体的な地名までは定かではない。しかし、あまり良好な成績を残せなかったイオリは後に宇宙へと上げられることになる。その先が〈ネビロス〉だった。そこでの記憶もはっきりとしていない。そこを後にする時に施された記憶処理が一番強かったのだろう。その後士官学校に送られる訳だが、その段階で与えられた偽りの記憶が今のイオリを作り、ターツァやラキア、クリスティーナ達との生活が始まる。
今まで薬なのか何かの暗示なのか、完璧に忘却の彼方へと追いやられていたその記憶は、蘇るとともに今までの擬似記憶を上から痛いほど鮮明に塗り替えていく。
確かに戦災孤児だったことは間違いではないが、まさか自分自身も強化人間だったなんて、疑ったことすらない事実が自我を容赦なく叩きのめそうとする。気を抜こうものなら一瞬のうちに発狂していたやもしれない衝撃をなんとか飲み込んだイオリは、今度は成り行きとはいえターツァを手にかけてしまった後悔に苛まれることになった。
だが、唯一の救いは彼の今際の念が恨みではなかったことだろう。ターツァの最後の言葉は直接届くことは無かったが、感応野が全開になっていたイオリに念として届いていた。
すまない。出撃前のような謝罪から始まったその言葉はイオリが思い出した自分の過去を補完すると同時に、ラキア達が何をしようとしているのかを知らせた。
「ティターンズの再興……」
ラキア達が引き連れていた機体、〈バーザム〉を見れば自ずと答えは導かれるのだったが、そんな馬鹿げた話があるとは夢にも思えなかった。
しかし、一方ではジオンの再興を目論む人間もいるわけで、多かれ少なかれそのような人間が現れることは不思議ではなかった。そして、その為に彼らが向かう先は……。
そこまで考えて、イオリはため息をついた。

「なあ、あんたいつまでここにいるつもりだよ」
虚空に向けて投げかけた言葉は、広くはない部屋に僅かに反響し、自分へと帰ってくる。
〝仕方ないじゃない。私にはもう身体がないんだから〟
それに返事を返したのはか弱い少女、マユの声だった。尤も耳に聞こえる形での声ではなく、あくまでイオリにしか聞こえることの無い〝念〟に近い代物だったが。
〈シルフレイ〉の中でお互いに共鳴した二人は〝覚醒〟の際に意識を交わらせていた。その結果として輪郭がぼやけた二人の意識は収まるべき器がひとつしかない為に、イオリの身体の中に入り込むしかなかったのである。
「そんな莫迦な話があるかよ……」
だが、ありえるのだろう。先の戦闘で得た既知や開けた視野。人間の可能性は無限大である……。
「目が覚めたか」
そんな思考を遮るようにかかった声に顔を向けると、重々しいエアロックの扉を潜ったラキアがそこにいた。
「……久しぶりだなクソ野郎」
「再開の挨拶にしては随分な物言いだな」
その顔を認めるなり睨めつけたイオリに苦笑混じりに返したラキアはベッドの脇に置かれた端末を手に取った。イオリがこの艦、この医務室に運ばれて以来のバイタルデータが記録されたそれをしばらく眺めたラキアは「観たんだろ？」と口を開く。
「は？」そう聞き返したイオリが1度外した視線をもう一度ラキアに向けると、彼の目は一切の感情を抜きにした空虚な黒を湛えていた。
「観たんだろ？」
繰り返すラキアの声、今までのおどけた様子やイオリと敵対して以来の冷徹を演じる様子が一切なく、その事実の正誤についてただ確認しているに過ぎない無機質なものだった。
「……」
無言を返事にしたイオリに、それを肯定と認めたラキアは「おっか

しいよなァ……」口元を綻ばせた。しかし、それは笑いではなく自嘲の気配を漂わせた呟きで、その証拠にその眼はなにも見ていなかった。
「なんで俺たちはこんな目に遭わなきゃいけなかったんだよ……!?いつまでこんな思いを続けなきゃいけないんだよ!!」
堰を切ったように流れた言葉はただただ姿の見えない誰かへの呪詛でしかなかった。その言葉を吐いたところで何も変わらない、何も変えられない、誰にも届かない。それをわかっていながら飲み込むことの出来ない弄ぶ感情は行き場を失って言葉の奔流として吐き出されるしかなかった。
「……それが理由か?」
「……」
問いかけるイオリの言葉に返事はなかった。俯き、掻き乱したボサボサの髪が隠した表情は読み取れない。ただ荒い呼吸が、鈍く聞こえる艦の駆動音と共に響いていた。
「それが理由か?」
再び問いかけたイオリは続く、乾いた音と衝撃に目をつぶった。一瞬の跳躍でイオリの胸ぐらを掴んだラキアの反対の手がその頬を殴っていた。
「昔からムカつくんだよ……!　俺より劣ってる筈の出来損ないが……!!」
深くため息をついたラキアは、おもむろにイオリの拘束具を外し始めた。
「ニーゼス様がお会いしたがっている。着いてこい」

☆　☆　☆

格納庫のキャットウォークでクリスティーナは手すりに身を投げ、虚空を見つめるだけの時間を過ごしていた。目線の先には自分が乗っていた〈リゼル〉の修復作業の風景があったが、いくらユニバーサル規格とはいえ、予備パーツのないネオ・ジオンの艦では補修には

限界がある。しかし、クリスティーナの憂鬱の理由はそれだけではない。〈レオントキール〉から共に逃げ込んで来た二人を同時に失ったのである。更にその原因が、気に食わない奴だったとはいえ、他の二人と同じく士官学校からの付き合いだった仲間の裏切りとあれば誰でも正常な精神状態でいられるはずがない。

帰投してからというもの、何も口にしていないはずだったがお腹が減るという感覚すらしないし、何かを食べる気にもならない。　ここに来てから唯一の頼りだったイオリすらいなくなった今、艦に居場所などなく、ただただ格納庫で自分の機体を眺めるしか時間を使うことが出来なかったのだ。

「はぁ……」

途方に暮れ、何度目かもわからないため息をついたそんな時だった。

「あのぅ……ちょっとお姉さん」

背後から聞こえた声に驚きながらも振り向いたクリスティーナは眉を顰めた。作業用のつなぎを着た、ボサボサの髪が特徴の整備士が近づいて来る。

辺りを見回して誰もいないのを認めたクリスティーナはその整備士が自分に話しかけていると理解した。

「えっと……なにか御用？」

沈んだ感情のせいか、ぎこちない喋り方になりながら

「いえね？　あの、ただの趣味なんですけど、さっきラジオを聴いてたらですね、いや、ホントは禁止されてるんですけど……それはいいとして、どうやらウチらが関わってる事って公になってないらしんすよ」

視線を合わせずにまくし立てるように喋る整備士に、目を白黒させるクリスティーナを見て整備士は我に返ったように目を見開いた。

「あ、ごめんなさい！　ウチ、エレナって言います。エレナ・ドーキンス。この艦でモビルスーツの整備やってます」

慌てたように自己紹介をするエレナにクリスティーナは目を丸くしたが、すぐに「ふふっ」と笑みを浮かべていた。

「エレナさんね、よろしく。……それでラジオで聞いたことについて詳しく聞かせてもらってもいいかしら？」
笑顔で促したクリスティーナに、エレナはラジオから聞いたことを書きなぐったメモ用紙を見せながら、様々なことを話し始めたのだった。
それを要約すると、地球圏でのジオン残党の暴動は大小問わず、少なからずニュースで報道されるの常だが、連邦の艦が少なくとも2隻沈んでいるのにも関わらず、匂わせるような報道すら一切なされていないという。情報の遅れがあったと鑑みても最初の〈シルフレイ〉の稼働試験にまつわる騒動ぐらいはマスコミが掴んでいてもおかしくはないはずだ。
「……たしかに妙ね」
軍縮が騒がれる昨今、再軍備を後押しするような報道は各社が控えているものの、実際問題自分の身に関わる治安上の問題に関しては平和ボケし始めているとはいえ世間が大きく関心を寄せる事柄である以上、少なくとも事象のあらましだけは頻繁に報じられている。いくら秘匿したい事実があるとしても、ジオン残党に襲撃された、という事実ぐらいなら何処かから流れてそうなもの。となると完全に軍の上層部で情報統制がかけられていると見える。
「なにか重要な情報になるかもしれない。エレナさんから言うのがまずくても、よそ者の私なら『部外者がなんか言ってる』程度でも誰かの参考になるかも……。とりあえずファムさんに伝えてみましょう！」

☆　☆　☆

「情報の統制はバッチリかな？」
シャトルのリクライニング昨日を弄びながらデヴォンが尋ねる。
「はい、連邦の情報部としても美味しい話では無いのでしょう。現場の後処理こそ丸投げですが、参謀本部には偽の情報を、報道には既に〝鼻薬〟を嗅がせているようです」

淡々とした返答を投げるのは、デヴォンの隣に座り端末とにらめっこをする女性。かつて地上の執務室でデヴォンへの報告を行っていたルーシー・ワトソンだった。
「我社の諜報部はいい仕事をしてくれるね、流石だ。それに君も完璧な仕事をこなしてくれる。本当に頭が上がらないよ」
デヴォンは半分茶化しつつ、もう半分は本心からの評価を口にしながらその視線を窓の外へと投げた。
デヴォン達を乗せたシャトルはいよいよ目的地、L4ジャンクションの目前へと迫っていた。その途中、地上にいた間に今までに培ってきた様々なコネを駆使して自体を表沙汰にさせないように根回しをしていた。これはデヴォンの標榜する〝大義〟のためであると同時に〝互助会〟に対して、せめてもの償いのためでもある。そしてそれから……
「グローレン。君に死なれる訳にはいかない」

☆　☆　☆

「待っていたよ、イオリ。イオリ・ノースフィールド」
エアロックのドアをくぐったイオリを歓迎したのは簡易ベットに腰をかけ、そんな台詞を呟くグローレン・ベルバーグだった。
ラキアに連れられてイオリが通されたのは、〈ジャミトフ〉の居住スペースの端に据えられた酷く味気ない個室。わざわざラキアが様付けをする程の人物がこんな所に？　という疑問とあらためて向き合うこの事件の重要人物の酷くやつれた様子に違和感が湧き上がる。
「……貴方が」
呟いたイオリは思わずその男を睨めつけていた。
「……そんな顔をしないでくれ。僕だって君とこんな形で再会するのは不本意なんだ」
「再会……？」
薄く笑ったグローレンの言葉にイオリは怪訝な声を漏らした。
「……そうか。覚醒の兆候があったと聞いたがどうやら完全ではない

ようだね」
なにやら納得した様子のグローレンはそう独りごちると、おもむろに腰を上げてイオリへ歩み寄りながら手を伸ばす。
ぎくりとしたイオリは不意に言いえぬ恐怖に似た感情が過り、咄嗟にでた「やめろ」という声と共にその手を払い除けようとしたのだが。
「……!?」
その手が触れた瞬間。目の前の景色が遠く飛び去ったのである。
フラッシュバックする知らない光景。頭に響くのは聞き覚えのない優しい声。しかし、それらは段々と湧き上がる恐ろしい、この世のものとは思えない恐怖によって塗りつぶされていく。
鼻を突き刺すような薬品の臭い、気の遠くなるような過酷なトレーニング。横たわった自分の頭に伸びてくる鋭いメス……。
〝イオリッ!!〟
頭の中で弾けた声で、イオリはハッと周りを見渡す。味気ない部屋で、目の前に迫ったグローレンの手とそれを防ごうと持ち上げた自分の腕。そしてその様子を壁にもたれて眺めていたラキア。
「……どうやらその様子だとなにか思い出したようだね」
呟いたグローレンの表情は、天井の照明が逆光のせいでよく見えない。しかし、喜びと言うより安堵に近いその声色にはどこか陰りがあるように思えた。
「……俺を、俺の身体を弄ったのも……」
動揺を悟られないように、ショックで乱れた呼吸を整えながらイオリは呟くように声を漏らした。
「……」
無言と小さい首肯を答えとしたグローレンは、その手を降ろす。
未だ落ち着かない呼吸を整えながらイオリはグローレンを睨めつけた。薄く皺の刻まれた細いその男の表情は読めなかったが、何故かそこに悪い印象を見つけることが出来ず、その違和感からさらにイオリの思考は混乱と苛立ちに苛まれる。
「お前……一体なにを……」
考えているんだ、と続けようとした言葉は「シュヴァルツサザン少

尉、至急ブリッジへ。二ーゼス司令が及びだ」と響いた放送にかき消された。
「ふん……」
イオリの様子を眺めていたラキアは興が冷めたと言わんばかりに鼻を鳴らし、部屋を出ていく。
それを見送ったグローレンはどこか安堵した表情を浮かべていた。
「これでようやく話が出来る。……イオリ、落ち着いて聞いてくれ……」
そう前置きをして口を開いたグローレンの話はとても衝撃的なものだった。
つづく